

第Ⅱ章 河田山遺跡群

第1節 旧石器時代

1. 出土地点の概要

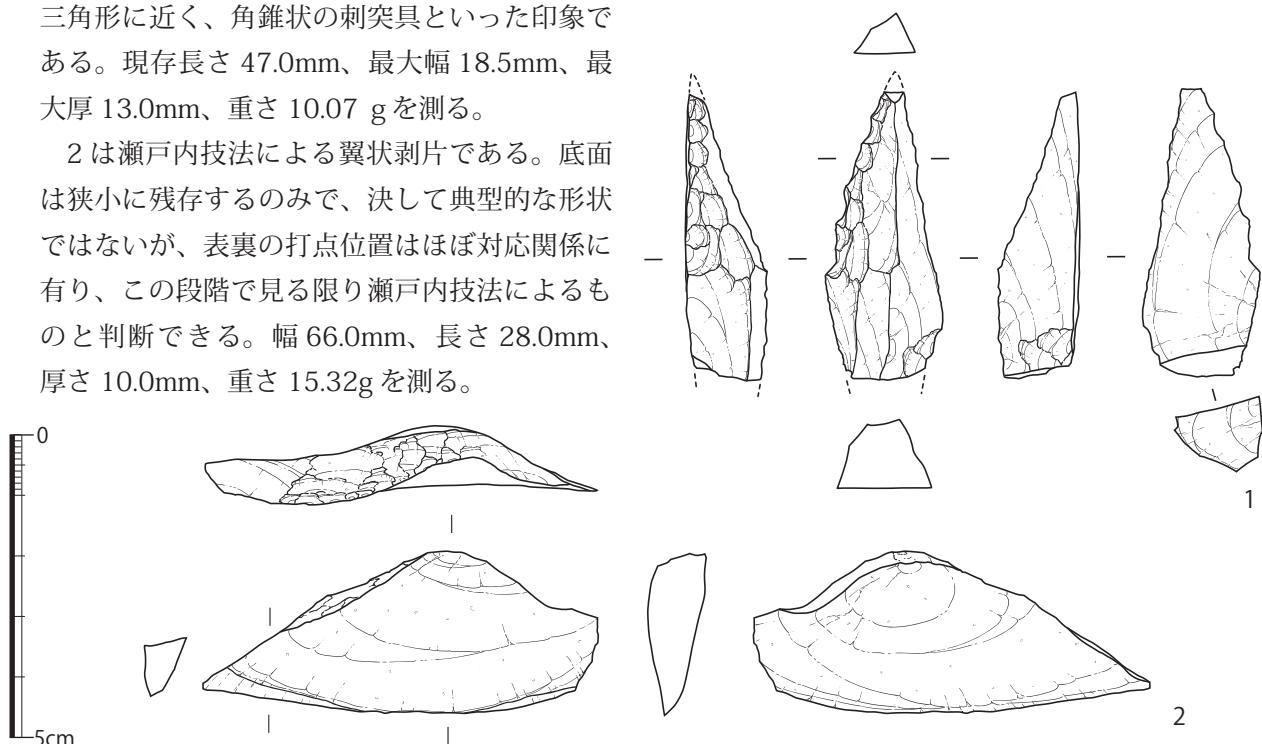
造成地内において旧石器時代遺物を確認したのは、南端最高所となるB3区である（第11図）。本区は河田山古墳群のI支群にあたり、急峻な痩せ尾根に弥生時代後期の高地性集落が重なっている。石器は高地性集落西側環濠（環濠2）の流土流中からの発見で、わずか4点だが、当時は小松市域で初めての旧石器時代遺物の発見となった。

2. 出土石器

発見した石器4点はいずれも黒色の安山岩製で、旧石器時代の安山岩製石器に特徴的な淡灰褐色で多孔質に表面が風化している。図化したのは2点で、図化しなかったもう2点は碎片の部類であるが同様の風化度合いから旧石器時代のものと判断した。

1は、ナイフ形石器で、先端部の僅かと基部側を折損している。刃部を成す右側の剥離面がポジティブな石核底面で、表面中央下半の剥離面にその打点が残ると考えているので、第1工程Ⅱ段階以降の盤状剥片から第2工程第1枚目として剥離した翼状剥片を素材としていると推定した。左側縁に先端部を作出するように細かい整形加工を施し、右側縁の基部側にも弱い加工が見られる。表面上半部の大きな剥離面も細部整形に先行する整形剥離の可能性がある。鋭利な刃部というよりは、断面三角形に近く、角錐状の刺突具といった印象である。現存長さ47.0mm、最大幅18.5mm、最大厚13.0mm、重さ10.07gを測る。

2は瀬戸内技法による翼状剥片である。底面は狭小に残存するのみで、決して典型的な形状ではないが、表裏の打点位置はほぼ対応関係に有り、この段階で見る限り瀬戸内技法によるものと判断できる。幅66.0mm、長さ28.0mm、厚さ10.0mm、重さ15.32gを測る。



第9図 旧石器時代の石器 (S = 4/5)

3. 位置づけ

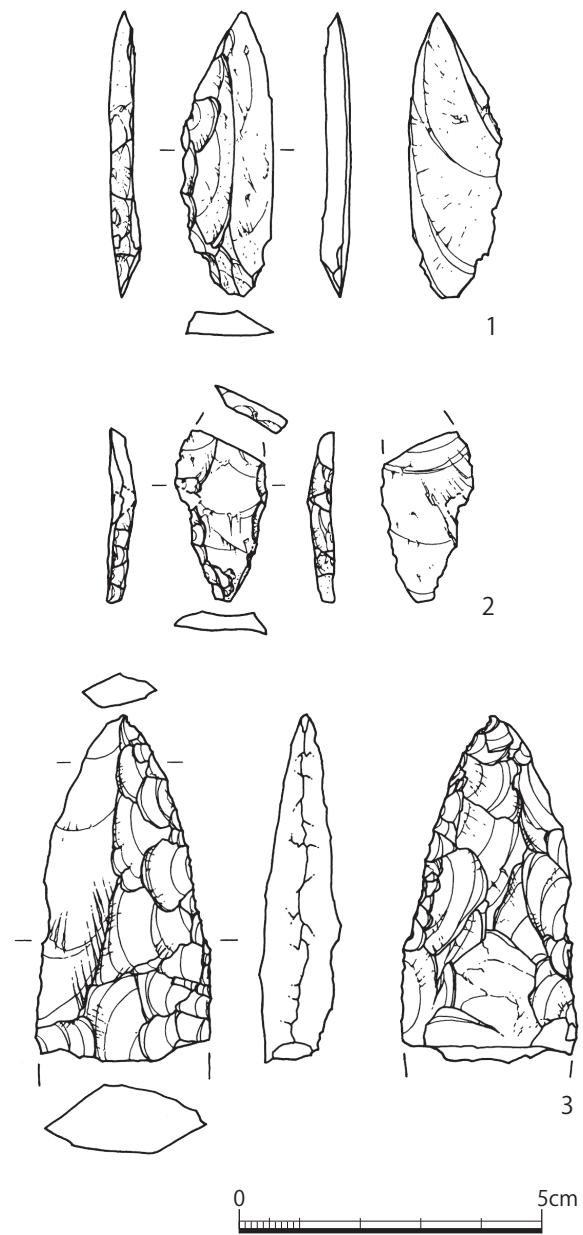
本遺跡と同じ能美丘陵として北に連続する能美市域では、灯台笹から宮竹にかけての手取川左岸丘陵部において県内でも数少ない充実した石器群が発見されている。ところが、小松市域では旧石器時代遺跡には恵まれない。表層地質の分類（石川県 1988）では、手取川左岸丘陵部は中部更新統の未固結堆積物によって覆われており、頂部に平坦面や緩斜面地形が段丘状に残っている。そのため旧石器包含層となる上部更新統の堆積も良好である。しかし、小松市域になると表層地質はほぼ中新統のみからなり、頂部平坦面がほとんどみられない起伏の激しい痩せ尾根地形が優勢となっている。旧石器時代には生活面があったとしても、その後の浸食によりほとんどが流出しているのであろう。河田山での旧石器発見後、能美市域にほど近い八里向山遺跡群でかろうじて旧石器時代の遺物集中区を検出しているが、やはり、安定した出土状態にはなかった。ただ、河田山遺跡および八里向山遺跡ともに僅かな資料とはいえ、非常に重要な位置づけとなるものである。

能美市灯台笹・宮竹旧石器時代遺跡群で主体となる石器群は、頁岩を用いた石刃技法と石刃製造器を特徴とする東山系石器群に対比可能で、東北地方を分布の中心とするその石器群のほぼ南限にあたる。その遺跡群と丘陵が連続する小松市域だが、未だ明確な東山系石器群は発見されていない。

今回報告の瀬戸内系石器は良好な資料であり、前述の八里向山C遺跡においても、同系統のナイフ形石器が発見されている（第10図1）。また、八里向山D遺跡では信州・関東系の有樋尖頭器（3）、八里向山B遺跡では二側縁加工ナイフ形石器（2）が出土している。いずれも単発的とはいえ、茂呂系石器群と瀬戸内系石器群に関連する資料が錯綜している点で注目される。

八里向山遺跡の茂呂系石器群は地元の流紋岩を用いているが、瀬戸内系石器群はすべて安山岩を選択している。安山岩自体の産地は不明だが、当地では、安山岩といえば決まって横長剥片という傾向があり、瀬戸内技法自体が、その故地で安山岩の一種であるサヌカイトと結びついた技法であることと無縁ではなく、北陸に波及した瀬戸内系石器群が同系統の石材を選択するという強固なつながりを維持した状態で展開していたと言える。

時期的には、相模野台地の段階編年（諏訪間 2019）で対比すれば、河田山遺跡の瀬戸内系石器群はやや古く段階Vの可能性があるが、いずれにしてもA-T降灰以降の所産で、段階VI併行と考えている。

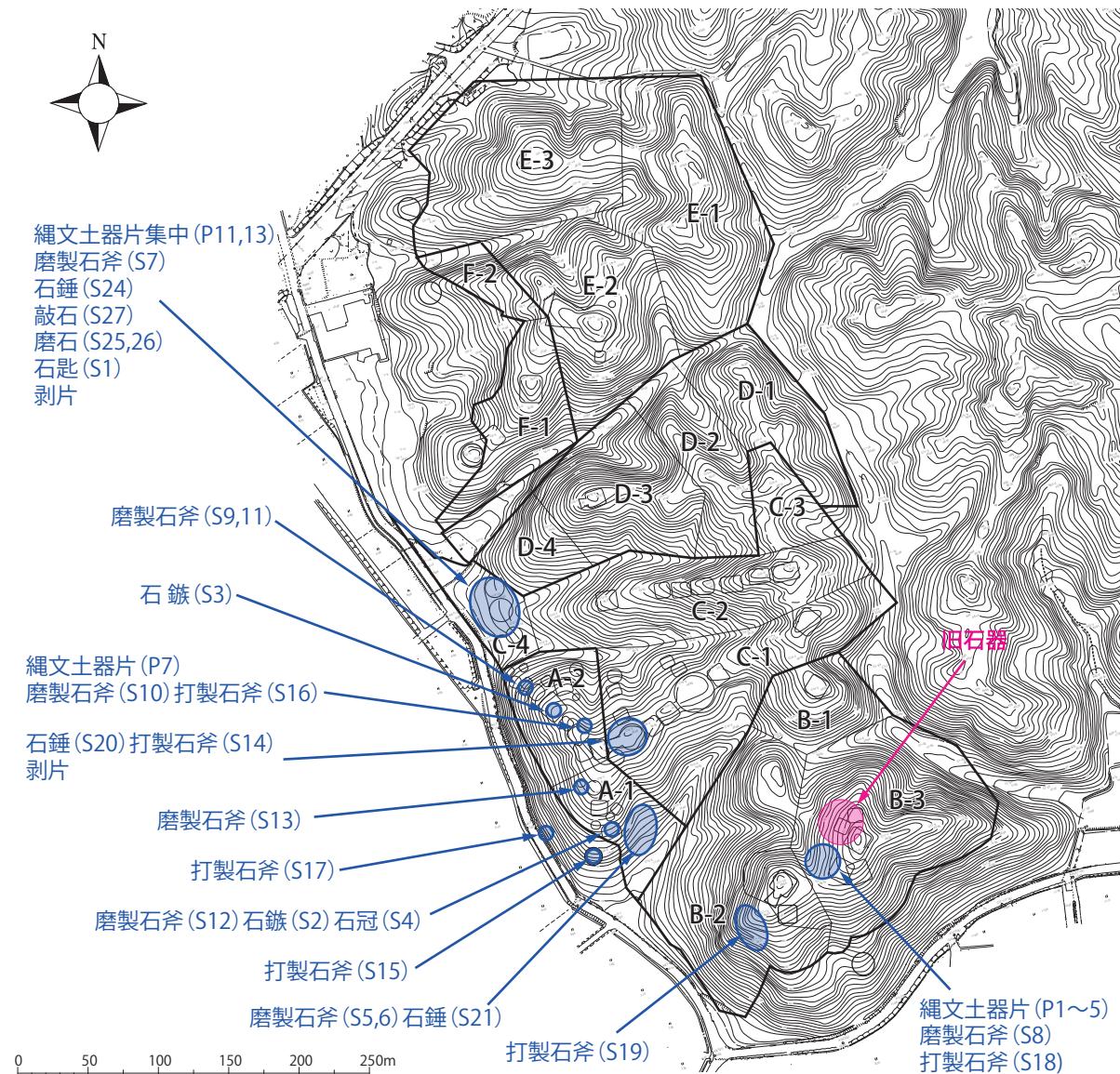


第10図 八里向山遺跡の旧石器時代遺物 (S=4/5)

第2節 繩文時代

1. 遺物分布の概要

縄文時代の遺物は、A-1 区から A-2 区、C-4 区にかけて石器を中心に分布している。ただし、全面調査を行ったのは、調査区割りに示したとおりの範囲であり、遺物の検出もこの区域に限られる。したがって丘陵全体の把握ではなく、また、調査担当者の注意力による差も含む。この中で、土器集中を伴う分布区域は C-4 区で、特に 49 号墳墳丘中央部に一括集中が形成されていた。丘陵内部で検出された器種は磨製石斧と打製石斧、そして石鏃、石匙と狩猟採集や伐採等の活動に伴いうものとなっており、敲打器と磨石、その他剥片が C-4 区でのみ検出されている。したがって、生活のベースを求めるすれば C-4 区の丘陵裾部段丘面で、縄文時代の立地としては、よくみられる傾向である。また、H 区との注記された縄文土器一括と石錐 2 点が保管されているが、その調査区の位置については照合できなかった。おそらく、E-1 区の北ないしは北東の丘陵部ではないかと考えている。



第 11 図 縄文時代の遺物分布 (P は土器、S は石器の実測図番号)

2. 繩文土器

縄文土器は、集中的に出土した 49 号墳資料のほか、B-3 区、H-3 区等で出土している。

破片数でみるとまとまった資料といった印象を受けるが、出土数自体は決して多いものではなく、洗浄、分類の後にもう一度見直すと、同一個体片と考えられる土器片が集中的に出土したとわかる。

第 12 図に掲載した土器は次の 4 種類に分類した。複数図示したものは、特に断りがない限り、同一個体片と考えられる資料である。

I群 (1 ~ 6)

環付つきの縄文が特徴的な土器である。1 ~ 5 は B-3 区北西テラスの出土であり、6 は 34 号墳の調査中の出土である。個体としては、1 ~ 5 と 6 で 2 個体分の資料と考えられる。

土中の環境要因のためか二次的に酸化が進んでいるらしく、器面の調整や縄文の詳細は判別できないぐらいに傷んでおり、拓本も載せてはいるが、辛うじて環付らしいテクスチャーが読み取れる程度である。器形としては尖底となる砲弾形の深鉢形土器である。

編年的には、前期中葉に位置付けられる。

II群 (7)

1 点のみ、49 号墳の調査中に出土した。細い半隆帯と粘土紐貼付帯で装飾帶している。器形や文様構成は不明だが、器壁は薄く、小型の器種と思われる。

編年的には、中期前葉に位置付けられる。

III群 (8 ~ 10)

いわゆる縁帶文土器に類似した土器である。H-3 区包含層の出土である。

文様としては磨消縄文を特徴とする型式だが、資料中で縄文の部分はわずかであり、意匠を構成する沈線部分には縄文が伴わない。図化していない体部片には縄文地文のみの破片もあり、9 のように体部まで文様意匠が及ぶ資料を勘案すれば、複数個体分の資料といえよう。

編年的には、北陸で在地化した気屋式の範疇で、後期前葉に位置付けられる。

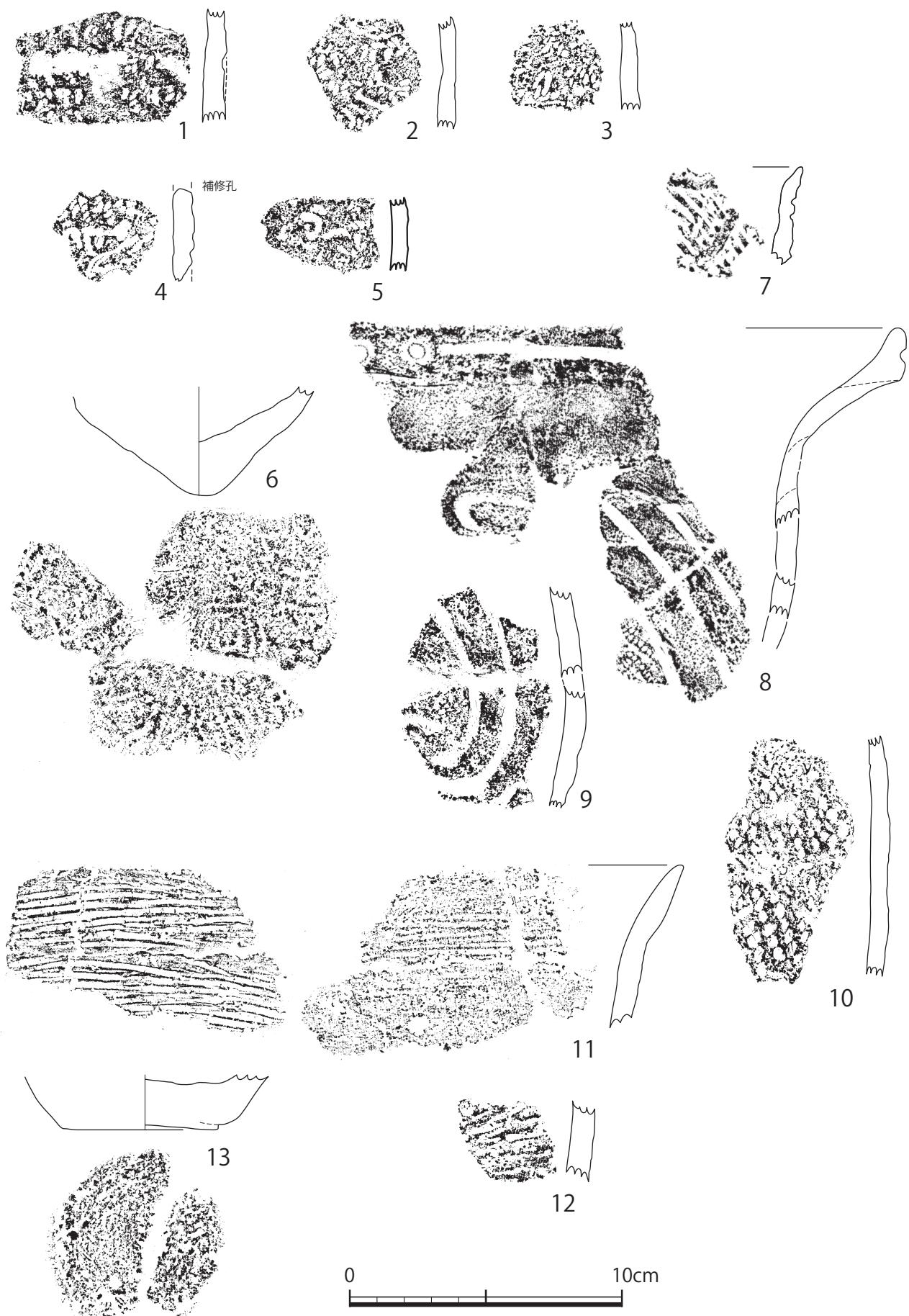
IV群 (11 ~ 13)

表裏条痕調整の土器であり、条痕はイネ科茎束を原体としていると考えられる。出土した破片は多数あるが、出土位置のちがう 12 を除いて、ほかは全て同一個体片と思われ、これらから、土器としての特徴を捉えやすい口縁部と底部を図化した。器形は全体的に外傾し、口縁部付近にわずかな括れがある。整形も調整も雑な作りで、文字通りの粗製土器と言える。

編年的には、晚期後葉に位置付けられる。

河田山遺跡出土縄文土器観察表

番号	実測	出土位置	分類	器形	胎土	色調	焼成
1	J-5	B-3 区 北西テラス I 区	前期中葉	深鉢	やや粗 (1mm 以下の白色粒を含む)	10YR 7/4	やや良
2	J-6	B-3 区 北西テラス I 区	前期中葉	深鉢	密 (1mm 以下の白色粒 [海面骨針 ?] を含む)	7.5YR 7/4	やや良
3	J-7	B-3 区 北西テラス I 区	前期中葉	深鉢	密 (0.5mm 以下の砂粒を含む)	10YR 7/4	やや良
4	J-8	B-3 区 北西テラス I 区	前期中葉	深鉢	密 (1mm 以下の白色粒・砂粒を含む)	10YR 7/3	良
5	J-9	B-3 区 北西テラス I 区	前期中葉	深鉢	密 (0.5mm 以下の白色粒・砂粒を含む)	外) 5YR 7/4, 内) 10YR 7/4, 断) 10YR 4/1	良
6	J-13	34 号墳 タチワリ 5+13	前期中葉	深鉢	密 (1mm 以下の白色粒・砂粒を含む)	外) 5YR 4/6, 内) 5YR 7/4, 断) 10YR 4/1	良
7	J-12	49 号墳 48	中期前葉	深鉢	密 (1mm 以下の白色粒・赤色粒を含む)	外 / 内) 10YR 8/2, 断) 10YR 4/1	やや不良
8	J-1	H-3 区 AB-1SB+A-1 グリ +B-2 グリ	後期前葉	深鉢	やや粗 (1mm 以下の赤色粒・砂粒を含む)	7.5YR 7/6	良
9	J-2	H-3 区 AB-1SB+A-1 グリ	後期前葉	深鉢	やや粗 (1mm 以下の赤色粒・白色粒を含む)	7.5YR 7/6	やや不良
10	J-3	H-3 区 A-1 グリ	後期前葉	深鉢	密 (1mm 以下の白色粒・赤色粒を含む)	10YR 7/6	やや良
11	J-11	49 号墳 117+118+119+123	晚期後葉	深鉢	粗 (3mm 以下の砂礫粒を含む)	外) 7.5YR 7/4, 内 / 断) 10YR 4/1	やや不良
12	J-4	H-3 区 B-3 グリ	晚期後葉	深鉢	やや粗 (1mm 以下の砂粒を含む)	10YR 8/2	やや良
13	J-10	49 号墳 114+115	晚期後葉	深鉢	粗 (5mm 以下の砂礫粒を含む)	外) 10YR 7/3, 内 / 断) 10YR 6/1	やや不良



第12図 河田山遺跡群出土縄文土器

3. 縄文時代の石器

匙石（第13図1）

横型石匙で、前期に比較的多く見られる典型的な銀杏葉形である。薄く幅広な茎部から肩は内湾し、刃は均整に外湾する。主要剥離面を残すことなく入念な調整剥離を施している。出土位置の49号墳では晚期土器の一括があり、時期的には整合しない。ただし、中期前葉の土器片や、A-2区34号墳には前期の尖底土器が出土しており、それらに伴うものかもしれない。

石鎌（第13図2、3）

2は有舌尖頭器タイプ、3は極めて薄く体部菱形の尖基である。

石冠（第13図4）

御経塚遺跡では石鋸形の石冠として祭祀具の中で分類しているので、それに習ったが、この資料が果たして同列に扱うべきかはわからない。同様に、祭祀具の中の一種としてバナナ形石器と称するものや、あるいは石鋸形石器として、石斧などの擦り切りに用いる工具としての用途を積極的に評価するものなどがあり、いずれにも属性的には類似している。長軸中央よりやや下がったところで、僅かに弓なりとなる溝を表裏対称となる位置で彫り込んでおり、その溝底は上に向かって鋭角に抉り込んでいる。片面の上部には浅い円孔が5つ並ぶ。表裏共に線状痕が激しく、石材も軟質で、祭祀具としての仕上げの丁寧さはみられない。

磨製石斧（第13図5～13）

7以外は、ほぼ定角式の範疇に含まれるものと考えられ、刃部は基本的に曲刃を成す。その中で、完形の5と6は、定角式であったものを基部の再加工により使い続けられた可能性を考えておきたい。6は比較的薄く、刃もやや直線に近く、ほかとの雰囲気の相違がみられる。7は、同じく再加工品の可能性があるものの、研磨による側面があった形跡は現状では確認できない。身が分厚く、刃の正面観も若干片面寄りの丸鑿状を呈するなど、現段階の形状としては他とは様相を異にしている。C-4区出土なので、石匙に伴う前期～中期、そして晚期までが想定され、時期は決めかねる。8は、研磨面の単位が比較的明瞭な稜を形成しているが、小型の整った形状の優品である。

打製石斧（第14図14～19）

14は分厚く典型的な分銅型。15と17も分銅型の範疇で捉えられる。短冊形を呈する18は、非常に分厚く、刃先は堅い物に何度も当たったかのようにかなり潰れているので、そうした用途であろうか。19はいわゆる撥型で、刃先は使用によるものと考えられる線状痕がみられる。以上の表裏は、共通して主要剥離面と礫表皮で構成される。16は打製石斧に含めたが、剥片素材獲得と石材の点から考えても、正面右側縁を刃部とする切削器としての用途を考えた方が良いかもしれない。

石錘（第15図20～24）

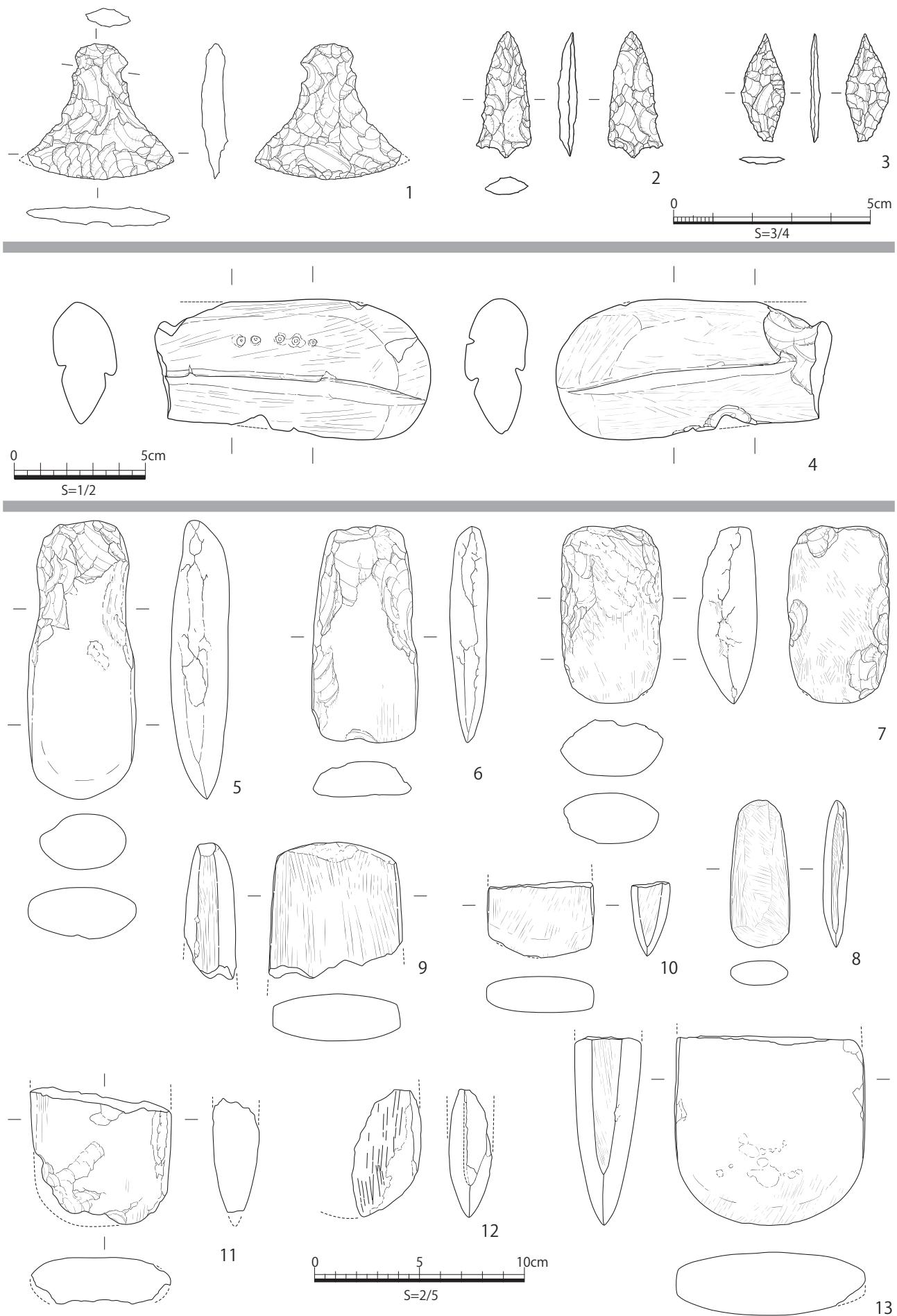
いずれも長軸両端に剥離を加えた打欠石錘である。分布は散在し、石錘が丘陵部で単独で出土する意味はよくわからないが、万能錘としての用途の一端があるのであろう。

磨石（第15図25、26）

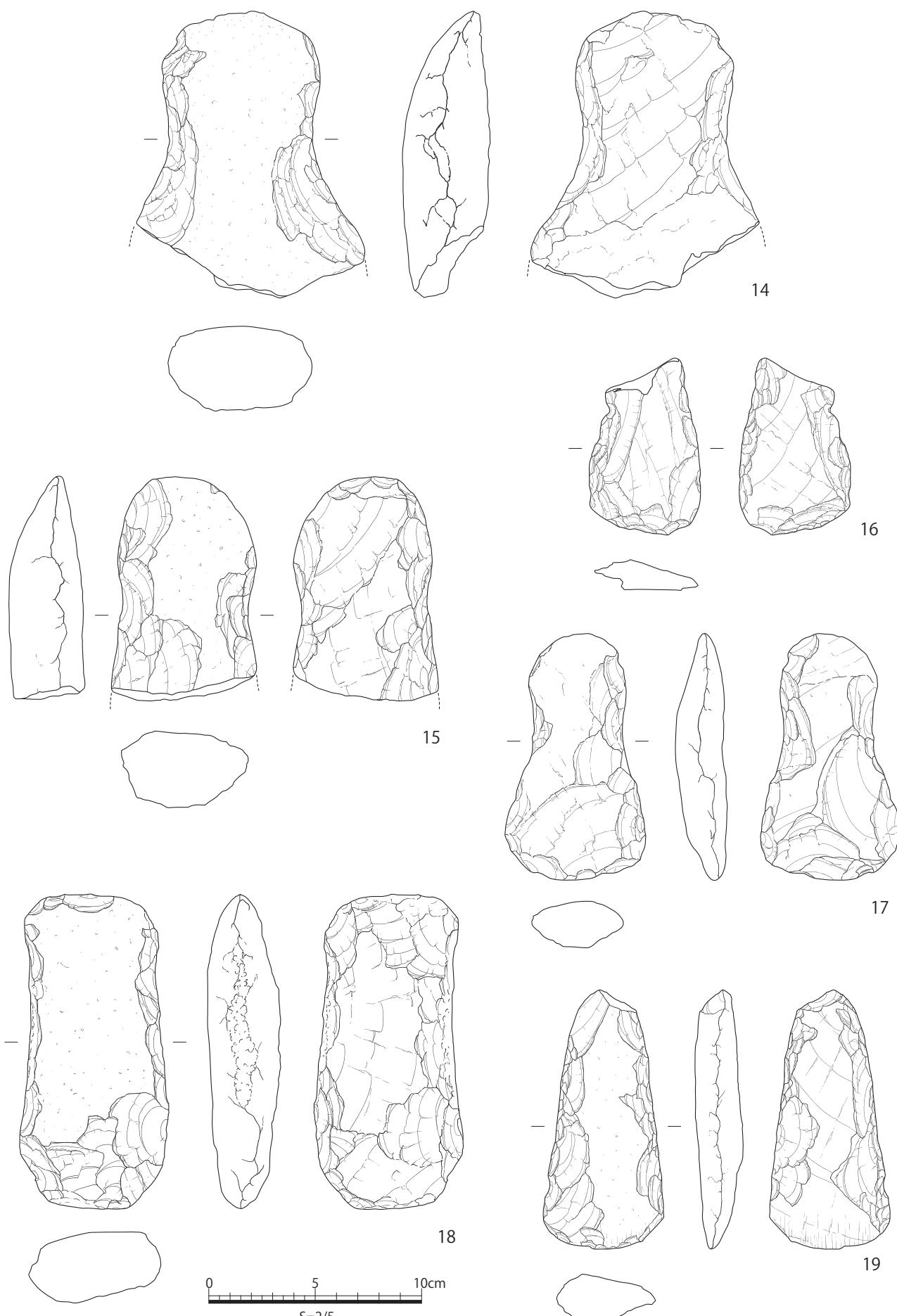
断面楕円形の自然円礫の表裏につるつるの磨面が形成されている。26には強い磨面の周囲に弱い磨面が形成されている。次の敲石とともに居住域が想定されるC-4区の出土である。

敲石（第15図27）

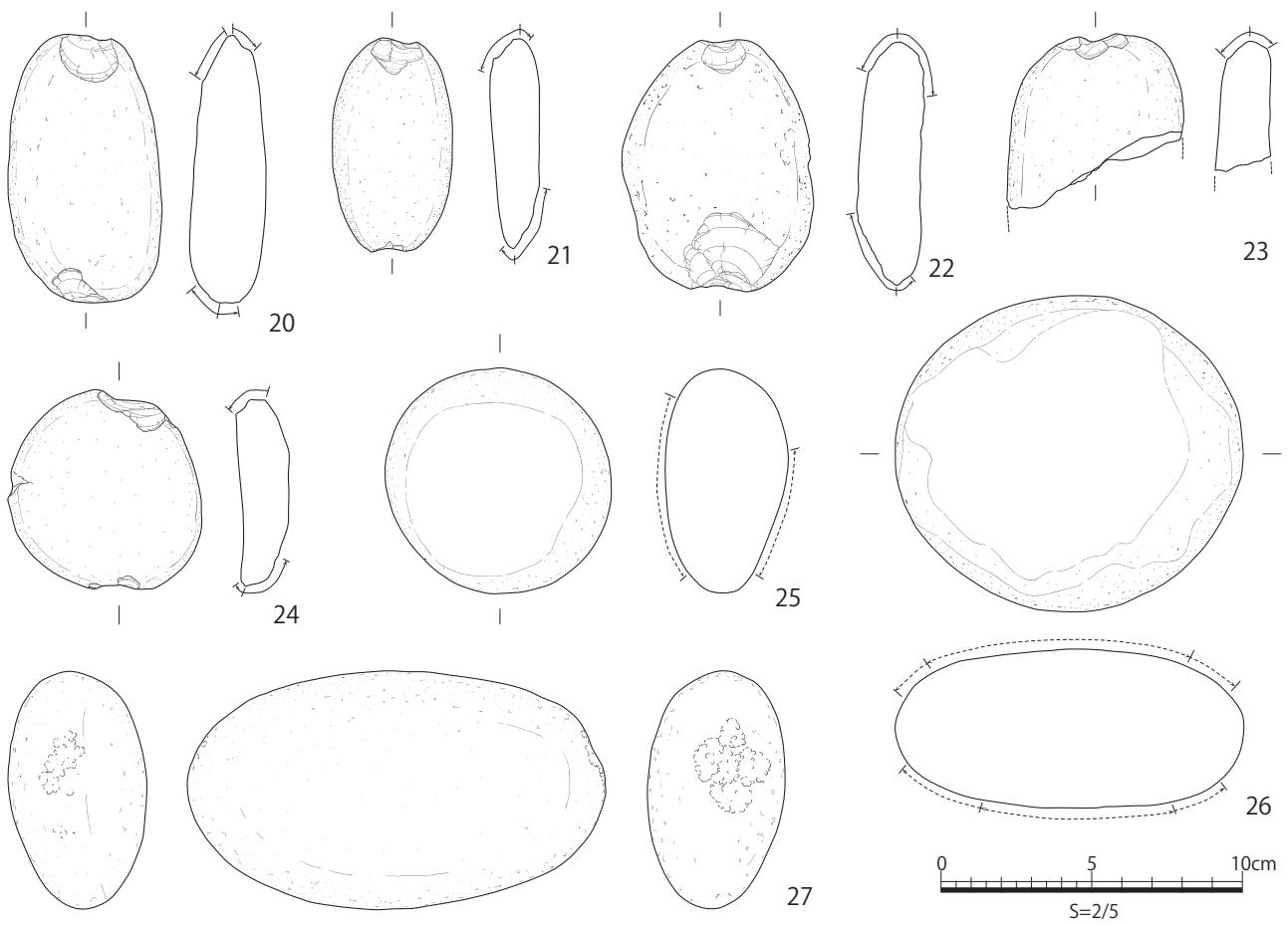
平面、断面ともに長楕円を呈する自然円礫を用い、その両端に敲打痕が形成されている。使用頻度的には少なかったようである。



第13図 縄文時代の石器（1）



第14図 縄文時代の石器（2）



第15図 繩文時代の石器（3）

縄文時代の石器観察表

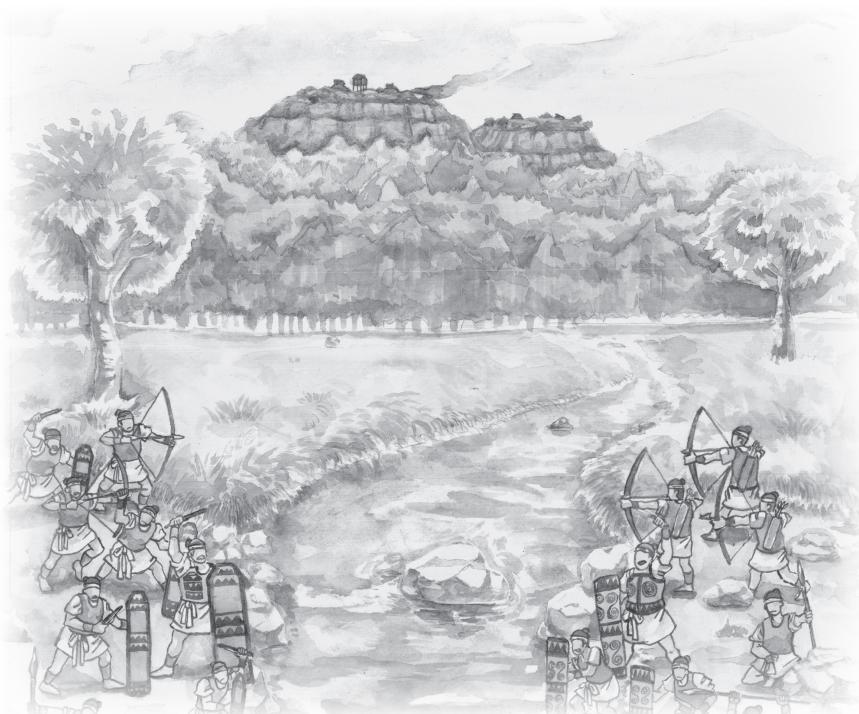
No.	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石質	状態・備考	出土地
1	石匙	3.50	3.70	0.6	4.68	頁岩	完形	C-4 区 49号墳
2	石鏟	3.18	1.34	0.42	1.48	安山岩	ほぼ完形	A-1 区 31号墳
3	石鏟	2.72	1.07	0.2	0.45	頁岩	完形	A-2 区 36号墳
4	石冠	5.2	(10.2)	2.2	112.6	凝灰岩	端部折損	A-1 区 31号墳
5	磨製石斧	13.3	5.1	2.7	298.9	蛇紋岩？	完形（再加工品）	A-1 区南斜面
6	磨製石斧	10.3	4.9	1.6	103.7	蛇紋岩？	完形（再加工品）	A-1 区南斜面
7	磨製石斧	8.4	4.9	2.6	179.6	蛇紋岩	完形（再加工品）	C-4 区
8	磨製石斧	7.0	2.7	1.2	33.1	凝灰岩	完形	B-3 区
9	磨製石斧	(6.4)	(6.1)	(2.2)	136.9	蛇紋岩	基部のみ	A-2 区 37号墳
10	磨製石斧	(6.1)	(3.2)	(1.6)	32.9	蛇紋岩	刃部片側片	A-2 区 34号墳
11	磨製石斧	(3.6)	5.1	(1.7)	46.4	流紋岩？	刃部のみ	A-2 区 37号墳
12	磨製石斧	(5.8)	(6.7)	(2.1)	124.7	蛇紋岩	刃部のみ（損傷）	A-1 区 31号墳
13	磨製石斧	(9.0)	9.1	(3.0)	356.9	閃綠岩？	刃部のみ	A-1 区西斜面
14	打製石斧	(13.3)	(10.2)	(4.0)	565.5	アルコース質砂岩	刃部側欠	C-1 区 20号墳
15	打製石斧	(10.5)	(6.8)	3.4	310.1	濃飛流紋岩？	刃部側欠	A-1 区 2号墳
16	打製石斧	(8.1)	5.2	1.4	54.6	凝灰質泥岩	基部側欠（削器？）	A-2 区 34号墳
17	打製石斧	11.6	6.7	2.2	158.6	安山岩	完形	A-1 区外表採
18	打製石斧	14.7	6.8	3.3	453.3	アルコース質砂岩	完形	B-3 区
19	打製石斧	12.2	5.7	2.7	146.8	玄武岩	完形	B-2 区
20	打欠石錐	8.9	5.1	2.5	144.4	凝灰岩	完形	C-1 区 20号墳
21	打欠石錐	7.0	4.0	1.7	53.9	凝灰岩	完形	A-1 区
22	打欠石錐	8.4	6.2	2.1	145.1	流紋岩	完形	H-3 区
23	打欠石錐	(4.1)	5.7	1.7	(67.0)	流紋岩	半欠	H-3 区
24	打欠石錐	6.6	6.4	1.7	75.2	細粒砂岩	完形	C-4 区
25	磨石	7.5	7.5	4.1	314.5	アルコース質砂岩	完形	C-4 区 48号墳
26	磨石	10.5	11.5	5.3	911.5	流紋岩	完形	C-4 区 49号墳
27	敲石	13.9	7.9	4.6	675.7	流紋岩	完形・長軸両端	C-4 区

参考文献（第Ⅱ章第1・2節）

- 石川県（農林水産部耕地整備課） 1988 『土地分類基本調査 鶴来』
小松市教育委員会 2004 『八里向山遺跡群』
諏訪間 順 2019 『相模野台地の旧石器考古学』 新泉社
野々市町教育委員会 1983 『野々市町御経塚遺跡』



周囲の造成が進み、陸の孤島状態となった河田山弥生遺跡（高地性集落）の尾根全景（北西上空から）



防護機能を持った高地性集落遠望と弥生の戦いの想像図（作画：山崎真湖）

第3節 弥生時代（河田山弥生遺跡）

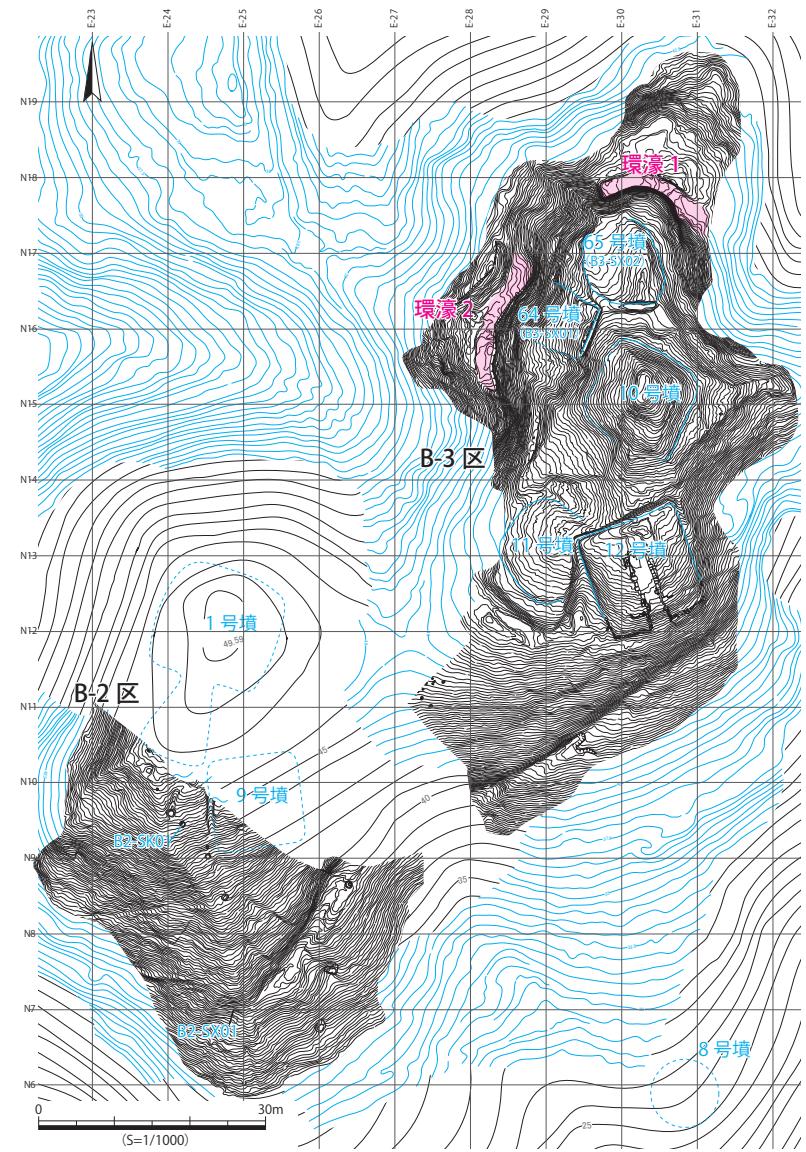
1. 検出された遺構

（1）河田山弥生遺跡全体の概要

河田山弥生遺跡は、河田山古墳群のI支群が展開する尾根（河田山南尾根）と重なる。この尾根は三つの頂上部で構成されており、そのうち北西に派生する一段低い尾根が平野からは見えない位置・標高にあり、遺構・遺物等は検出されていない。集落は古墳分布と同様に中央でくびれる二こぶ状の尾根上に立地し、尾根は南西尾根（B-2区）と北東尾根（B-3区）に分けることができる。最高所の標高は、1号墳を頂上とする南西尾根で約50m、10号墳を頂上とする北東尾根で約53.5mを測り、河田山では平野に直面してそり立つ最高所となっている。また、手取川河口部・日本海から小松南部・加賀市までを含む平野部をほぼ一望できる高所でもある。

まず南西尾根のB-2区は、尾根頂部のほぼ全体が金沢大学考古学研究会によって確認調査が実施された河田山1号墳の存する保存区域である。調査で出土したのはすべて弥生時代後期の遺物であったため、すでに高地性集落の存在は予想されていた。保存区の南側斜面が法面工事にかかることになり、発掘調査を実施した。比較的多くの弥生土器片を検出したものの、該期の遺構は検出されず、奈良時代の火葬墓2基と9号墳周溝等が検出されたのみである。1号墳の西側斜面には、現況地形で環濠の可能性のある微地形が観察されるので、次に述べるB-3区に似た環濠配置が予想される。

B-3区とした北東尾根が全面調査された区域で、尾根の北端と西辺の膨らむ部分に高地性集落に伴う環濠が設けられている。上面に関しては、古墳築造に伴う削平が多く、また、その後の土の流出も激しい。弥生時代の遺物包含層を維持していたのは、12号墳盛土下に残存する旧表土に限られる。



第16図 河田山弥生遺跡の尾根（I支群尾根）

(2) 環濠

確認された環濠はB-3区の2箇所で、尾根北端の環濠1（調査時名称は「北テラス」）と西側の環濠2（調査時名称は「北西テラス」）である。両者の間には尾根の弱い張り出し部があり、そこで途切れて連続しない。調査時に「テラス」とした名称が示すように、断面V字をなすような濠の形態ではなく、山側を急峻にカットし、幅2m程の幅が広く平坦な底面が形成されている。斜面下方側での掘削による立ち上がりは僅かだが、若干土壠状に盛土した形跡が部分的に認められる。中世山城の箱堀あるいは切岸といった印象である。

尾根の南東斜面のB-3区からB-2区にかけて走る帯状テラス（前ページ第16図参照）は、当初は環濠の可能性を考えたが、規模や立ち上がりの点で、環濠ではなく山道のような遺構かもしれない。古墳終末期ないしは奈良時代の火葬墓にともなう墓道だった可能性があり、火葬墓の項で触れる。

環濠1（北テラス）

尾根北端の舌状に張り出しに沿うかたちで弧状に斜面を削り込んでいる。山側は約2mの高さまで垂直に近いほど急峻な立ち上がりで、その後、緩やかな自然傾斜へとつながる。底面幅は約2mのほぼ平坦を成し、斜面下方側は最大で約60cmの立ち上がりを示す。東側端部は浅い谷部へと抜けるが、西側端部は尾根の小さな突出地形にぶつかって止まり、掘削は方形の箱形を呈する。

土層断面(A-A')をみると、一見、環濠の再掘削のような切り合いを呈しているが、地山の誤認による二度の検出過程を経ており、土層断面図も二段階の作成で合成されているので、検討余地を残している。6・7・11層が比較的褐色の強い色調であったことにより、一旦完掘と判断したものである。褐色の強い層は、環濠2の17～19層に対比させることも可能である。その土層断面からは再掘削などの補修を否定してしまうほどでもなく、現場での検出作業中に一度は完掘と判断した経緯も尊重すれば、環濠の再掘削ないしは補修といった可能性は残しておきたい。斜面側の18層は土壠状の盛土層の形跡と判断している。遺物の出土は、西端部の箱形部上層に限られ、いずれも細片である。

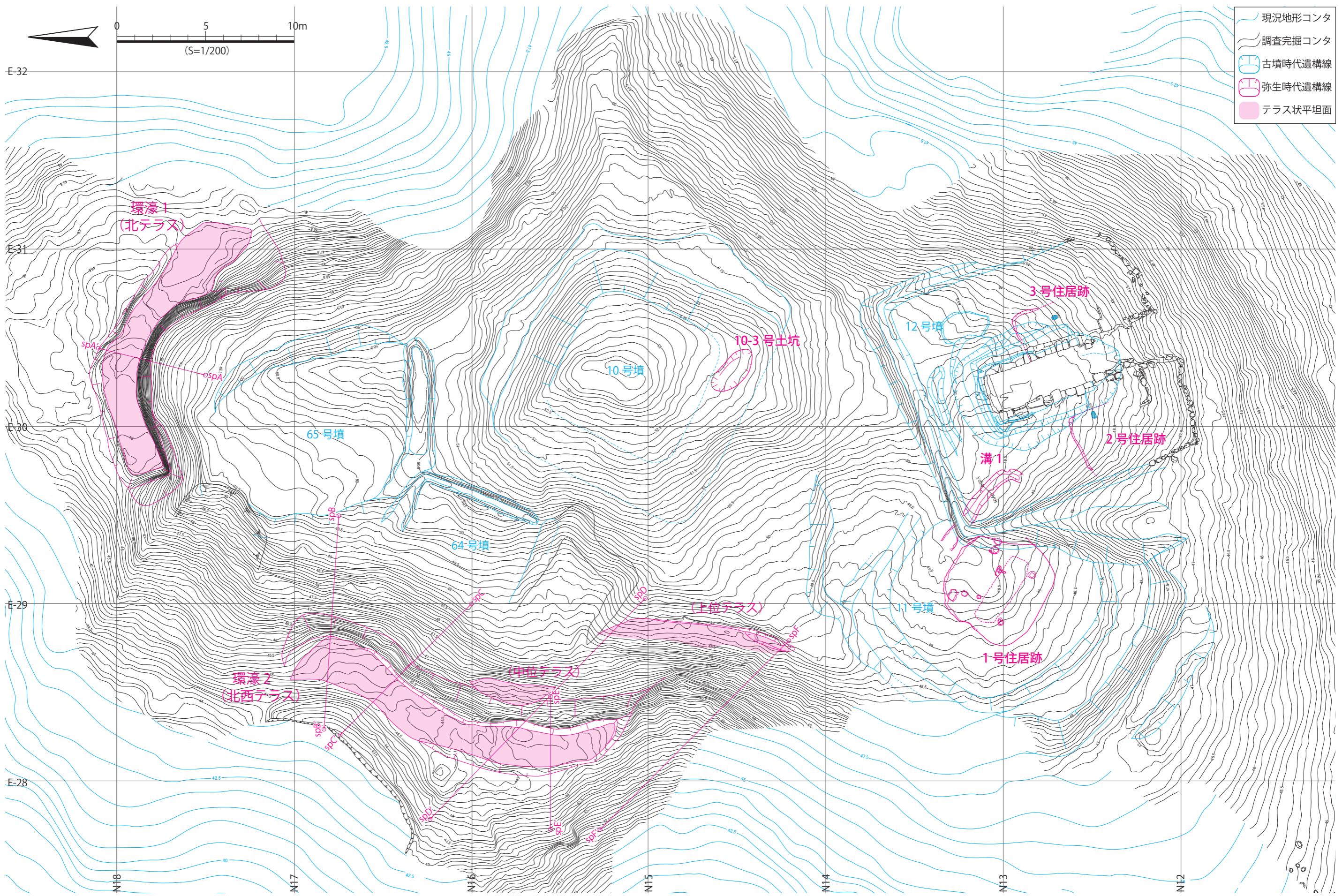
環濠2（北西テラス）

環濠1との間に小さな突出地形部の空白をはさんで、尾根西側の緩やかな張り出し部に沿って弧状に削り込んでいる。山側の立ち上がりは、南半部では約1.3mの高さまで約70度の急傾斜とし、その後は緩やかに自然傾斜へとつながる。北半部では、削り出しによる傾斜はやや緩やかとなるが、下底部に近くでは20～30cmで垂直に切り落とした立ち上がりを形成している。底面は、幅約1.5～2mの平坦面で、斜面下方側に僅かだが立ち上がりを確認できる。環濠1と同様に、土壠状に盛土をおこなっていたものと考えている。両端は、僅かな立ち上がりも確認できるので、流出等は無く、一つの環濠掘削単位として完結していると考えられる。

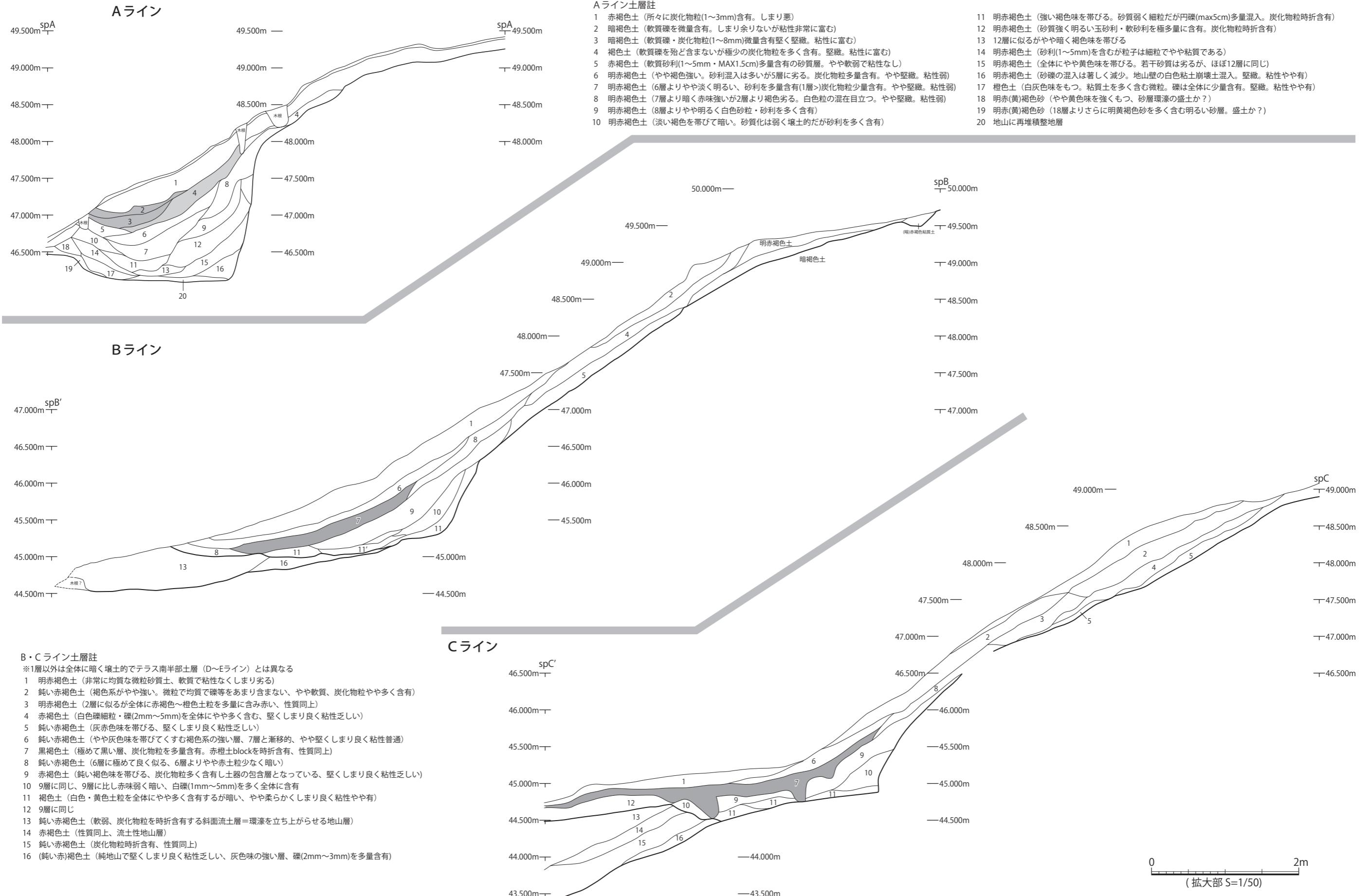
土層断面のB・CラインとD・Eラインとでは、立ち上がりの違いと同様に堆積土層も違いがあり、前者は暗色が強い傾向がある。B・Cラインでは9層が主に土器包含層となっているが、古墳時代の土器も含んでおり、もしかしたら斜面上部の64号墳築造に伴う造成の影響が考えられる。特にCラインでは、7層の黒褐色土が下底面近くにまで及んでいる。D・Eライン周辺の土器出土状態は、下底遺物は無く、ほぼ17層を前後する層を中心とした斜面上部からの流れ込み状況を示している。

その他テラス

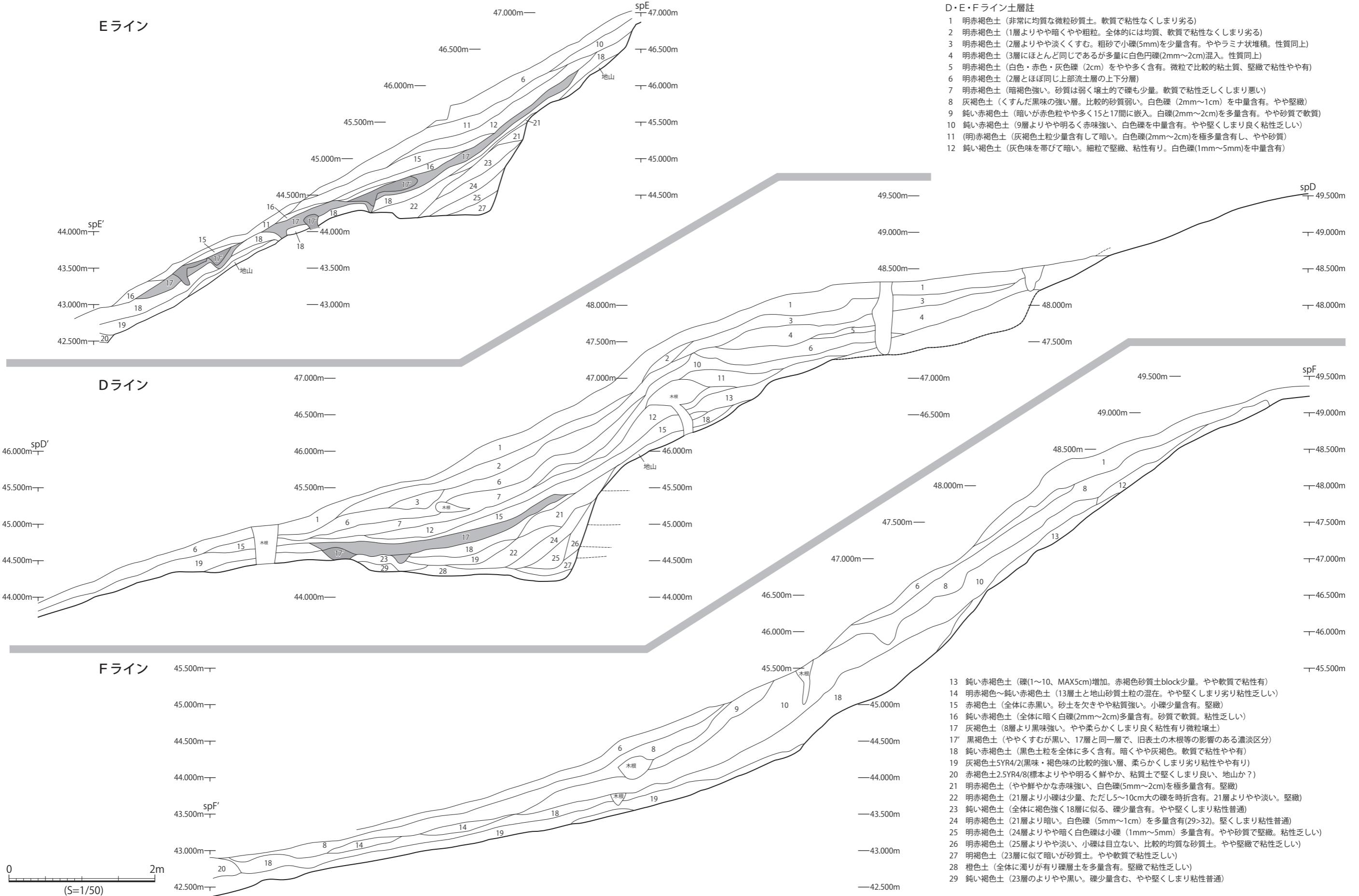
環濠2の上位斜面で、狭長なテラス（中位テラス・上位テラス）を把握している。高地性集落に時折見られるテラス状床面の可能性もあるが、特に伴う遺物も無く、切り盛りによる平坦面の拡張は位置的には想定しがたい。平野を見渡す側に設けられていることに意味があるのかもしれない。



第17図 B-3区遺構配置全体図



第18図 環濠土層断面図 (1)



第19図 環濠土層断面図 (2)

(2) 竪穴住居跡

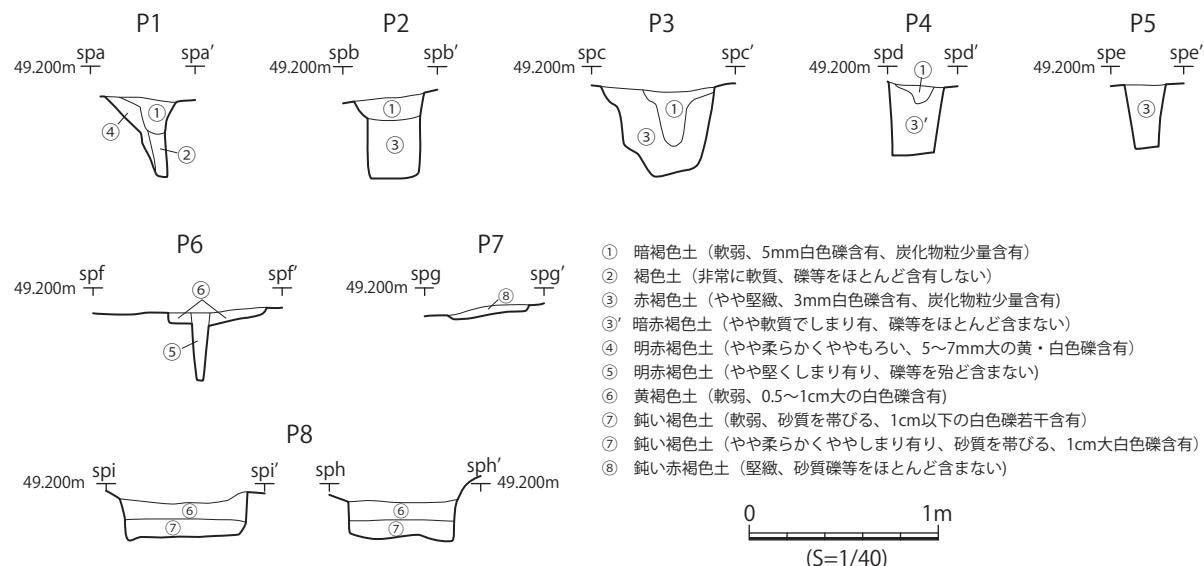
竪穴住居跡はB-3区で3棟検出されている。11号墳の墳丘中央部に重なる1棟(1号住居跡)と12号墳墳丘に重なる2棟(2号・3号住居跡)で、いずれも南向きの斜面で、盛土によって保護されていた範囲での検出である。一方、10号墳や64・65号墳周辺のB-3区の北半部は、古墳築造に伴う削平だけでなく土の流出も激しい区域で、住居跡などが失われた可能性が高いが、もともと住居の分布が南向き斜面に限られていた可能性もある。尚、掘立柱建物が想定されるようなピットは検出されていない。

1号住居跡(第20～22図)

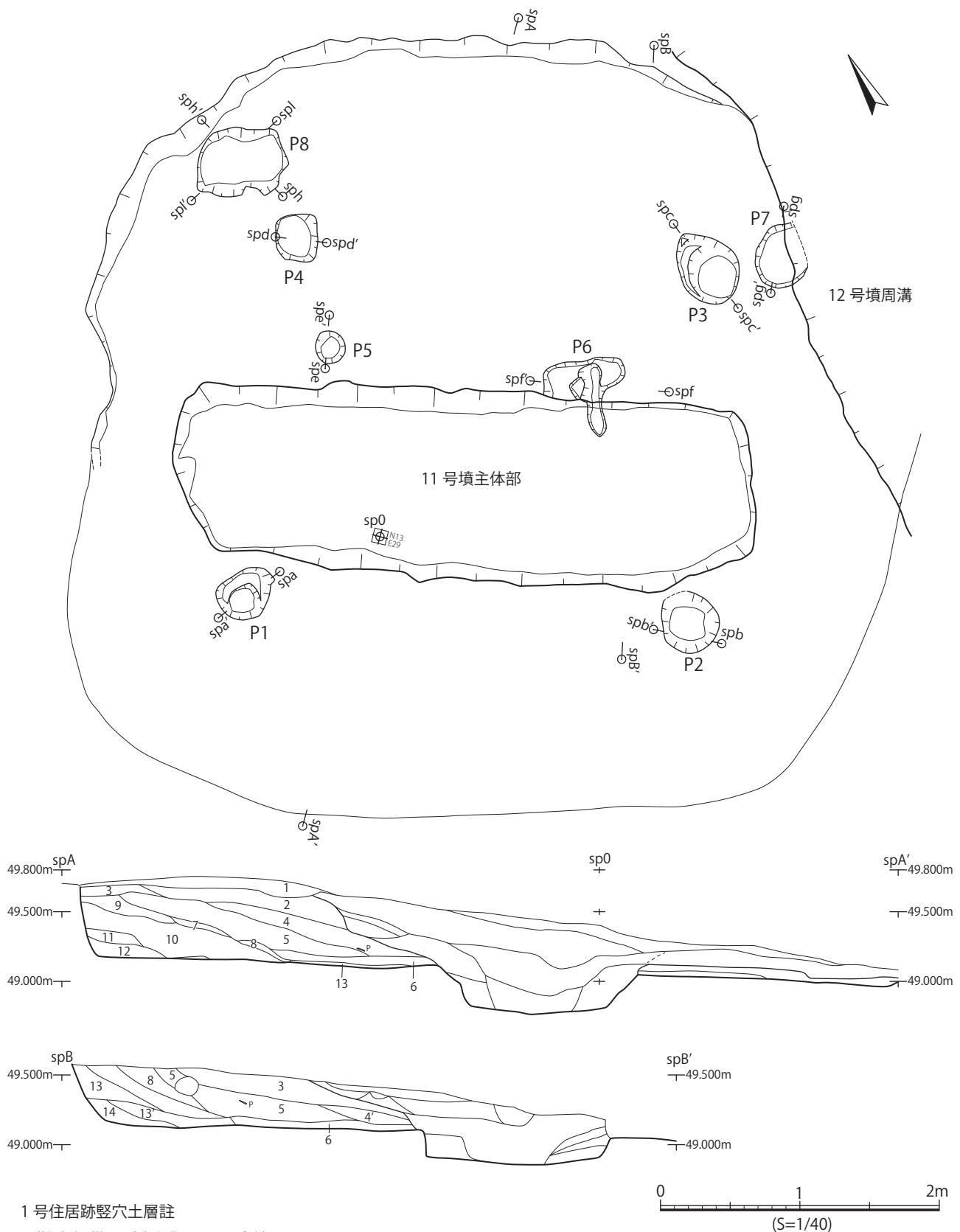
11号墳の墳丘中央で検出された竪穴住居跡で、中央床面に同墳の主体部が穿たれている。竪穴の掘り込みは北東側の立ち上がりが最大で50cmを測る良好な遺存状態だが、南西側は試掘トレンチの関係で立ち上がりを失っている。平面プランは、一辺約5.6mのやや円形に近い隅丸方形を呈する。主柱穴と考えられるピットはP1～P4で、深さは40～45cm、柱痕は明確にはしがたい。柱間寸法は、P1～P2間が3.2m、平行するP3～P4間が3m、両柱列の間の寸法は2.5mと長方形の配置である。その他のピットの性格は不明だが、P8は壁際の設けられた底面フラットな土坑である。炉跡や焼土の検出はなかった。

土層の堆積状況をみると、削平を受けている南側の断面観察に検討余地を残しているが、良好な北側では2層以下が墓壙によって切られている状況を示す。古墳時代前期の段階で竪穴はかなり埋積していたこととなるが、古墳築造の手法を考えると、主体部を竪穴住居の凹み部分に設定することもありうるので、2～5層については古墳造成と関係する埋積土の可能性もある。

遺物の出土状態では、床面遺物が北東隅部に集中しており、壁際床直遺物として本住居に伴う一括性の高い出土状態を示している。しかし、床直個体の多くは12号墳の周溝によって失われているようで、図化できた復元個体は1点のみである。1号住居跡出土遺物の大半は竪穴覆土からの出土で、断面投影でみると、4・5層が包含層として明瞭な流れ込みの出土状況を見せている。



第20図 1号住居跡 床面ピット土層断面図

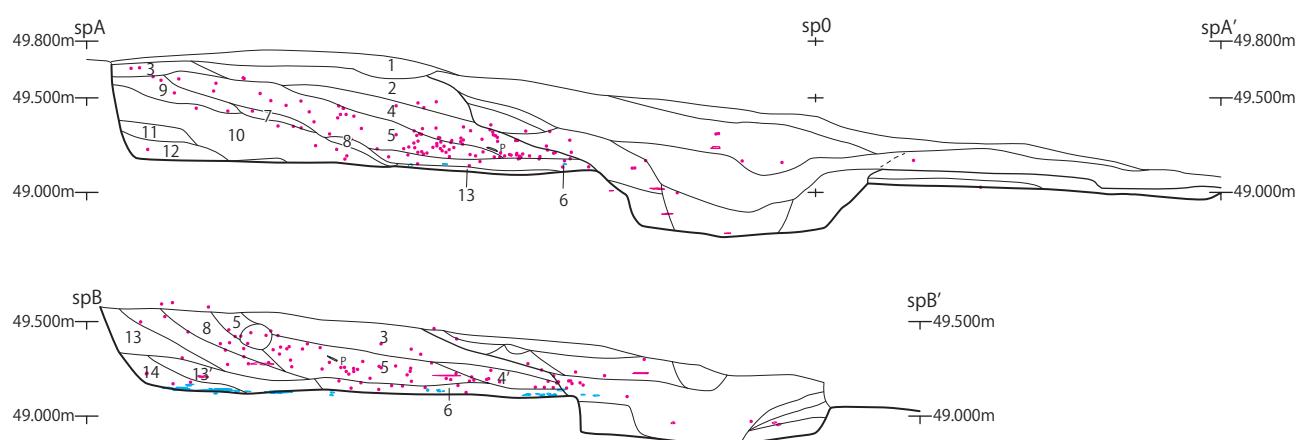
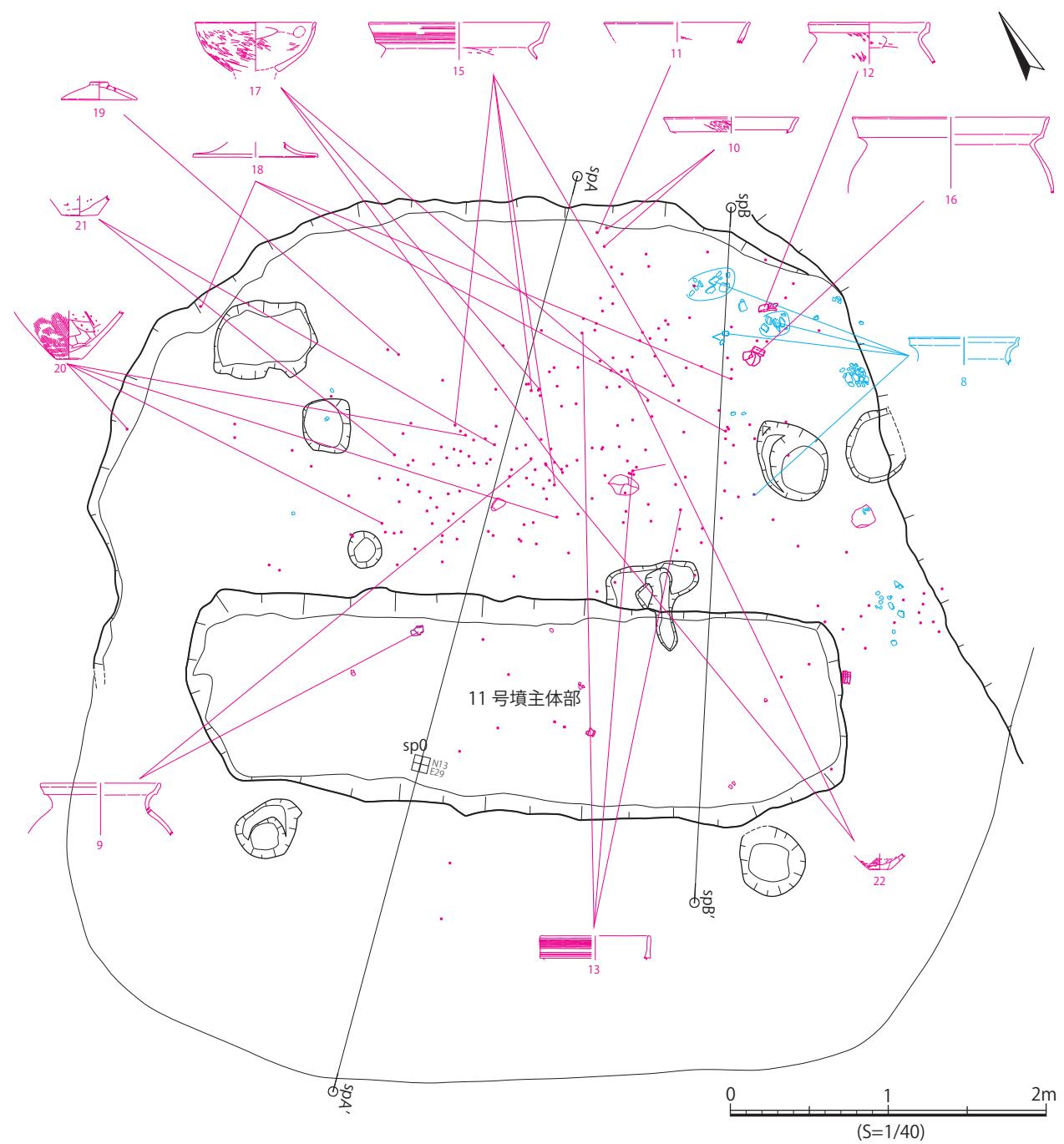


1号住居跡竪穴土層註

- 1 黄褐色土（軟弱、白色小礫(0.5~3mm)含有）
- 2 明黄褐色土（堅いがもろい、白色小礫多量含有）
- 3 明黄褐色土1（軟弱、白色小礫含有）
- 4 赤褐色土（堅緻、白色中礫(2~7mm)少量、・炭化物微量含有）
- 4' 赤褐色土（軟質でしまり有、白色小礫・炭化物僅か含有）
- 5 赤褐色土（堅緻、白色中礫、5mm大の炭化物含有）
- 6 暗赤褐色土（軟質でややしまり有、白色中礫少量、炭化物多量含有）
- 7 暗赤褐色土（堅緻、白色小礫(1mm)・炭化物含有）

- 8 鈍い赤褐色土（堅緻、白色中礫(5mm)含有）
- 9 赤褐色土（非常に堅緻、白色小礫多量含有）
- 10 黄褐色土（非常に堅緻、白色小～中礫、炭化物若干含有）
- 11 黄褐色土（堅緻、白色中礫含有）
- 12 黄褐色土（堅緻、白色中礫をやや少量含有）
- 13 褐色土（軟弱、白色中礫多量含有、炭化物若干含有）
- 13' 鈍い赤褐色土（軟質でややしまり有、白色中礫・炭化物(5~20mm) 少量含有。やや砂質）

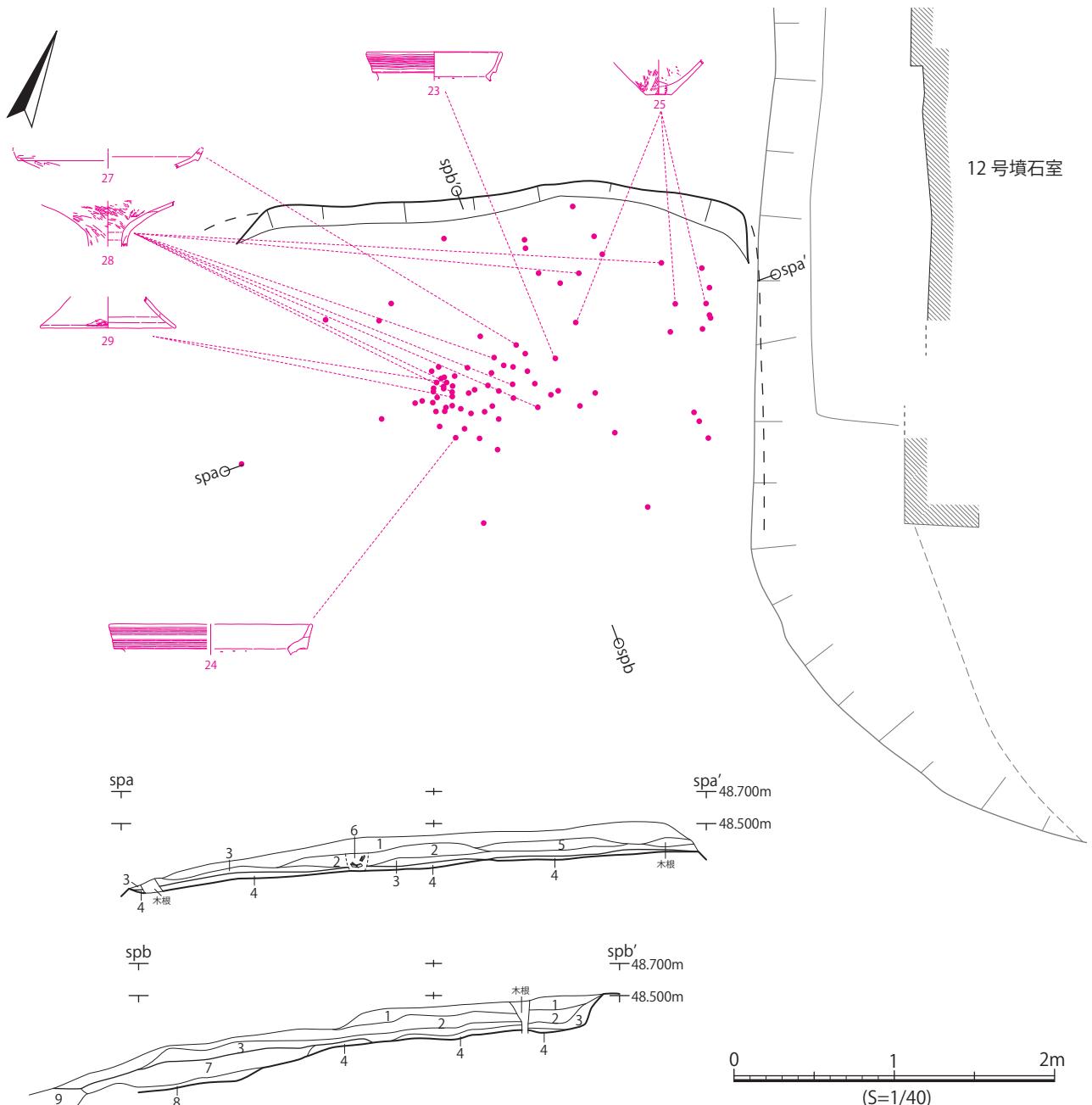
第21図 1号住居跡 平面図・土層断面図



第22図 1号住居跡遺物出土状況図

2号住居跡（第23図）

12号墳石室西側の盛土除去により検出された。東側は石室の墓壙により切られており、西側は周溝の掘削、南側は墳丘の削り出しにより失われている。北側の壁の立ち上がりは20cm程度で、立ち上がり下底部が若干南に回り込むことから、石室の墓壙に沿うように収まる方形プランの竪穴を想定



2号住居跡土層注釈

- 1 黄褐色土（旧表土か、やや軟質、粘性有、白灰～赤褐色礫(5mm)若干含有、黄土粒多量含有、炭化物粒若干含有）
- 2 明褐色土（堅緻、粘性富、黒色土多量含有、炭化物粒(2mm)多量含有、白灰色礫(2mm)若干含有。土器包含層）
- 3 明褐色土（暗褐色土を多く含み鈍い色調、堅くしまり良い、粘性富、貼床土）
- 4 明褐色土（非常に堅緻、粘性富、暗褐色土を若干混在。地山または貼床土）
- 5 黄褐色土（1層に比し鈍い色調やや堅くしまり普通、粘性有、炭化物粒(1～3mm)をまばらに含有）
- 6 暗褐色土（堅緻、粘性若干有、褐色土をまばらに含有、炭化物粒(1mm程度)若干含有。土器集中）
- 7 黄褐色土（堅緻、粘性に富む、濁灰色土多量含有、炭化物流(1～5mm)若干含有、盛土整地層）
- 8 褐色土（堅緻、粘性有、全体に濁灰色土含有し鈍くすむ。その他含有物なし）
- 9 黄褐色土（7層よりも若干白っぽい、堅緻、粘性有、炭化物粒(1～5mm)を若干含有。盛土整地層）

第23図 2号住居跡平面図・土層断面図・遺物出土状況図

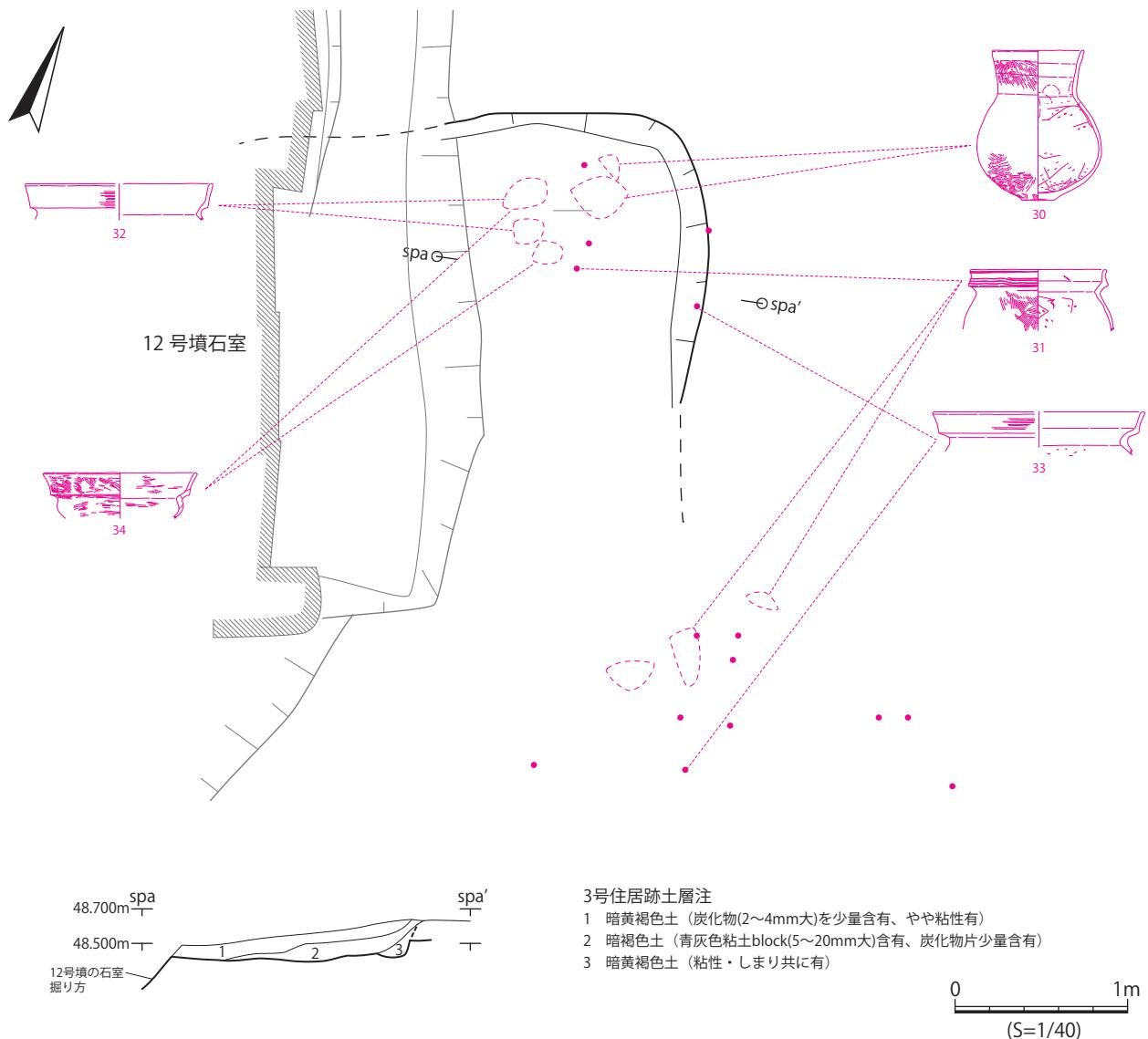
したが、判然とはしない。西側に向かって壁の立ち上がりは僅かとなるので、西側の範囲は不明である。距離的に近い3号住居跡と連続するテラス状遺構も想定すべきかもしれない。

土層断面では、斜面下方（南側）の床面は7層を盛土整地層と判断し、3層ないしは4層を貼床的な土層として把握している。比較的多くの遺物が覆土中および床面から検出されている。

3号住居跡（第24図）

12号墳石室東側の盛土除去により検出された。東側は石室の墓壙によって切られており、南側は墳丘の削り出しにより失われ、東側で方形プランのコーナー部を検出したことになる。立ち上がりは土層断面で20cm程度を把握しているが、遺構確認としては10cm程度と僅かである。2号住居跡のような、貼床状の土層は確認していない。2号住居跡でも触れたが、本住居跡の検出コーナーは比較的明瞭に検出したので、距離的に近い2号住居跡と同一のテラス状遺構ではないとすれば、規模的に小型の竪穴ないしは、土坑の可能性もある。

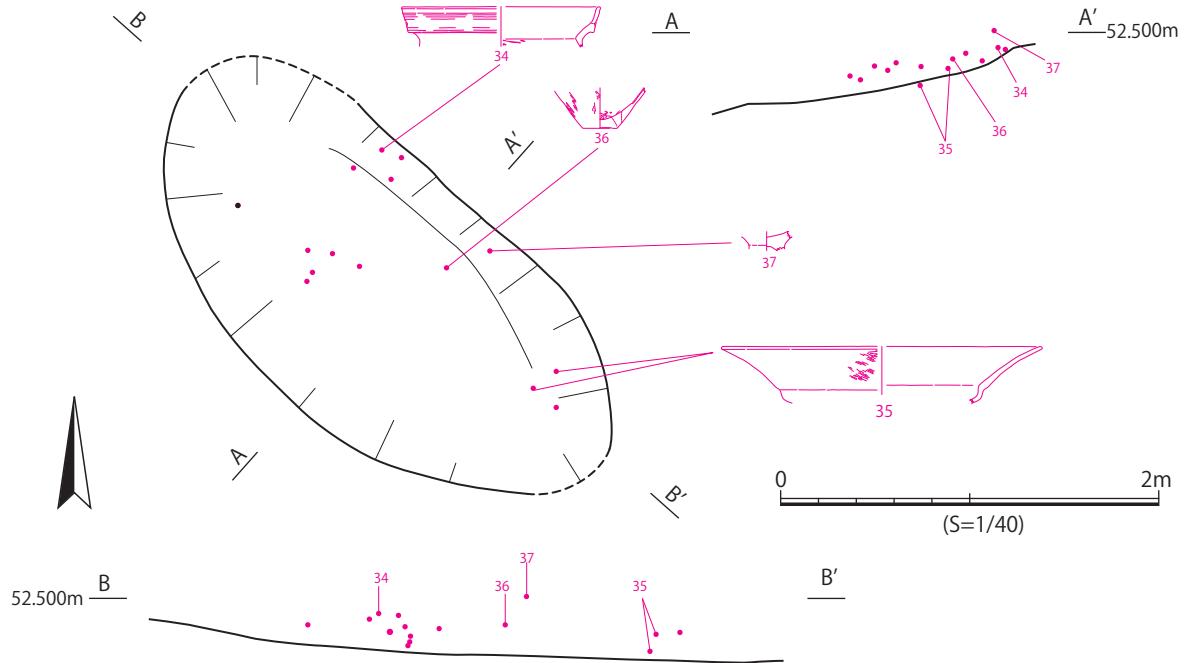
床面からは比較的良好な一括遺物が検出されており、それとの接合個体は、斜面下方への散布がみられる。



第24図 3号住居跡平面図・土層断面図・遺物出土状況図

10-3号土坑（第25図）

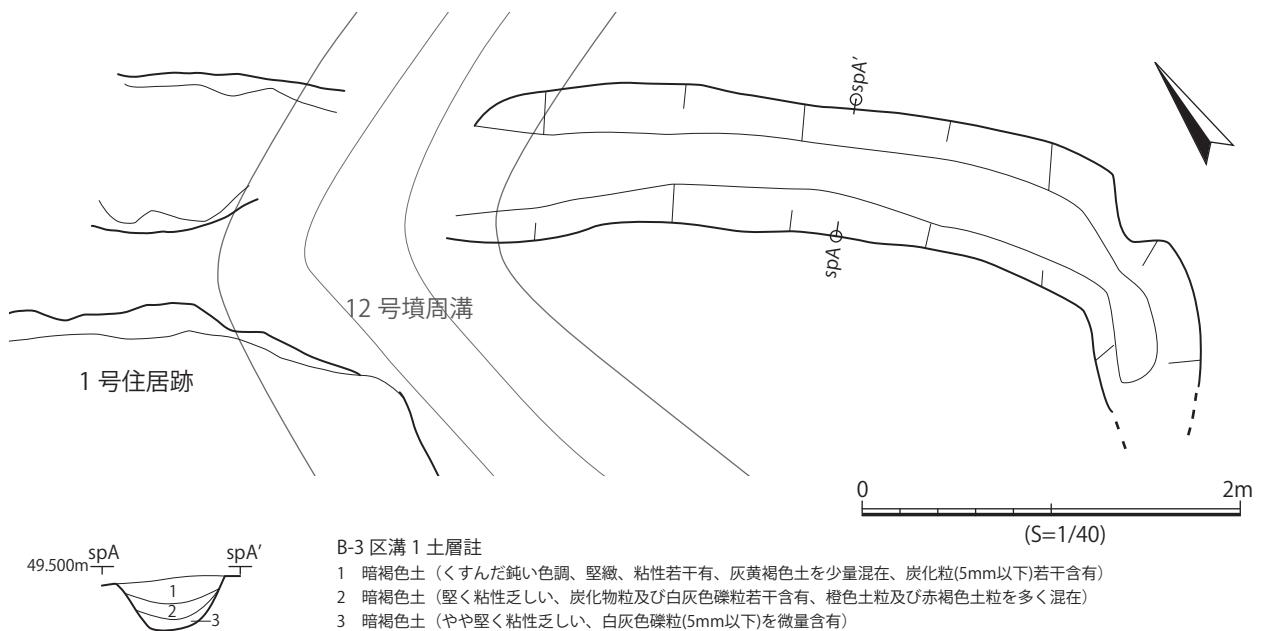
10号墳の墳丘上の南斜面で遺物集中範囲としてとらえていた中で、最終的に長軸約2.9mの楕円形をした皿状の凹みとして検出した。土坑としての明瞭さはない。図中の遺物は凹みとして検出した段階のもので、土層断面などの作図はしていない。遺物分布は上方からの流れ込みを呈する。



第25図 10-3号土坑平面図・遺物出土状況図

B-3溝1（第26図）

12号墳の盛土除去過程で検出し、1号住居跡の北側で検出した浅い溝状遺構に連続することがわかった。遺構に伴うと判断した遺物は無く、盛土除去後の検出状況から弥生時代のものと判断した。石室の北側には弥生と判断しなかった溝も検出されており、時期的な検討余地を残す。



第26図 B-3溝1 平面図・土層断面図

2. 出土土器

ここでは、I支群における弥生時代の遺構に伴うもの及び、B-2区、B-3区出土の弥生時代に位置付けられるであろう資料を掲載する。全体の総数としてはテンバコで10箱程度である。そのうち遺構資料は器種が判断可能なものは図化、遺構外のものに関しては、残りが良かつたり、時期判断可能と思われるものを抽出して掲載した。

環濠1（北西テラス）（1～7）

高杯及び鉢形土器（1・2・6・7）

1、6、7はいずれも無文の有段口縁をもつものであり、内外面ともに摩耗が激しく調整は不明瞭である。1に関しては口縁部から有段部分までしか残存せず、復元状況からは台付になる可能性が高い。2は高杯脚である。脚柱部のみで、杯部との結合部は残存状況から円盤充填法と考えられる。外面調整は辛うじて縦方向のミガキ調整、柱状裾に4方向の透孔があることが確認できる。7は口縁は一部欠如するところはあるが、胴部から底部にかけて完存する良好な資料である。

甕形土器（3～5）

3は口縁片及び胴部片の1片ずつから図上復元したものである。内外面ともに摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、口縁外面には辛うじて擬凹線、胴部内面はヘラケズリ調整が施されていることが確認できる。4、5は、口縁端部が欠損、頸部から胴部にかけてのみである。いずれも内外面ともに摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、口縁部内面には横方向のミガキ調整がみられる。4は胴部上半に二枚貝による押し引きの刺突、5は二枚貝による波状文が施されている。

1号住居跡（8～22）

壺及び鉢形土器（8～11・17・18）

8、9はいずれも有段口縁をもつ壺形土器である。内外面ともに摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、胴部内面はヘラケズリが辛うじて確認できる。10は有段口縁部分で、壺ないしは鉢形土器と思われる。口縁外面には、横～斜め方向のミガキ調整が施されている。11は壺の口縁片と考えられる。遺存率が悪いことから、法量も不確かである。17、18は接点はないが、胎土や色調が類似していることから同一個体の可能性が高い。口縁から胴部の内外面にかけて横方向のミガキ調整及び赤彩が施されていたと思われる。

甕形土器（12～16・20～21）

12は、受口状口縁をもつものである。内外面ともに摩耗が激しく調整は不明瞭であるが、辛うじて胴部外面にはハケメ、内面は横方向のケズリ調整が確認できる。13～15は口縁有段状の擬凹線を施すものである。13は小型のもので擬凹線は二枚貝を利用したものと考えられる。16は内外面ともに摩耗が激しく有段状の口縁部に擬凹線があるかどうかは不明である。

蓋形土器（19）

19は裾部が内彎する小型壺用の蓋である。摩耗が激しく調整は不明瞭である。

2号住居跡（23～28）

甕形土器（23～25）

23、24は口縁有段状の擬凹線を施すものである。23は擬凹線は二枚貝を利用したものと考えられる。25は23と胎土や色調ともに類似しており、同一個体の可能性も考えられる。外面は縦方向のハケメ調整、内面はヘラケズリ調整が確認できる。

器台または高杯（26～28）

26、27は接点がないものの、胎土、色調等から同一個体の可能性が高い。口縁端部は欠損するが、有段であることがわかる。内外面ともにミガキ調整が施されている。

3号住居跡（29～33）

壺形土器（29）

ほぼ完形である。外面には部分的であるが赤彩が施されていることが確認できる。外面は胴部上面は摩耗が激しく不明瞭であるが、全体的にミガキ調整が施されている。底部から胴部にかけては、厚み5mmをきるほど、薄くケズリあげている。

甕形土器（30～32）

いずれも口縁部に擬凹線を施すものである。30は口縁部がやや内傾し、結束工具による擬凹線が施されており、前時期の法仏式の様相がみられる。

鉢形土器（33）

有段状の鉢である。内外面に横方向のミガキ調整が施されており、胎土も緻密である。

10-3号土坑（34～39）

甕形土器（34・36・39）

34は摩耗が激しいが、擬凹線を施す有段の口縁部片と判断し図化した。わずかではあるが、頸部が残存し横方向のケズリ調整が確認できる。39は胴部上半片で、二枚貝縁の刺突が施されている。

B-3区12号墳周辺

甕形土器（40～42）

40は有段状の口縁をもつものであり、口縁端部は丸みをもち内傾ぎみである。41、42は口縁部に擬凹線を施すものである。41は口縁部が直立し、端部に丸味をもつなど古相の様相がみられる。

壺形土器（43）

口縁端部は欠損するが、受口状を呈する壺形土器である。内外面ともに摩耗が激しく、辛うじて胴部はヘラケズリ調整が施されていることが確認できる。

高杯または器台（44～47）

46、47は接点がないものの、胎土や色調が近似することから同一個体の可能性が高い。脚部には3方向の透孔が施されており、柱状部には縦方向のミガキ調整が施されている。44、45も柱状脚を呈する有段のものと考えられる。45は有段部に透孔があったことがわかる。

B-3区（48～52）

甕形土器（48～50）

48は、有段状の口縁をもつもので、内外面剥離が激しく調整は不明である。49、50はいずれも胴部上部片である。いずれも二枚貝腹縁による連続した刺突が施されている。

高杯（51、52）

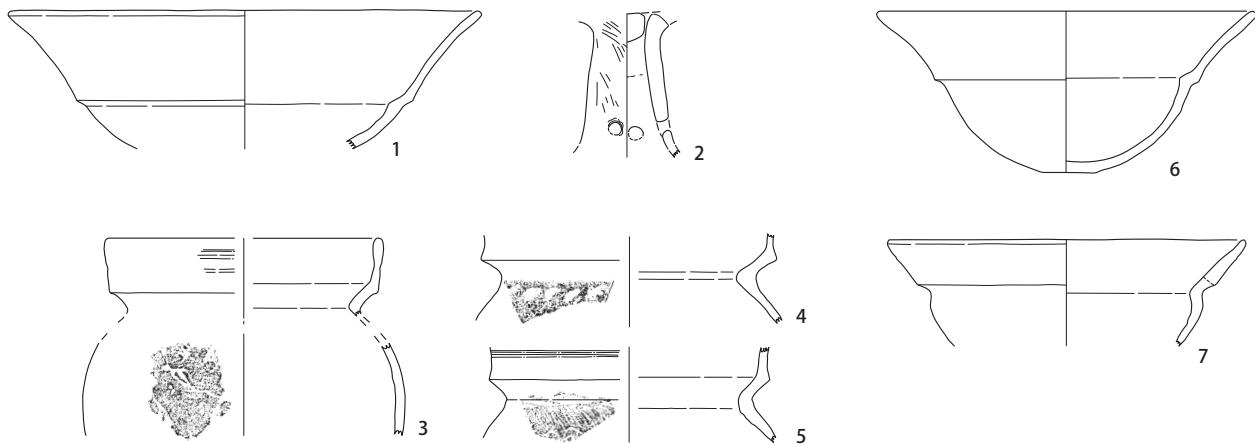
51は、杯部との接合部に円盤充填が施された剥離と考えられる痕跡があることから高杯と判断した。脚の広がりをみせるところに4方向の透孔が確認できる。摩滅が著しいが柱状部には縦方向のミガキ調整が施されていることがわかる。51は柱状部と裾の開き部に接点はないが、胎土や色調、法量から小型のもので、且つ同一個体と判断した。杯部との結合部は挿入法であり、4方向の透孔が施されている。内外面ともに摩耗、剥離が激しく調整は不明瞭である。

B-2区（53～63）

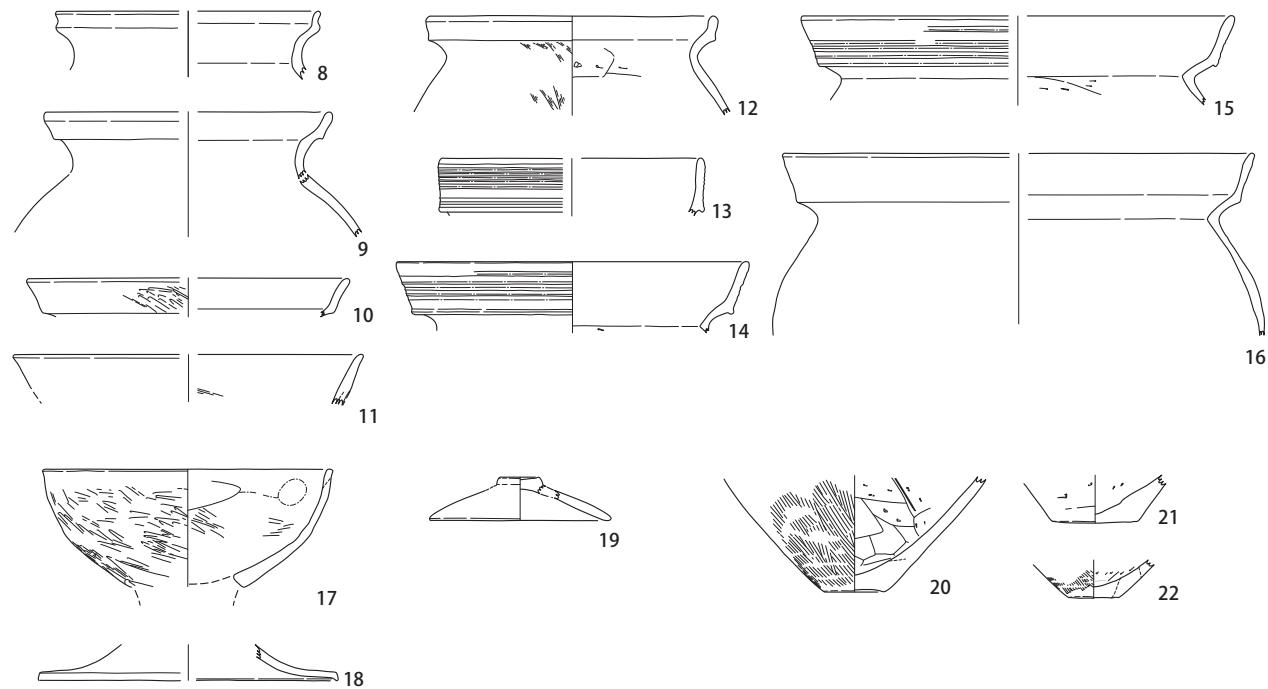
甕形土器（53～55）

いずれも有段状を呈し擬凹線が施されるものである。54、55は別個体として図化したが、胎土や

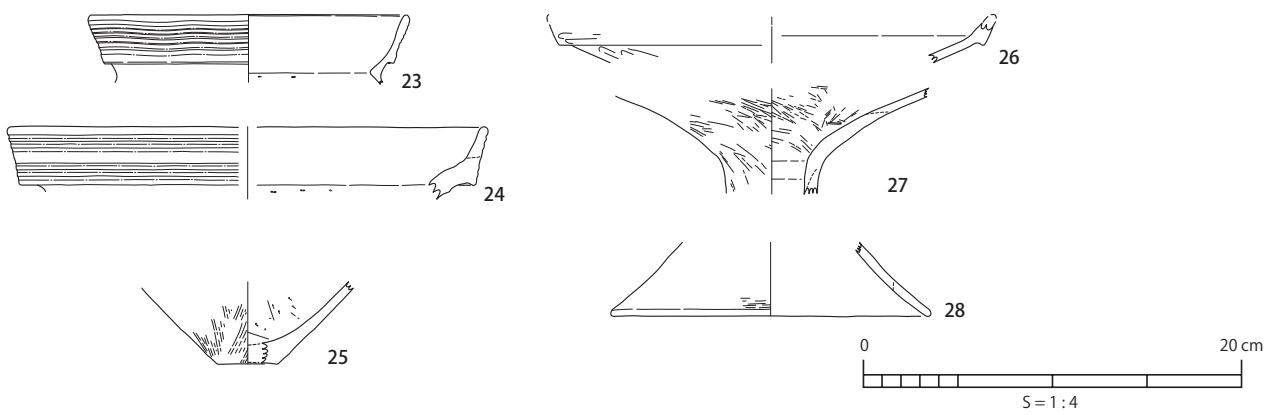
環濠 1 (北西テラス)



1号住居跡

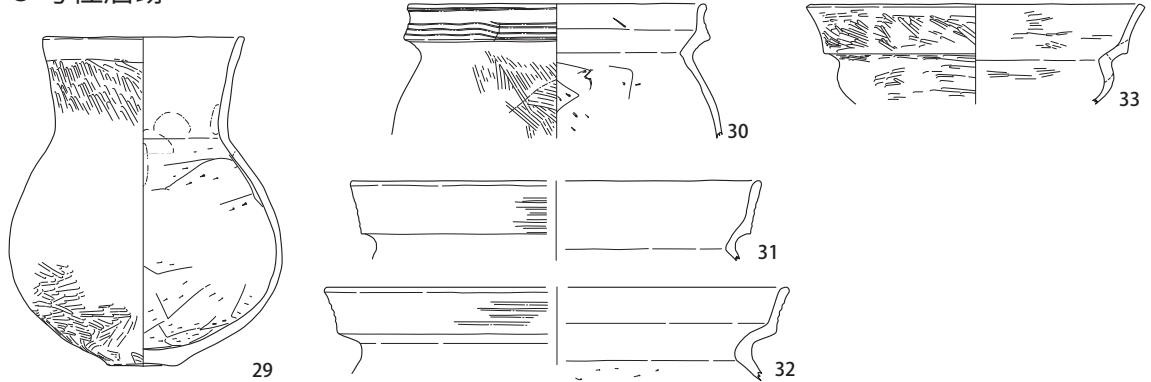


2号住居跡

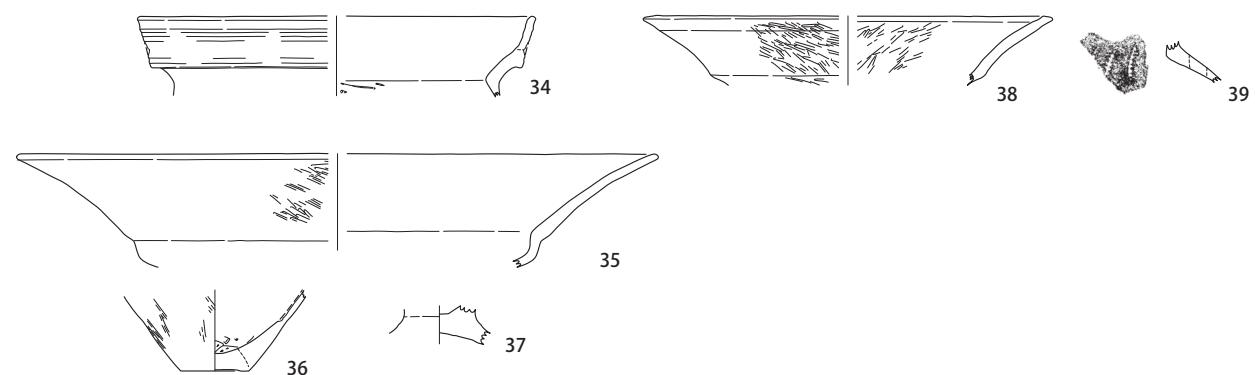


第27図 B-3区出土土器1 (S=1/4)

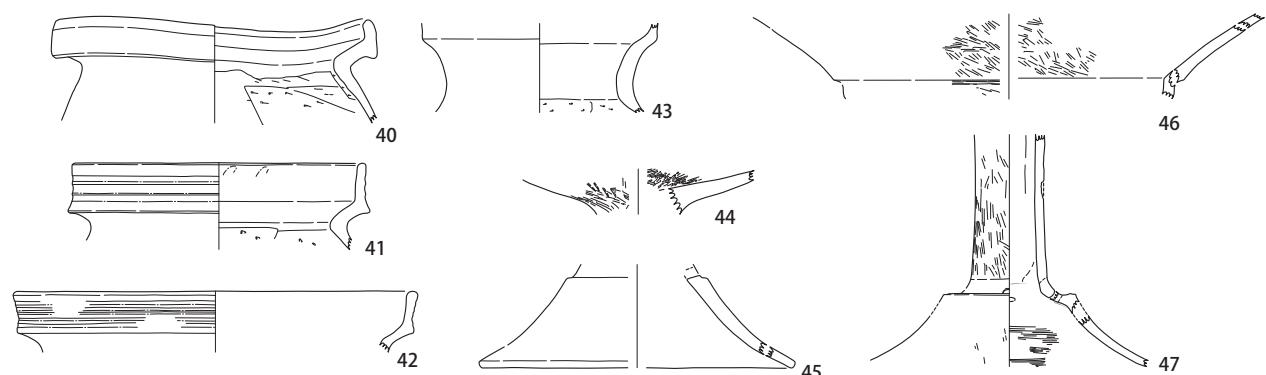
3号住居跡



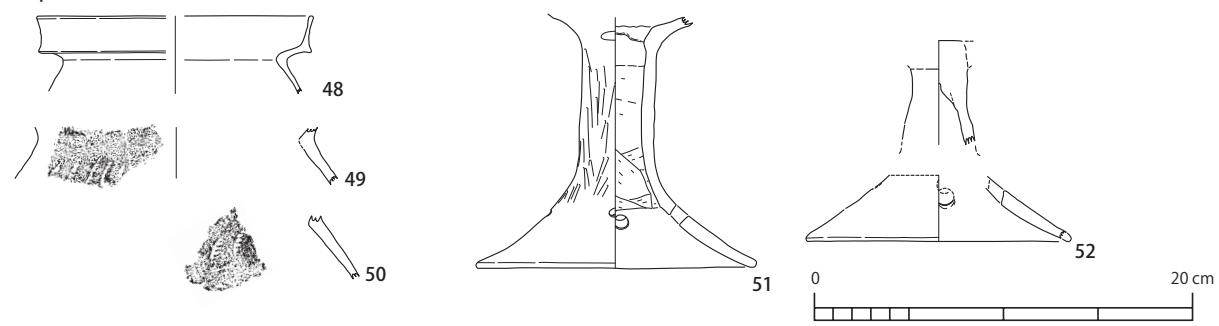
10-3号土坑



B-3区12号墳周辺

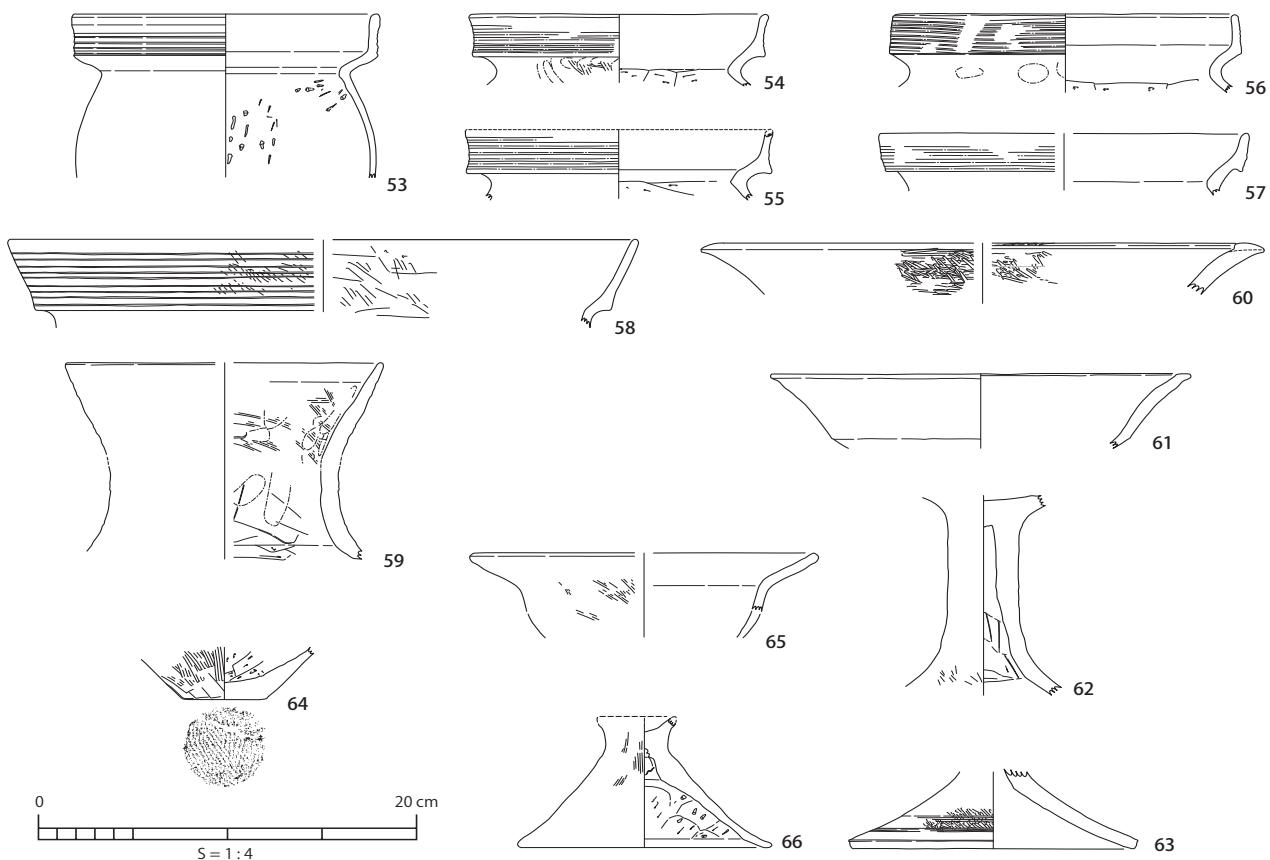


B-3区



第28図 B-3区出土土器2 (S=1/4)

B-2 区



第29図 B-2区出土土器 (S=1/4)

色調、復元される法量から同一個体の可能性が高い。

壺形土器 (58・59・64)

59は直口壺であり、内外面ともに摩耗が激しいが、幸うじて内面は、口縁から頸部にかけてハケメ調整が施されていることが確認できる。64は接点はないものの、59と同一個体の可能性が高い。底面にハケメ調整が施されている。104は大型の有段口縁を呈する壺と考えられる。口縁内外面ともにミガキ調整が確認でき、胎土も緻密で精製土器と考えられる。

高坏または器台 (60～63)

60は口縁端部が肥厚し面をもつ有段高杯の口縁片である。内外面ともに横方向のミガキ調整が施されている。62は柱状で遺存する脚の開き部には透孔はみられない。外面の摩耗は激しく、幸うじて裾部付近にミガキ調整が確認できる。

鉢形土器 (65)

内外面ともに摩耗が激しく調整は不明瞭である。

蓋形土器 (66)

裾が外反するタイプの壺用蓋である。内面にはケズリ調整が施されており、外面は摩耗が激しいが、幸うじてハケメ調整は確認できる。

総じて、B-2・B-3区の出土土器は、現在の既往の編年に沿わせると、住居跡の床直資料は月影I式の時期と考えられ、胎土等からは、搬入品として考えられるものはなく、地元、梯川流域で作られ

たものと考えられる。また、月影式の前段階に相当する法仏式土器の様相がみられるものとして、甕形土器では胴部上半に二枚貝の刺突や波状文が施されるもの（4、5、39、49、50）や口縁端部が外反せず直立及び内傾するもの、高杯に口縁端部を肥厚させるもの（60）をあげることができる。

B-3 区の竪穴住居跡は後世の古墳造営があることから決して遺存状況はよくないが、出土資料から河田山 I 支群における土地利用の開始時期は法仏式末葉からであり、月影 I 式併行の利用を最後に、短期間で終焉を迎えたものと考えられる。

観察表

○「層名」に関してはラベル読み取りのままの記載である。よって、周溝出土のものでも、取り上げ番号のみのものもあるため、図面記録から、出土地点がわかるものに関しては、「出土地点」に記載した。

○計測値の（ ）は残存地、[] は復元値を示す。法量は、口：口径、頸：頸部径、胴：最大胴部径、脚部：脚柱部径、底：底部径、底厚：底の厚さ と略して掲載している。

番号	NO.	遺構名、層名、取上番号	時期	器種	被熱	焼成	塗布	色調	胎土	口径、最大腹径、底径、頸部径、脚柱部径、器高、底の厚さ	備考
1	299	B-3 北西テラス I 区	月影 I	鉢	無	良	無	灰白色 (10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [24.6], 残存高 (7.3)	
2	300	B-3 北西テラスVI区	月影 I	高杯脚	無	やや良	無	灰白色 (10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	脚柱部径 3.5, 残存高 (7.7)	円盤充填法、透孔4方向
3	301	B-3 北西テラスVI区	法仏末～月影 I	甕	有	良	無	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [13.6], 最大腹径 [17.0], 頸部径 [12.4], 残存高 (10.3)	
4	302	B-3 北西テラスIV区	法仏末～月影 I	壺か	無	やや不良	無	灰白色 (10YR8/2)	粗(極粗粒砂並)、在地	頸部径 [13.3], 残存高 (4.8)	
5	303	B-3 北西テラスIV, VI区	法仏末～月影 I	壺か	無	良	無	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	密(粗粒砂少)、在地	頸部径 [12.7], 残存高 (5.1)	胴部上半に二枚貝による波状文あり
6	1-14	B-3 北西テラスIII区	月影 I	鉢	無	良	無	浅黄橙色 (10YR8/4)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径 20.0, 底径 2.8, 残存高 8.5, 底の厚さ 0.6	
7	304	B-3 北西テラスIV区	月影 I	鉢	無	不良	無	灰白色 (10YR8/2)	密(極粗粒砂並)、在地	口径 [18.8], 残存高 (5.6)	
8	258	B-3 1住 139,265,266,269	月影 I	壺	無	良	無	浅黄橙色 (10YR8/3)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径 [13.8], 頸部径 [7.5], 残存高 (3.5)	受口
9	260	B-3 1住 194,261,14,2 5,29,46,74,100,114,1 21,172,181,204,207	月影 I	壺	無	良	無	灰白色 (10YR8/2)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径 [15.0], 頸部径 [12.3], 残存高 (6.7)	有段口縁壺
10	262	B-3 1住 77,164,74,169	月影 I	鉢か	無	良	無	浅黄橙色 (10YR8/3)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [16.8], 残存高 (2.0)	
11	261	B-3 1住 168	月影 I	壺か	無	やや不良	無	浅黄橙色 (10YR8/4)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [18.4], 残存高 (2.5)	
12	257	B-3 1住 145,76,174,200	月影 I	甕	有	良	無	灰白色 (10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [15.0], 頸部径 [13.0], 残存高 (5.3)	受口
13	256	B-3 1住 118,161,219	月影 I	甕	有	良	無	橙色 (7.5YR6/7)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径 [13.8], 残存高 (2.8)	14 と同一か
14	252	B-3 1住 222,233, 木 リV区下層	月影 I	甕	無	やや不良	無	灰黄色 (2.5YR7/2)	粗密(極粗粒砂並)、在地	口径 [18.4], 頸部径 [14.4], 残存高 (3.8)	口縁部に2枚貝による擬凹線
15	254	B-3 1住 44,155,183, 124,4,5,145,225	月影 I	甕	無	良	無	橙色 (7.5YR6/6)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径 [22.8], 頸部径 18.7, 残存高 (4.7)	
16	264	B-3 1住 144,140,275	月影 I	甕	無	良	無	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	粗密(極粗粒砂並)、在地	口径 [25.2], 最大腹径 [26.0], 頸部径 [20.6], 残存高 (9.0)	

番号	NO.	遺構名、層名、取上番号	時期	器種	被熱	焼成	塗布	色調	胎土	口径、最大腹径、底径、頸部径、脚裾径、脚柱部径、器高、底の厚さ	備考
17	265	B-3 1住 77,156,199, 12,126,191	月影 I	鉢(台付鉢か)	無	良	赤彩か	浅黄橙色(10YR8/3)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [15.2], 残存高 (6.2)	内外面赤彩か
18	267	B-3 1住 26,129,132	月影 I	高杯の脚	無	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	密(粗粒砂少)、在地	頸部径 [16.5], 残存高 (1.8)	17と同一個体か
19	266	B-3 1住 24,42,173	月影 I	蓋(壺用)	無	やや不良	無	灰色(5Y5/1)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [9.4], 残存高 2.3	体部が内彎するもの
20	268	B-3 1住 27,36,45,206	月影 I	甕	無	やや不良	無	にぶい黄橙色(10YR7/3)	粗(極粗粒砂並)、在地	底径 3.2, 残存高 (6.2)	
21	269	B-3 1住 10,31	月影 I	甕	無	やや不良	無	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗密(極粗粒砂少)、在地	底径 4.6, 残存高 (2.6), 底の厚さ 0.5	
22	270	B-3 1住 71,152	月影 I	甕	有	やや不良	無	灰褐色(7.5YR6/2)	粗(極粗粒砂並)、在地	底径 2.6, 残存高 (2.0)	
23	271	B-3 2住 10,26	月影 I	甕	無	やや不良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径 [16.7], 頸部径 [14.0], 残存高 (3.6)	口縁部に二枚貝による擬凹線
24	272	B-3 2住 4,12号墳羨道下旧地表31,32,34	月影 I	甕	無	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	粗密(極粗粒砂並)、在地	口径 [25.2], 残存高 (3.8)	口縁部に二枚貝による擬凹線
25	276	B-3 2住 16,48,49,7	月影 I	甕	無	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	粗密(極粗粒砂並)、在地	底径 3.1, 残存高 (4.4), 底の厚さ 1.1	23の底部片か *2 住 45,50,62取り上げ甕口縁片あり
26	273	B-3 2住 30,75,76,80,112,9,8	法仏末～月影 I	器台	無	良	無	灰白色(10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	脚柱部径 5.8, 残存高 (5.6)	26,27 同一個体か
27	275	B-3 2住 51	法仏末～月影 I	器台	無	良	無	灰白色(10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	残存高 (2.0)	26,27 同一個体か
28	274	B-3 2住 76,82,20	法仏末～月影 I	高环か器台の脚	無	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	密(粗粒砂少)、在地	脚裾径 [16.6], 残存高 (3.9)	有段脚、段上に透かし孔有り
29	88	B-3 3住 床直-1,2	月影 I	壺	無	良	赤彩	灰白色(10YR8/2)	密(極粗粒砂少)、在地	口径 10.6, 最大腹径 14.5, 底径 3.8, 頸部径 9.2, 残存高 17.4, 底の厚さ 0.7	
30	277	B-3 12号墳 290, 羨道下旧地表 119, 旧地表 321	法仏末～月影 I	甕	有	良	無	褐灰色(10YR8/3)	粗(極粗粒砂並)、在地	口径 [15.6], 頸部径 [14.4], 残存高 (7.1)	口縁部に結束工具による擬凹線
31	278	B-2 181,B-3 3住床直4,5	月影 I	甕	有	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	粗(極粗粒砂多)、在地	口径 [21.4], 頸部径 [19.0], 残存高 (4.1)	未接合の胴部片有
32	290	12号墳 2.9(墳丘)	月影 I	甕	有	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	粗密(極粗粒砂並)、在地	口径 [24.3], 頸部径 [19.1], 残存高 (4.5)	
33	279	B-3 3住 床直-4,6	月影 I	鉢	有	良	無	浅黄橙色(7.5YR8/4)	密(極粗粒砂少)、在地	口径 [17.3], 頸部径 [14.4], 残存高 (5.3)	
34	282	10墳3土坑3,7	月影 I	甕	無	良	無	灰白色(2.5Y8/2)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径 [20.8], 頸部径 [17.2], 残存高 (4.2)	
35	280	10墳3土坑13,14,2,3,4,5, B-3 III 14	月影 I	高杯	無	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [33.6], 残存高 (5.1)	
36	283	10墳3土坑11	月影 I	甕	有	やや不良	無	にぶい橙色(2.5YR6/3)	粗密(極粗粒砂並)、在地	底径 3.6, 残存高 (4.3), 底の厚さ 0.8	
37	281	10墳1,2 10墳3土坑15	月影 I	蓋か	無	やや不良	無	灰白色(10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	残存高 (2.1)	
38	292	B-3 溝状土坑	月影 I	高杯か器台	有	良	無	灰白色(10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [25.0], 残存高 (3.6)	
39	293	B-3 溝状土坑	月影 I	甕	有	やや不良	無	にぶい黄橙色(10YR7/2)	密(粗粒砂少)、在地	残存高 (2.2)-	二枚貝鋸歯部の刺突胴部上半に有り
40	106	12号墳 277,284,289, 羨道下旧地表 151	法仏末	甕	有	良	無	にぶい黄橙色(10YR7/3)	密(粗粒砂少)、在地	口径 16.4, 頸部径 14.2, 残存高 (5.5)	ゆがみが激しい
41	305	B-3 南テラス 1区	法仏末～月影 I	甕	有	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	密(粗粒砂少)、在地	口径 [15.3], 頸部径 [13.5], 残存高 (4.6)	
42	289	12号墳羨道下旧地表 117,211	月影 I	甕	無	やや良	無	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗(極粗粒砂並)、在地	口径 [18.0], 残存高 (3.2)	二枚貝鋸歯部の刺突胴部上半に有り
43	288	12号墳西側周溝4, 羨道下旧地表9	法仏末～月影 I	壺	無	やや良	無	灰白色(2.5Y8/2)	粗(極粗粒砂並)、在地	頸部径 [11.0], 残存高 (4.7)	受口短頸壺

番号	No.	遺構名、層名、取上番号	時期	器種	被熱	焼成	塗布	色調	胎土	口径、最大腹径、底径、頸部径、脚裾径、脚柱部径、器高、底の厚さ	備考
44	285	12号墳 西側周溝2	法仏末～月影I	高杯脚	無	やや良	無	灰白色(2.5Y8/2)	粗密(粗粒砂少)、在地	脚柱部径[4.4]、残存高(2.3)	柱状脚
45	287	12号墳 西側周溝2,3,5	法仏末～月影I	高杯か器台	無	良	無	灰白色(2.5Y8/2)	粗密(極粗粒砂少)、在地	脚裾径[16.3]、残存高(5.5)	有段脚、段上に透かし孔有り
46	294	B-3 ホリ下層	法仏末～月影I	高杯か器台	無	やや良	無	灰白(10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	脚柱部径3.6	有段、47と同一か
47	295	B-3 ホリ下層	法仏末～月影I	高杯か器台	無	やや良	無	灰白(10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	脚柱部径3.6、残存高(12.3)	棒状脚、透孔三方
48	307	B-3 1-2Gr 14,17,4,18,8,19	月影I	甕	無	やや不良	無	灰白色(10YR8/2)	粗(極粗粒砂並)、在地	口径[14.5]、頸部径[11.8]、残存高(4.1)	
49	311	B-3 I 19,35,28,9 IV (24,25,27,36)	法仏末～月影I	甕	無	やや不良	無	浅黄橙(10YR8/3)	粗密(粗粒砂少)、在地	残存高(2.7)-	二枚貝鋸歯部の刺突胴部上半に有り
50	312	B-3 I 28,9	法仏末～月影I	甕	有	良	無	にぶい黄橙色(10YR7/2)	粗密(粗粒砂少)、在地	残存高(3.3)	二枚貝鋸歯部の刺突胴部上半に有り
51	107	B-3 I 49	月影I	高杯脚	無	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)～灰白色(2.5Y7/1)	密(中粒砂並)、在地	底径14.8、残存高(13.4)	柱状脚、透孔4方向
52	309	B-3 1-2Gr 32	月影I	高杯脚	無	やや不良	無	灰白色(10YR8/2)	密(粗粒砂少)、在地	脚裾径[13.8]、脚柱部径3.0、残存高(10.8)	小型、挿入法、透孔4方向
53	1-14	B-2 取上番号 18,20,25,26	月影I	甕	有	やや良	無	浅黄橙色(10YR8/4)	粗密(粗粒砂並)、在地	口径16.0、最大腹径15.8、頸部径13.0、残存高(9.5)	口縁部に二枚貝による擬凹線
54	324	B-2 取上番号 2(21,45)	月影I	甕	有	良	無	浅黄橙色(10YR8/3)	粗密(粗粒砂並)、在地	口径[15.6]、頸部径[12.0]、残存高(4.0)	口縁部に2枚貝による擬凹線
55	325	B-2 取上番号 45	月影I	甕	無	良	無	外: 橙色(5YR7/6) 内: にぶい黄橙色(10YR7/3)	粗密(極粗粒砂少)、在地	頸部径[12.7]、残存高(3.8)	口縁部に二枚貝による擬凹線
56	323	B-2 取上番号 22,24,25	月影I	甕	有	良	無	灰白色(10YR8/2)	粗(極粗粒砂並)、在地	口径[17.9]、頸部径[16.5]、残存高(4.6)	
57	326	B-2 取上番号 41	月影I	甕	無	良	無	明黄褐(10YR6/6)	粗密(極粗粒砂少)、在地	口径[19.5]、頸部径[16.5]、残存高(3.3)	
58	104	B-2 取上番号 14	月影I	壺(大型)	無	良	無	浅黄橙色(10YR8/4)	密(粗粒砂少)、在地	口径[34.0]、残存高(5.1)	
59	321	B-2 取上番号 65,91,172,58,99	月影I	壺	無	良	無	灰白色(10YR8/2)	粗密(粗粒砂並)、在地	口径[16.7]、頸部径[12.2]、残存高(11.4)	直口壺
60	316	B-2 溝1 34,40,132,170	法仏末～月影I	高杯	無	やや良	赤彩	浅黄橙色(10YR8/3)	密(粗粒砂少)、在地	口径[28.9]、残存高(3.0)	有段高杯
61	103	B-2 取上番号 47	月影I	高杯か	無	良	無	にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗密(粗粒砂並)、在地	口径[22.1]、残存高(4.3)	
62	320	B-2 取上番号 42	月影I	高杯	無	良	無	にぶい黄橙色(10YR7/3)	粗密(粗粒砂並)、在地	脚裾径3.8、残存高(11.6)	柱状脚、円盤充填法
63	318	B-2 北側テラス流土下	法仏末～月影I	高坏か器台の脚	無	良	無	灰白色(10YR8/2)	粗(極粗粒砂並)、在地	脚裾径[15.8]、残存高(4.7)	
64	322	B-2 取上番号 35,43(27,30)	月影I	壺	無	やや良	無	外: にぶい黄橙色(10YR7/4) 内: 褐灰色(10YR4/1)	粗(極粗粒砂多)、在地	底径4.3、残存高(3.1)、底の厚さ10.0	59と同一か
65	319	B-2 北テラス 流土下	月影I	鉢	無	やや不良	無	外: 浅黄橙色(10YR8/4) 内: 浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗(極粗粒砂並)、在地	口径[18.0]、残存高(4.9)	
66	1-15	B-2 取上番号 24の下,25,26	月影I	蓋(壺用)	無	やや良	無	浅黄色(2.5Y8/3)	粗密(粗粒砂並)、在地	口径13.4、残存高[7.6]	外反タイプ

第4節 奈良時代

第1項 河田山火葬墓群および関連遺構・遺物

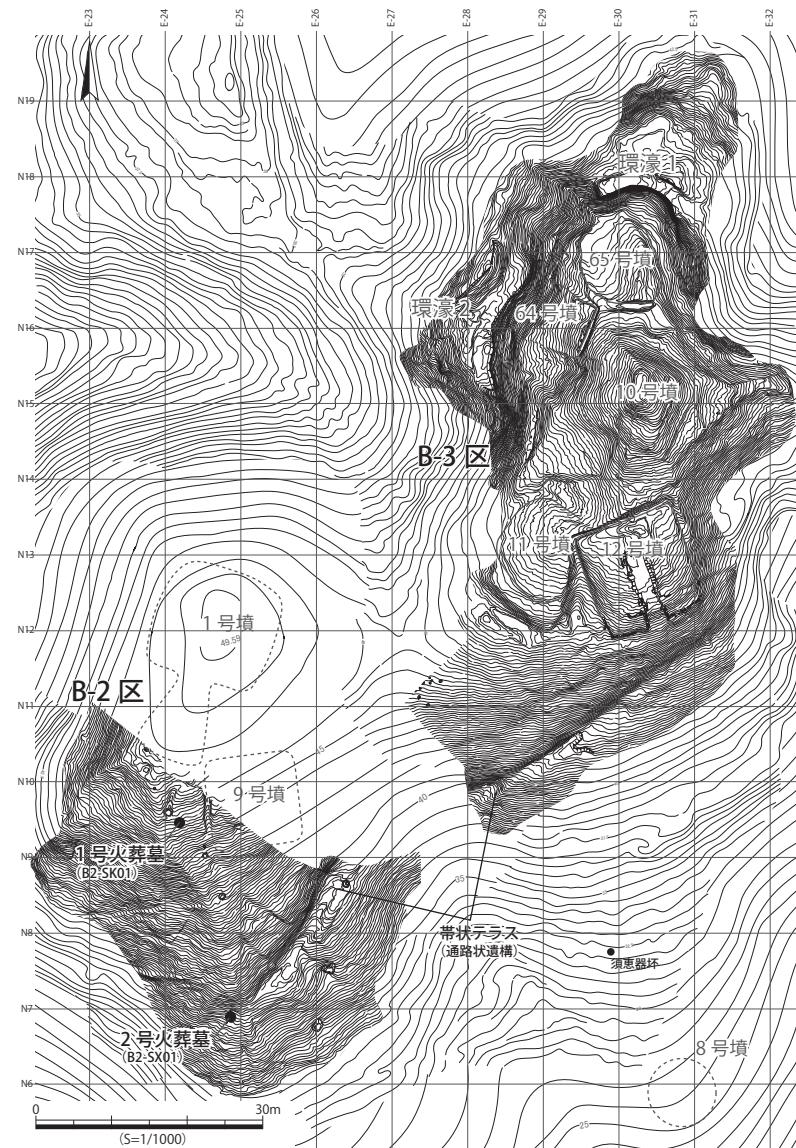
1. 位置と概要

河田山火葬墓群は、河田山古墳群I支群が展開する二こぶ状の尾根（河田山南尾根）の南西半部で、前方後方墳の河田山1号墳を頂上にもつB-2区とした尾根に位置する。北東半部B-3区の南斜面に寄せている終末期古墳12号墳とは谷をはさんでほぼ並行する南斜面に同じく終末期古墳の9号墳が築造されており、火葬墓も同じく白山を眺望する南向き斜面に分布する。B-2区の南向き斜面は、調査範囲中央部に稜線が走り、それより西側は地滑り地形と思われる。9号墳の西に隣接する1号火葬墓（B2-SK01）は尾根頂上に近く、比較的安定地形上にあるが、斜面下方の2号火葬墓（B2-SX01）は、その地滑り地形の範囲にあり、骨蔵器の出土によって認定した遺構である。

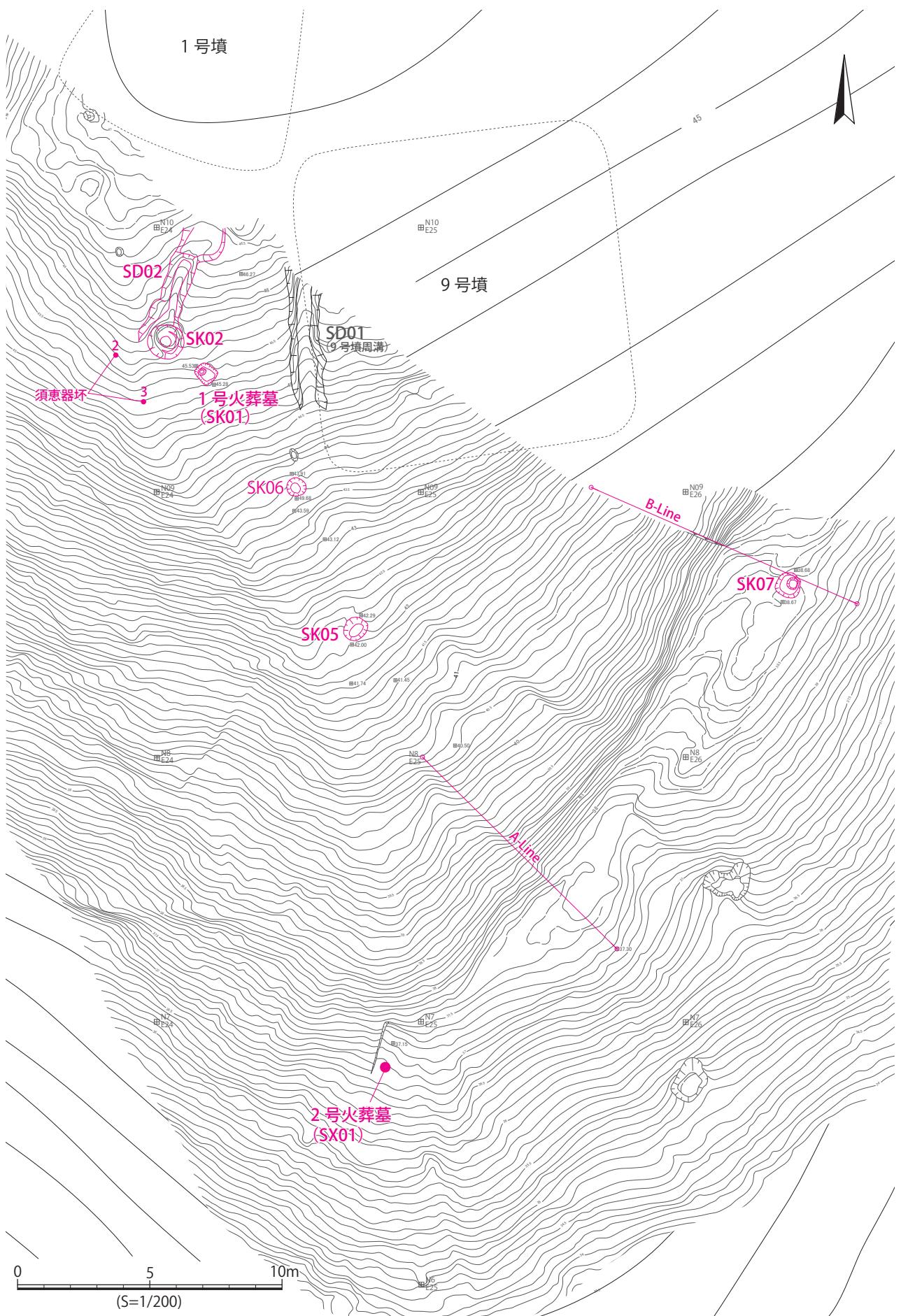
このB-2区尾根の調査区内では、第31図で示したとおり、いくつかの土坑と溝状遺構が検出されている。溝のSD01は終末期古墳の9号墳周溝であるが、その他はいずれも焼土や炭化物を伴うなど、火葬墓との関係が考えられる。また、1号火葬墓の西側稜線上にほぼ完形の須恵器壺2点が出土している。尚、B-2区では、骨蔵器以外で奈良時代遺物の出土はこの壺2点のみである。

B-3区の12号墳裾からB-2区2号火葬墓に向かって延びる帶状テラスは、調査時における土層の把握状況に一貫性が無く、所属時期を決めかねている。当初は環濠を想定していたものだが、通路状を呈しており、終末期古墳あるいは奈良時代火葬墓に関連する墓道の可能性も考えられる。土層断面は、B-2区のA-LineとB-Lineを提示したが、本区では遺構に伴う明確な遺物は検出しておらず、12号墳の裾で石室と同時期遺物が検出されている。

（※本項の土器記述は望月精司の教示を得た。）



第30図 河田山南尾根全体図



第31図 B-2区 奈良時代遺構分布図

2. 火葬墓

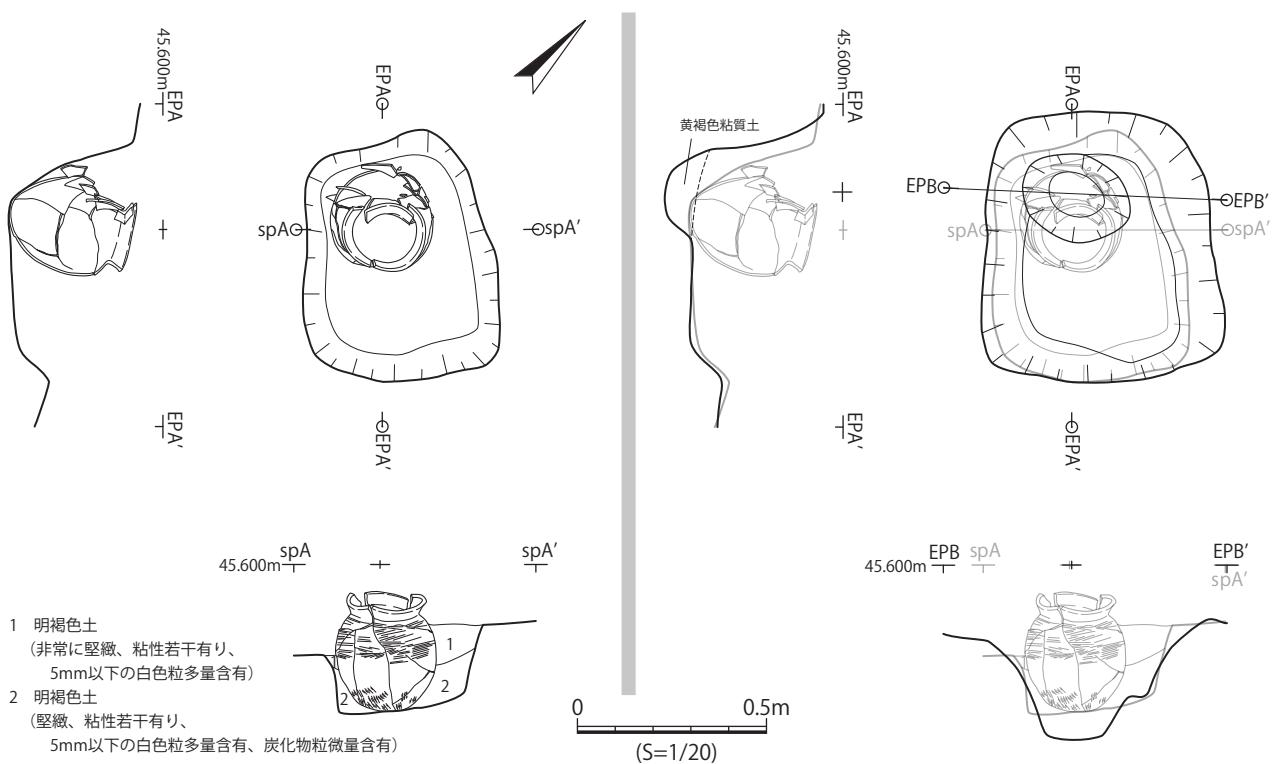
(1) 1号火葬墓 (SK01)

検出状況 (第 32 図)

9号墳周溝の西側、SK02の東斜め下方に位置する。短辺の一方が若干広い隅丸長方形プランを呈し、検出時と完掘時では異なる平面規模で記録されている。検出時の規模は、平面が $65 \times 52\text{cm}$ 、深さは斜面上方で約 33cm 、下方では 10cm 程度と浅い。須恵器甕を利用した骨蔵器は、山側の立ち上がり部に底部を寄せて据え付けられ、斜面下方へやや傾いている。完掘時の平面図を見ると、上面で $70 \times 65\text{cm}$ と拡大しているが、ひろがった短軸の土層断面が無く、根拠は不明確である。ただ、ちょうど骨蔵器が据えられていた部分には、黄褐色粘質土で埋めた浅い円形の掘り込みが検出され、埋土は山側の掘方土と連続して把握されている。その掘方の意味するところは不明である。

骨蔵器 (第 33 図 1)

須恵器小甕で、器高 30.0cm 、最大胴径 26.8cm 、口径 19.2cm を測る。頸部径は 19.2cm で口縁部高 2.7cm である。胴部下位 $1/3$ 強に丸底叩き出しの平行線文 (Ha 類) が明瞭である。それ以外の胴部は無紋板材 (柾目板材) による叩き調整で、おそらくは成形段階というよりも、表面には粘土縞が観察されるので、成形時に一旦ケズリが介在し、最終的に整形を目的とした小刻みな横位叩きを行ったと考えられる。頸部近くに至ると、ほぼ叩き痕はナデ消されている。内面は細い彫り込みの同心円文あて具で、図面では前後関係の把握のために明瞭に描いているが、実際にはかなりナデ消しがあり、特に底部叩き出し部分で不明瞭である。口頸部近くでカキ目調整が施されているが、同心円あて具に先行する可能性がある。口縁部は内外面ともにロクロナデである。焼成良好で色調は灰白色から一部暗オ



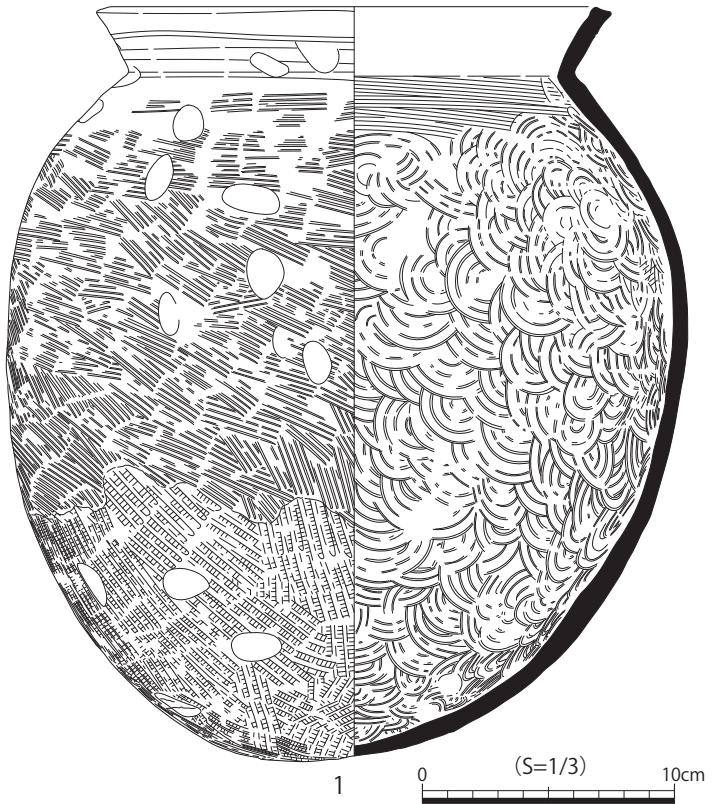
第 32 図 1号火葬墓 平面図・断面図

リーブ色。内面は下方に行くほど褐色を帯びており、内容物による2次的な影響かもしれない。胎土は白色良質で能美窯産と考えられる。時期は、北陸古代土器編年のIV₂古期。

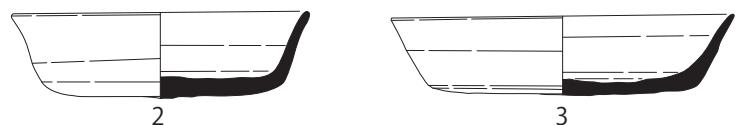
1号火葬墓周辺出土須恵器

(第33図2・3)

4・5は、前述したSK02と1号火葬墓の西側で出土した無台壺2点である。4は、口径11.8cm、器高3.4cm、底径9.6cmで、厚い底部から丸みをもって立ち上がり、やや外反気味に口縁に至る。底部は右回転ヘラ切り後ナデ。焼成良好で青灰色を呈する。5は、口径13.6cm、器高3.2cm、底径10.6cmで、薄手の底部から外傾して立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後ナデで、薄手のためか内面に底部ヘラ切りで起こしたときの不陸が見られる。焼成良好で灰白色を呈する。両者ともに主に底部内外面に使用によると思われる摩滅が見られる。2点とも1号火葬墓と同じIV₂古期に位置づけられ、南加賀窯産と考えられる。



第33図 1号蔵骨器

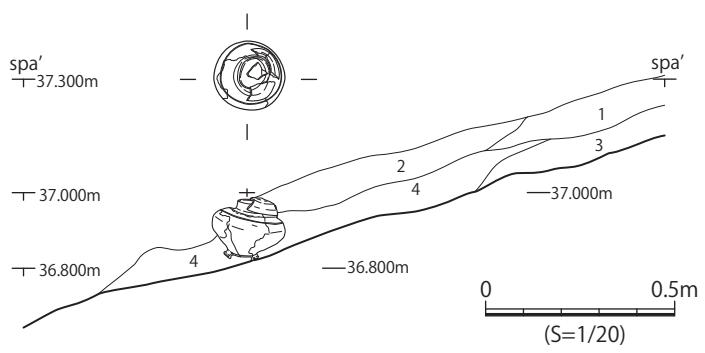


第34図 1号火葬墓周辺出土須恵器 (S=1/3)

(2) 2号火葬墓 (SX01)

検出状況 (第34図)

2号火葬墓は、1号火葬墓から尾根稜線を水平距離で約27m下ったところに位置し、標高差は約8.5mである。土坑のプランは確認されず、遺物の出土により急遽土層断面を設定したものだが、断面観察でも特に遺構としての痕跡を確認できていない。しかしながら、写真には、骨蔵器から僅かに離れた位置で軟質の礫が配されている様子が観察され、礫で囲う施設があった可能性がある。位置的には、尾根地形が崩れている範囲にあるが、須恵器短頸壺に須恵器壺が蓋として使用された状態が維持されており、原位置からの移動はさほど大きくなかったものと推定したい。



- 1 明褐色土（非常に堅緻、粘性乏しい、黄褐色礫（5mm）若干含有）
- 2 褐色土（堅緻、粘性乏しい、黄褐色礫（5mm）含有）
- 3 褐色土（若干赤味、堅緻、粘性乏しい、炭化物粒微量含有）
- 4 暗褐色土（堅緻、粘性乏しい、炭化物粒・黄褐色礫（5mm）微量含有）

第35図 2号火葬墓 平面図・断面図



2号火葬墓検出状況写真（手前に礫が見える）

骨蔵器（第36図4.5）

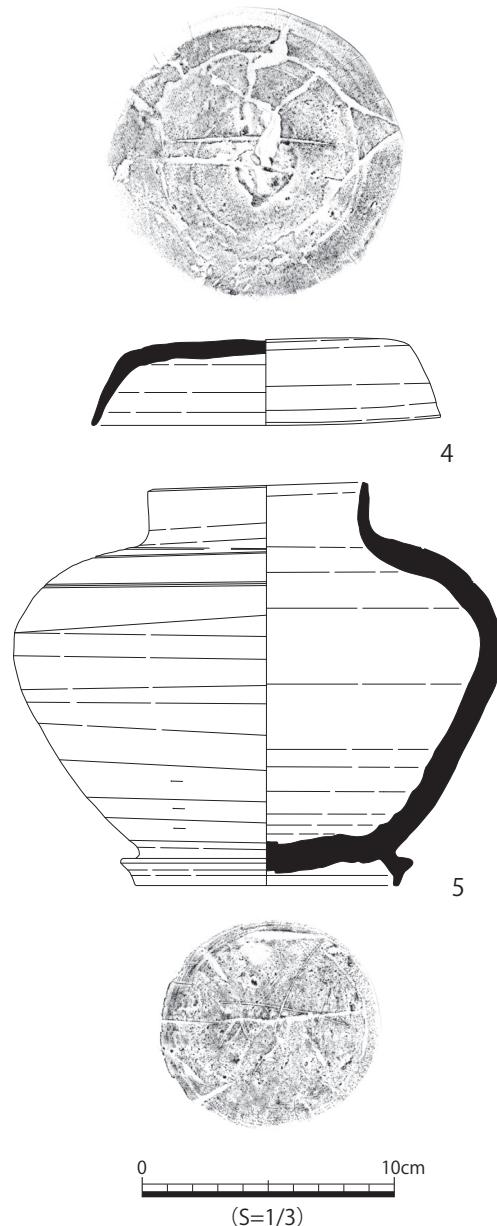
4は須恵器短頸壺で、器高16.0cm、胴部最大径19.3cm、口径8.7cm、高台下底径10.4cmを測る。胴部下方1/3強が回転ケズリ、他はロクロナデ、肩部に2条の沈線がめぐる。頸部下には口径11.5cmとなる蓋の重ねき痕が残されているので、本来は蓋がセットで存在していたことがわかる。焼成は良好堅緻で、底部や体部に焼成時の亀裂が入っている。青みがかった灰白色を呈し、肩部に淡緑色の自然釉がみられる。高台下底に窯土が付着し、外低面に「×」のヘラ記号がある。

5の蓋は、須恵器無台坏を利用しており、口径13.9cm、器高3.5cmを測る。やや厚手の平底から僅かに丸みを帯びながら外傾して立ち上がる浅みのタイプで、底部は回転ヘラ切り後のナデがみられる。底部内面に回転によらない複数回のナデがみられる。焼成はやや不良で赤橙色を呈し、胎土は白色粒子を含んで能美窯産と考えられる。底部外面に「-」のヘラ記号がある。壺・坏ともにIV1期と考えられる。

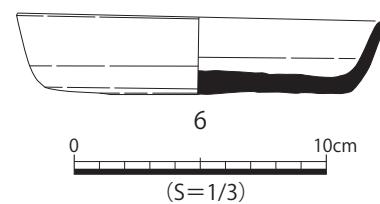
近隣出土須恵器（第37図6）

6は、第30図のN8E30杭付近の出土で、火葬墓からかなり離れているが、一連の関係資料であろう。B-3区12号墳の南下方、保存区域の8号墳に近い位置からの単独出土である。完形に近く復元されるが、周辺に遺構等は検出されていない。

口径14.6cm、器高3.15cm、底径12.2cmで、厚い底部から弱く外傾して短く直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後ナデ。焼成良好で灰白色を呈する。胎土から南加賀窯産と考えられ、2号火葬墓と同じIV1期に位置づけが可能である。



第36図 2号骨蔵器



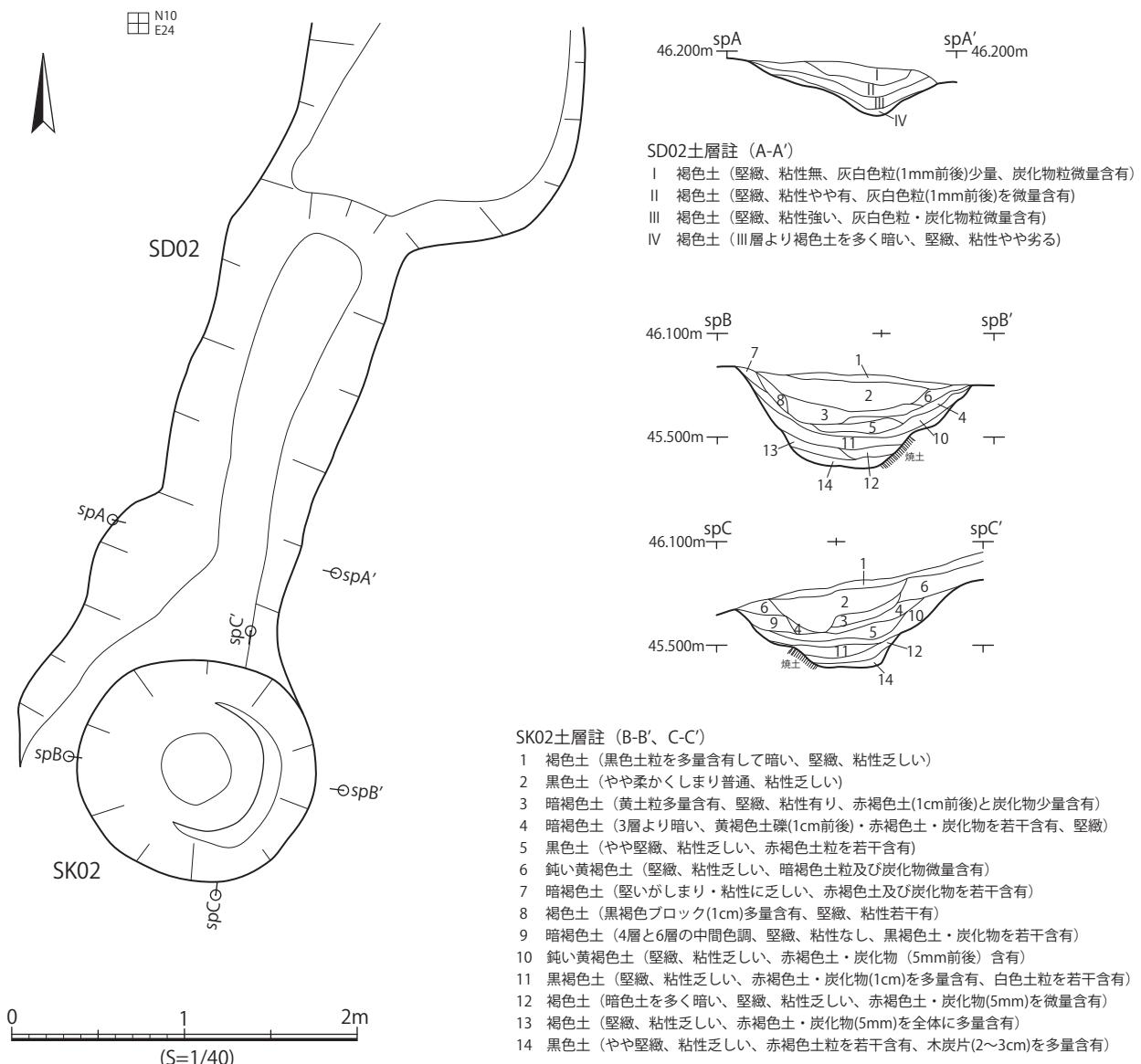
第37図 近隣出土須恵器

3. 溝・土坑・帯状テラス

SD02・SK02（第38図）

尾根の頂上近くに位置する。1号火葬墓の北西に隣接して土坑SK02、それに連結するような溝SD02が1号墳の前方部から下ってきている。SD02は断面浅い皿形を呈し、覆土は微量の炭化物を含むが、SK02との共時性は明確ではない。また、覆土からは伴うことが明確な遺物は検出されていない。

SK02は、直径約1.4mの円形プランを呈し、深さは約60cm、断面逆台形でゆるやかな二段掘り状となっている。5層の黒色土より下は炭化物・木炭片を多量に含む層序が重なり、各層に含有している赤褐色土はおそらく焼土由来と考えられる。2段掘りの肩部付近の一部床面に焼土（焼床）痕跡が認められた。これらのことから、1号火葬墓との関連が想定される。



第38図 溝SD02・土坑SK02平面図・断面図

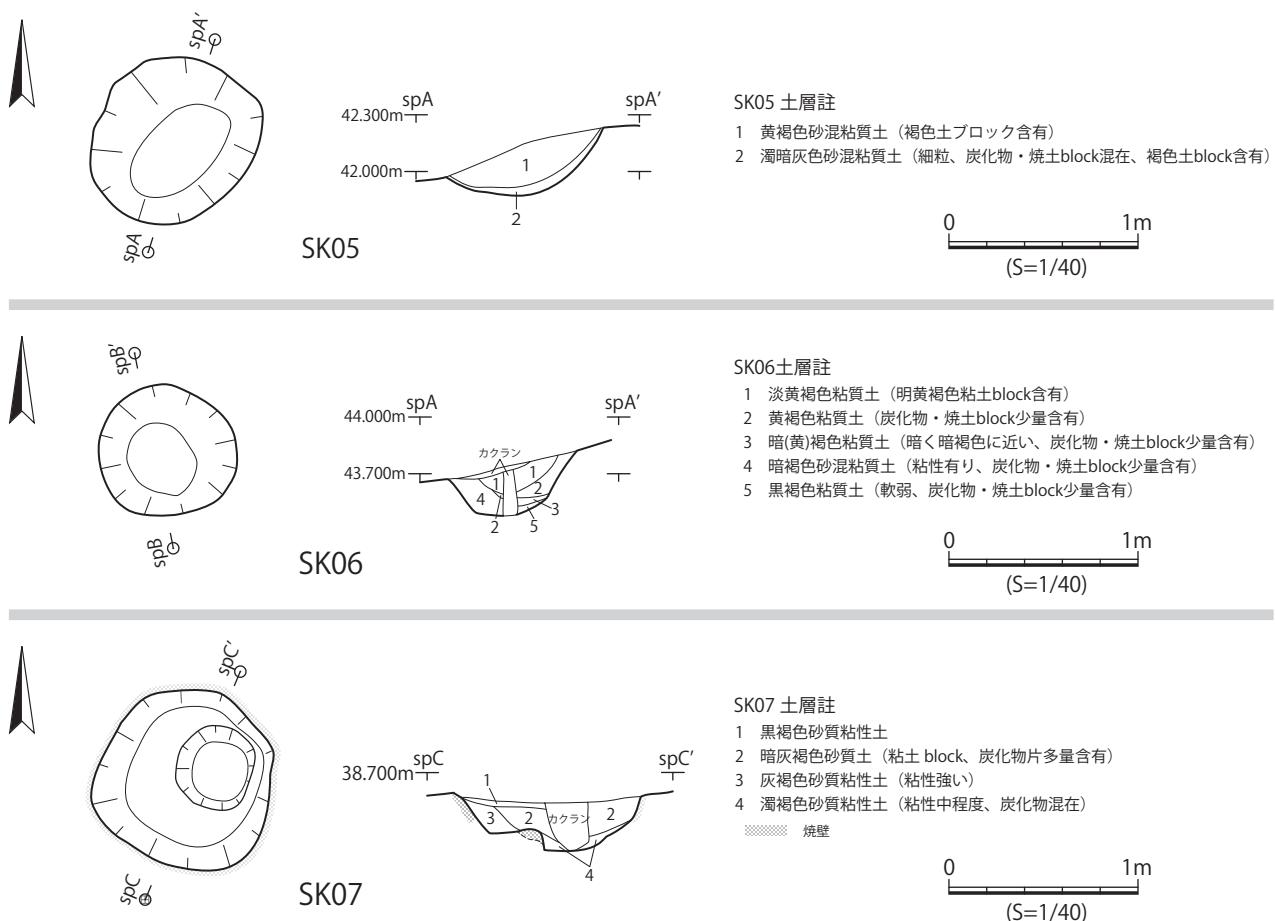
SK05、SK06、SK07 (第39図)

土坑SK05とSK06は、1号火葬墓(SK01)からまっすぐ斜面を下るように約5m間隔で配置されている。SK05は95×84cmの楕円形プランで、山側からの深さ約35cmを測る。SK06は径72cmの略円形プランで、山側からの深さは約34cmを測る。いずれも断面皿形から椀型を呈し、覆土には炭化物及び焼土のブロックが含有されている。遺物の検出は無い。

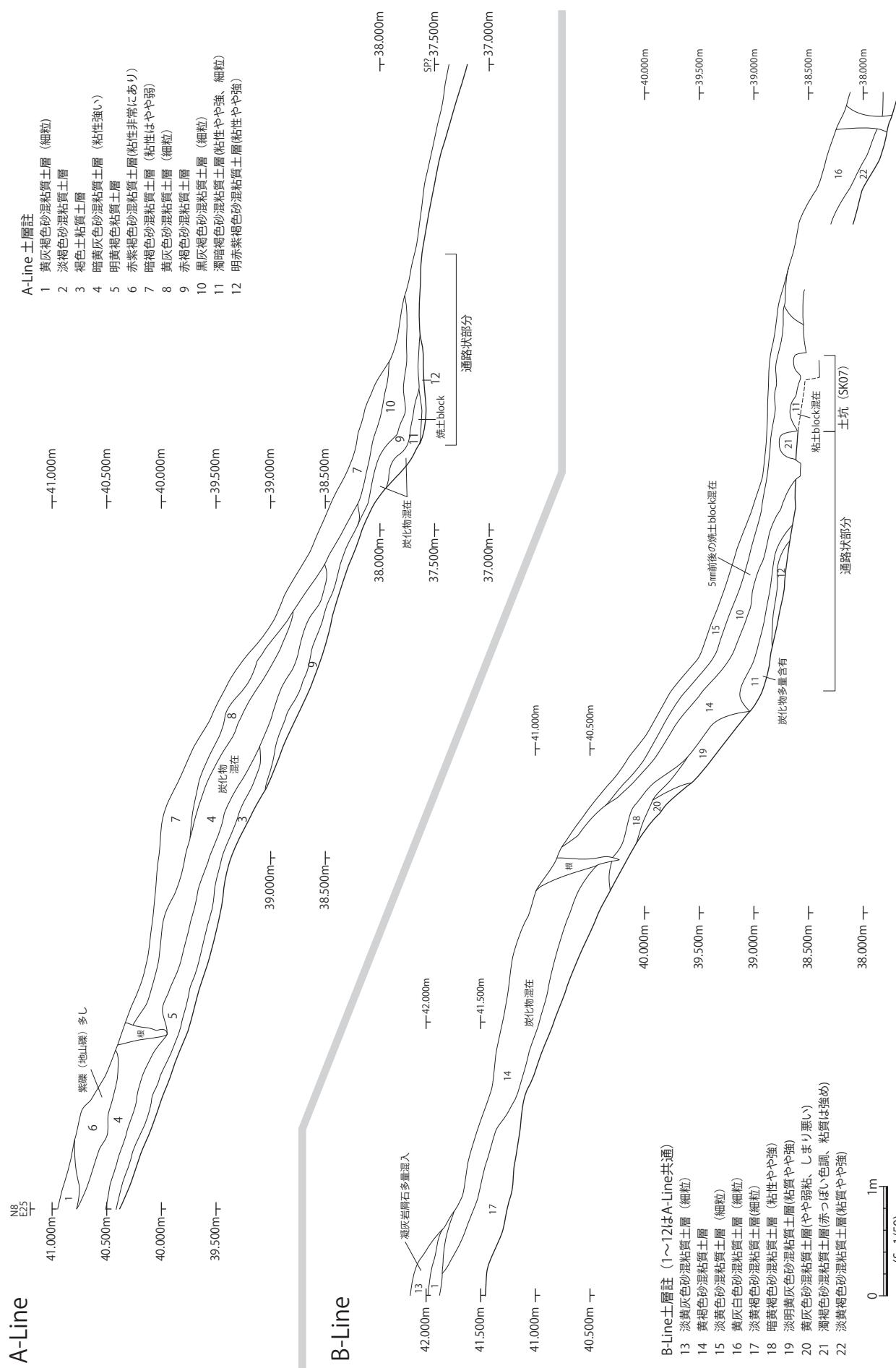
SK07は2号火葬墓につながる通路状遺構のテラス面で検出された。一辺94cmほどの隅丸略方形プランで、深さは32cmと浅いが、下底に円形の浅い落ち込みのある2段掘り状を呈する。輪郭は焼壁がめぐり、内部に焼床も部分的に確認された。遺物の検出は無い。

帯状テラス(通路状遺構)(第30・31・40図)

位置と概要でも述べたように、B-3区の12号墳裾からB-2区2号火葬墓に向かって延びる帯状テラスである。調査時における土層の把握状況に一貫性が無く、所属時期を決めかねていることも先述したとおりである。A-Line・B-Lineいずれの土層断面でも、テラス部分で炭化物および焼土ブロックを含む堆積土が認められる。また、B-Lineでは重なるSK07との間に明確な切り合いを認めない。むしろ連続性があることから、この帯状テラスは、火葬墓の段階に近いものと判断し、墓道の可能性のある通路状遺構も想定した。ただ、各断面にみる斜面上部の流土層との前後関係に違和感があり、層の切り合い関係に検討余地を残している。B-Line最上部の13層は、凝灰岩の屑石を大量に含む層で、おそらく切石積横穴式石室が想定される9号墳由来のものである。9号墳は、相当破壊が進んでいることが想定されるため、盜掘段階の堆積層であろう。

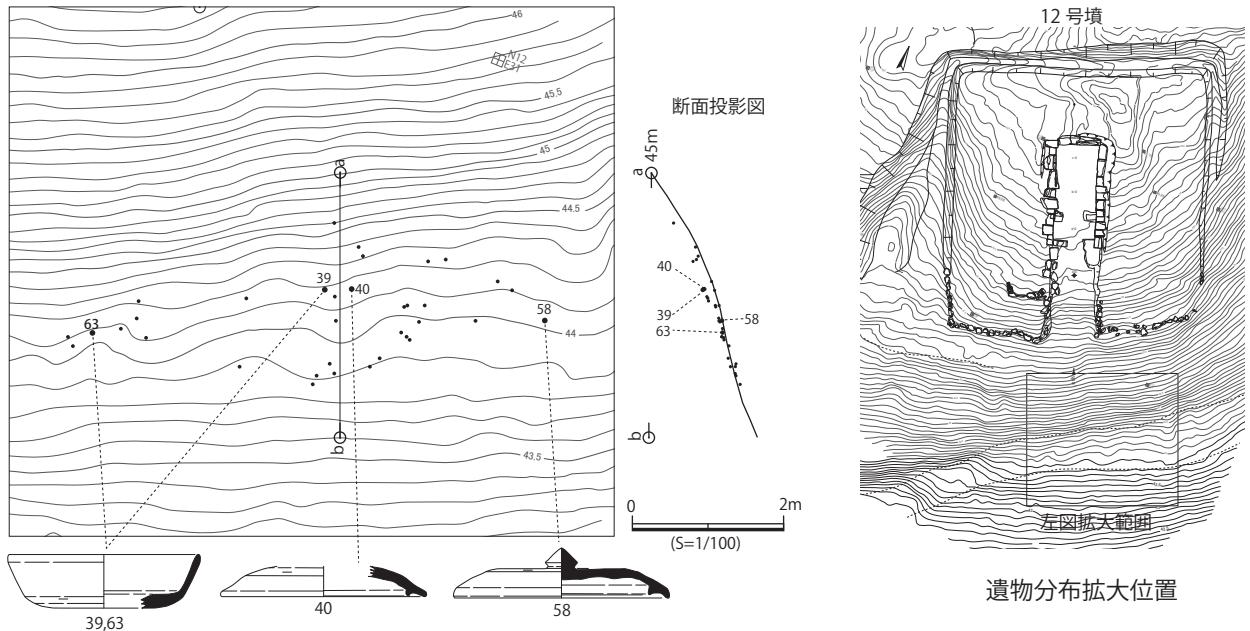


第39図 土坑SK05、SK06、SK07平面図・断面図



第40図 B-2区 帯状テラス（通路状遺構）土層断面図

尚、B-3 区側の同遺構についての土層断面は提示できないが、12号墳下方の本テラスでは、12号墳の石室由来の遺物が伴っているので、第41図に出土状況を提示する。ほぼテラス面を分布範囲としているが、すべて破片状態での出土であり、また、この中には高地性集落に伴う弥生土器片も僅かに混在する。第41図では、コンタ読み取りによる断面に遺物出土レベルを投影した。石室築造時の墓前祭祀行為に伴うものか、石室内部の片付けによるものかはわからないが、ほとんどの遺物は流れ込みの状況とはいえ、ほぼ地山直上から検出されており、上下差はさほどみられない。一応、本遺構の上限を示すものとして理解しておきたい。

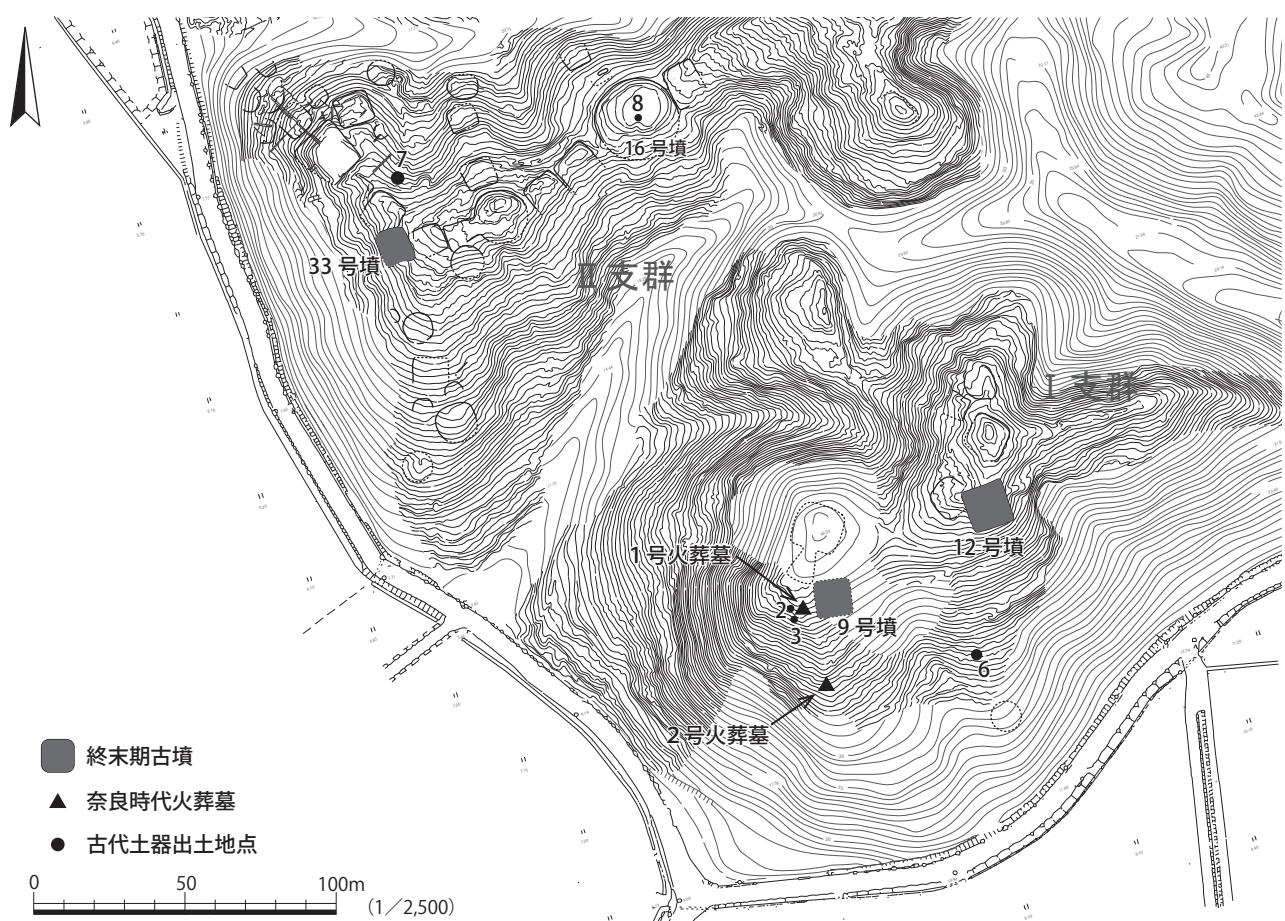


第41図 12号墳下方の帯状テラス遺物出土状況図

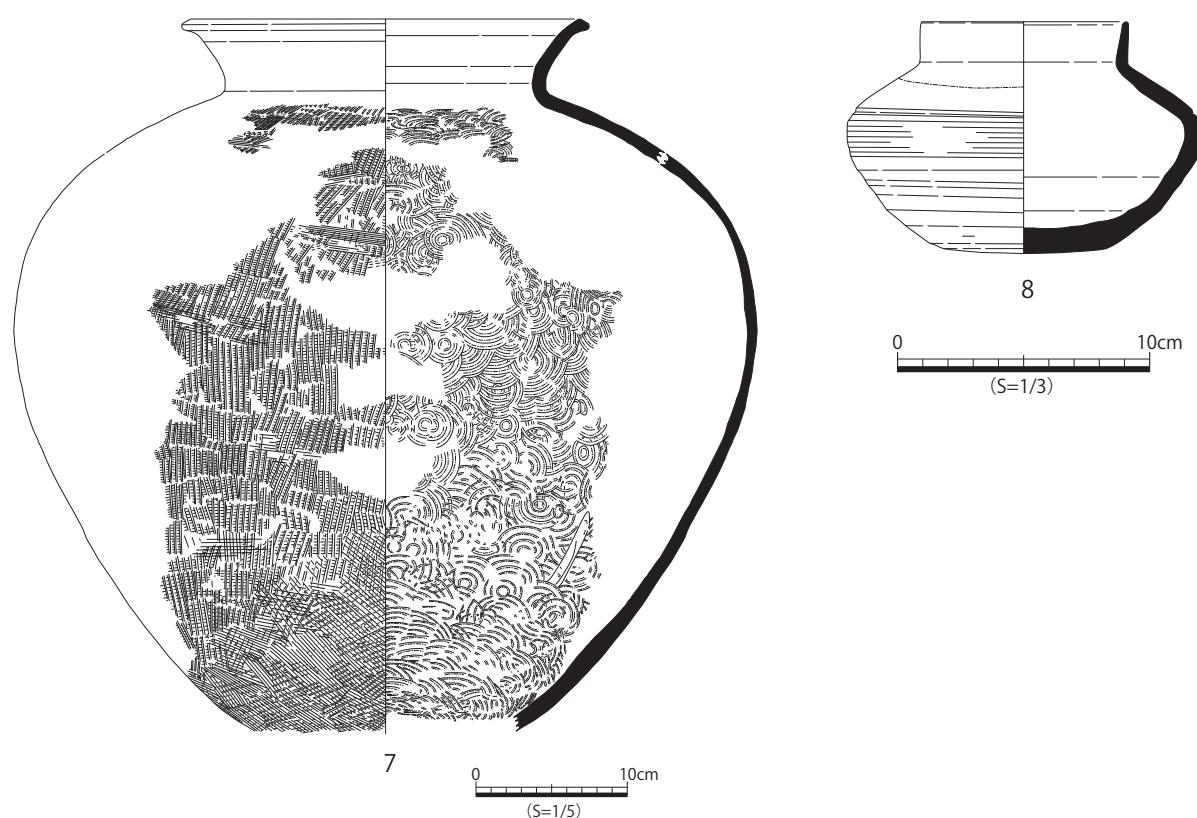
4. 河田山33号墳の尾根からの関連遺物

河田山の2基の火葬墓は、河田山12号墳や9号墳といった終末期古墳との間に直接的な系譜は別として、墓地選定意識の上で強い関連性が推測される。同様の視点で、もう一つの終末期古墳である33号墳の立地するⅡ支群の丘陵地に着目すると（第42図）、33号墳の北側斜面に、須恵器甕が単独出土していることが注目される（第43図7）。骨片等の検出記録は無いが、破片が一箇所に集中して検出された。北陸古代土器編年のIV₁～IV₂古期と考えられ、火葬墓に近い段階である。口径25.7cm、頸径21.3cm、胴部最大径49.3cmで、器高は47.3cmが残存し、推定で約50cmである。下部約1/3が底部叩き出しで、胴部とは工具自体は異なるが、工具類別は共通している。外面叩き具がHa類、内面あて具は本来時期的にはDc類が主流を占める段階だがDa類である。焼成はやや不良で、色調は外面灰黄色、内面淡い褐色を呈する。砂粒は目立たずシルト質で、能美窯産と考えられる。

関連資料として掲載した短頸壺（第42図8）は、16号墳主体部の陥没痕から出土した須恵器である。16号墳は、直径約27mを測る河田山古墳群最大規模の円墳で、前期古墳に位置づけているが、本品は終末期古墳に並行するⅡ₂～Ⅱ₃期と考えられる。報告書Ⅰにおいて出土状態を記述していたものの、実測図を提示していなかったので、ここに補遺として掲載する。口径8.1cm、胴部最大径14.1cm、器高9.2cmを測る。底部回転ヘラケズリで、肩部に1条の沈線がめぐる。口径約10cmとなる蓋の重焼痕が見られる。焼成良好・堅緻で灰白色を呈し、砂粒少なめだが南加賀窯産であろう。



第42図 終末期古墳と火葬墓関連遺物の分布



第43図 河田山33号墳の尾根からの関連遺物

第2項 河田山1号窯跡

1. 遺跡の概要と調査方法

【遺跡概要】 河田山1号窯跡は、河田山の北尾根で最も高所となる頂上部に立地する単独築窯の須恵器窯跡である。標高41mから44mに築窯されており、丘陵ふもとの標高10mから、30m以上登ったところにある。近隣に須恵器窯の分布はなく、工房らしき遺構も近隣では確認できず、何故、このような作業効率の悪い場所を選定したのかが問題である。

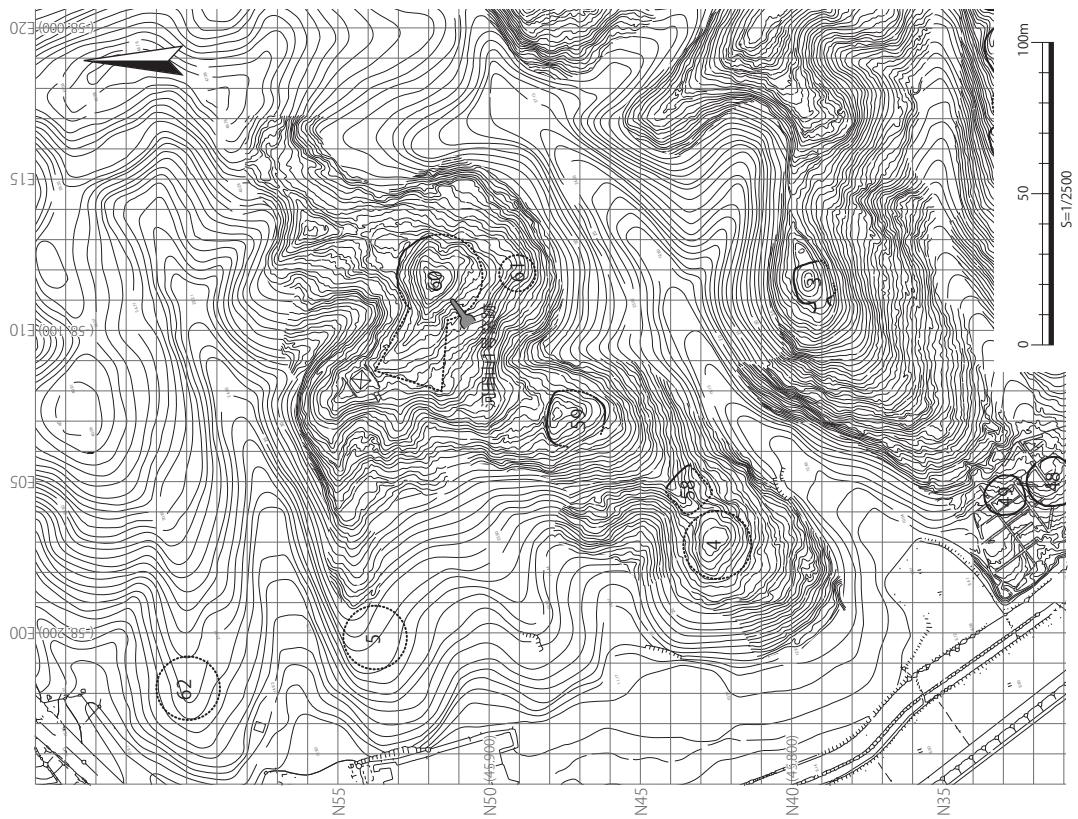
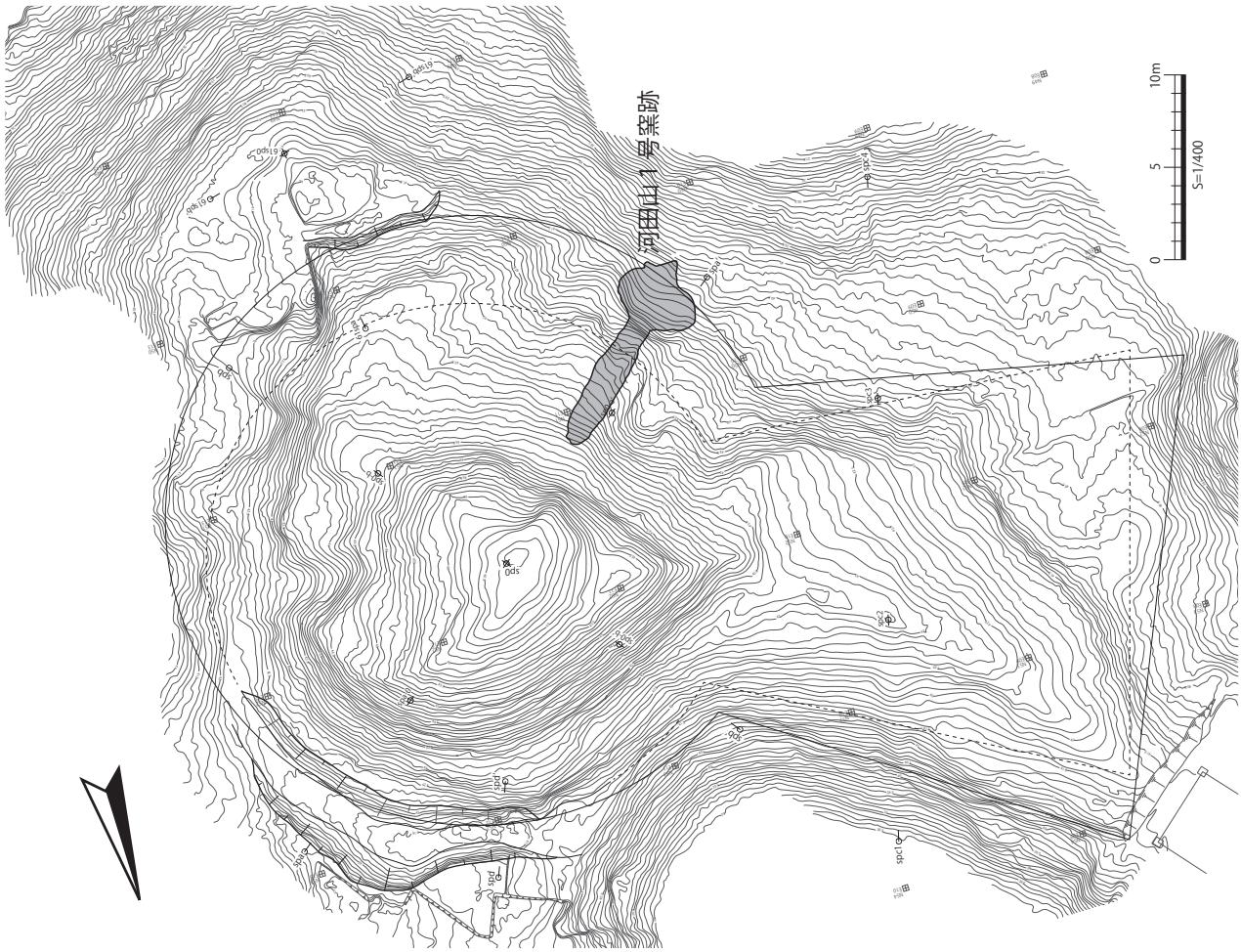
しかも、当窯跡は、河田山古墳群最大の全長50mを超える前方後円墳（河田山60号墳）の後円部墳丘を切って構築されており、意図的な立地としか言いようがない。河田山60号墳は4世紀頃を想定する前期古墳であり、河田山1号窯跡が8世紀初頭であるので、3～4世紀の世代の開きはある。ただ、河田山古墳群としては、古墳出現以降、4世紀後葉からの停滞期、6世紀から7世紀前半までの断絶期はあるものの、7世紀後葉に再び古墳築造がなされており、8世紀代の火葬墓へと続く。

つまり、当丘陵は古墳群終焉後も、在地首長層の墓域として認識されていた山であり、意図的にそのような場所を須恵器窯の構築場所に選んだこととなろう。他地域では、隣接する時期の群集墳と須恵器窯が同じ丘陵斜面に営まれる事例は多々あり、須恵器窯の廃窯後に窯体を掘り直し埋葬施設とする事例も確認されるなど、須恵器窯と埋葬施設とは近い関係にある。



第44図 能美窯跡群の分布

第45図 河田山古墳群と河田山1号窯跡の位置



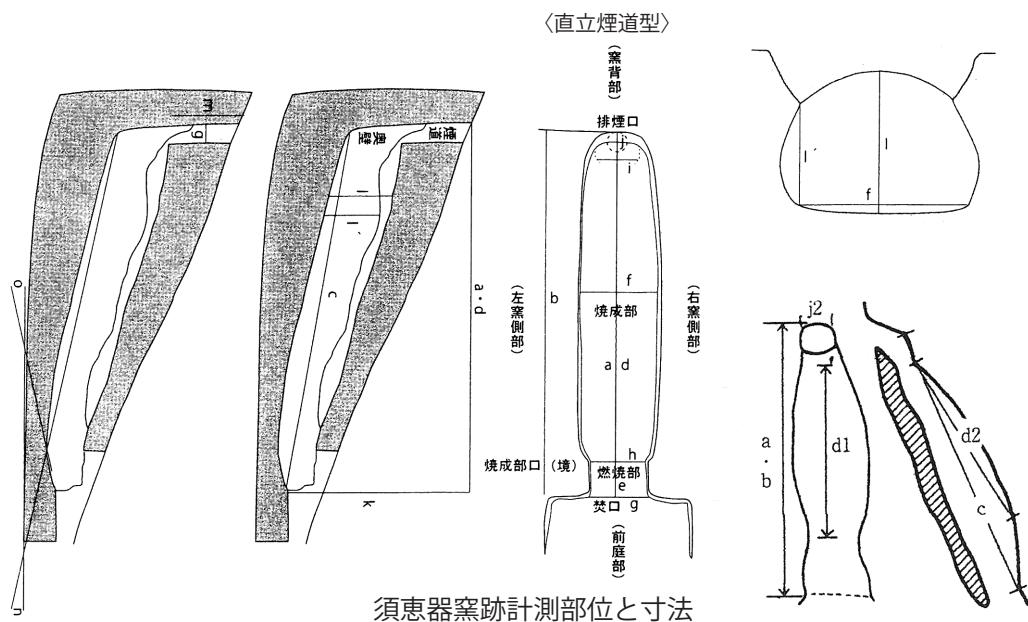
そもそも須恵器作りは大甕作りを主眼として日本に取り入れられたものだが、その背景には神祭りを行う際の酒甕作りが大きな役割を担っていたのだろう。須恵器生産はある意味、神聖な行為を帶びていた可能性があり、そのような意識が須恵器窯と古墳を結びつけていた可能性がある。

さて、窯跡群という視点で見ると、当窯跡は、能美窯跡群の小松群に属する。小松群の須恵器窯跡分布を見ると、単独基築窯、隣接地に同時期または連続する時期の窯が築かれないとといった特徴があり、能美窯跡群の中核的なエリアである辰口群とは異なる経営の在り方を示す。同時期の須恵器窯跡は、近隣ではなく、能美窯跡群でも辰口北群に位置する湯屋支群や来丸支群が同時期のものである。

このように考えると、能美窯跡群の一支群と考えるよりも、河田山1号窯跡については、在地首長層、領主層の墓域であった河田山に築窯する意識が働いていた可能性が高いと考える。

【調査方法】 当窯跡は、河田山60号墳の発掘調査において新たに発見された遺跡である。地下掘り抜き式の窯窓であり、窯体が地下深く掘り込まれていたため、前庭部部分にあたる灰層と須恵器群の検出によって発見されたものである。窯体確認が遅れたこともあり、窯体部分の土層断面図は作成できず、窯体掘削後の断面のみの記録となった。明確な灰原の形成もなく、出土資料のほとんどは、窯体内と前庭部からの出土である。

【窯体の計測部位と方法】 須恵器窯跡の記述に関しては、下記の図と計測方法の凡例に基づく。



窯体実効長 (a)	焚口から排煙口奥端までの水平距離。閉塞区間の長さ	煙道径 (j)	煙道内の最小となる径。排煙口径も付記
窯体水平長 (b)	焚口床端から奥壁までの水平距離	窯体実効高 (k)	焚口床面から排煙口上端までの奥壁上端の比高差
窯体実長 (c)	焚口床から奥壁床までの斜距離。	窯体内最大高 (l)	焼成部内最大高部位での床から天井までの垂直距離
焼成部長 (d)	焼成部境から奥壁・排煙口までの水平長	煙道長 (m)	焼成部開口箇所から排煙口までの長さを斜距離で
燃焼部長 (e)	焚口から焼成部境までの水平長	焼成部床傾斜 (n)	焼成部床の一定となった箇所から奥壁までの床面平均傾斜角
最大幅 (f)	焼成部での窯体最大幅を床面で水平計測した長さ	燃焼床傾斜 (o)	焚口端から焼成部境までの床面平均傾斜角
焚口幅 (g)	焚口の幅を床面で水平計測した長さ	窯体面積 (p)	焚口から奥壁・排煙口・窯尻までの窯体内床面積
焼成境幅 (h)	焼成部境の幅を床面で水平計測した長さ	焼成部床面積 (q)	焼成部境から奥壁・排煙口・窯尻までの床面積
奥壁幅 (i)	奥壁の幅。床面水平計測。砲弾型の場合は丸くなる手前	燃焼床傾斜 (r)	焚口端から焼成部境までの床面面積

2. 検出された遺構

河田山1号窯跡で検出された遺構は、須恵器窯窓1基とそれに伴う前庭部のみである。河田山古墳群最大規模の前方後円墳、60号墳の調査中に発見されたことと、地下深くに掘り込まれた掘り抜き式の構造であったため、地表面での排煙口が確認されないまま掘削された。このために、排煙調整のための作業場テラスなど、窯背部施設が調査されずに失われた可能性が高い。以下に、須恵器窯本体部分と前庭部とに分けて報告する。なお、筆者は以前、須恵器窯跡の構造名称や部位名称については用語整理したことがあり、今回報告の須恵器窯跡の記述に関しても、その筆者分類案（望月2010a）に基づいているので参考願いたい。

(1) 須恵器窯跡の構造特徴と各部位の状況

須恵器窯跡の立地する斜面は21度程度の傾斜地で、先述したように尾根部頂上付近に築造される。立地斜面の標高は、窯戸で44.2m、前庭部末端で41.0mであり、窯跡施設の比高差は3.2mを測る。

筆者の須恵器窯構造分類案に基づけば、当窯跡は、地下掘り抜き式構造の窯窓にあたる。窯体は等高線にほぼ直交するように掘り込まれ、主軸方位はN—47°—Eを測る。窯体平面プランは窯体の胴張りや焼成部境の窄まりの弱いすん胴形で、窯体水平長775cm、実長では805cmを測る中クラスの規模を持つ。大口開口の直立煙道型の排煙部構造で、焼成部床面傾斜が25度程度の比較的緩傾斜を呈す。7世紀中頃に出現する直立煙道緩傾斜窯構造で、北陸西部ではこの時期で最も一般的な窯構造と言える。奥壁から前庭部までほぼ完存する良好な窯跡資料と言えるが、発見の経緯もあって、本来残っていたであろう、排煙口部分の施設が十分な調査がなされないまま掘削されたようである。

以下に、詳細な窯跡寸法の表を示し、各部位の説明を加える。

【1号窯跡計測表】(計測値は前掲計測凡例に基づく)

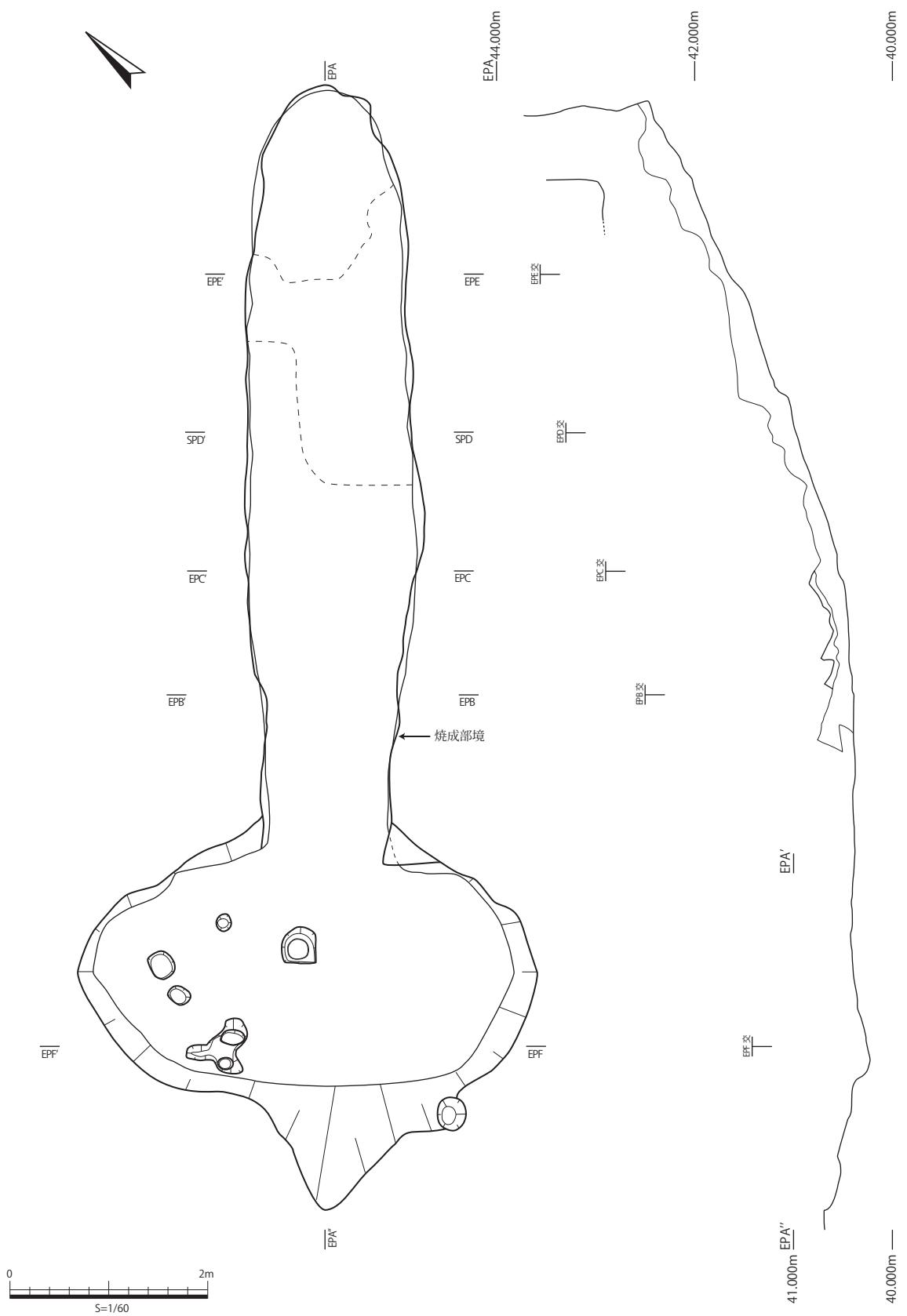
a : 775cm	b : 760cm	c : 805cm	d : 658cm	e : 119cm	f : 168cm
g : 128cm	h : 128cm	i : 78cm	j : 65cm	k : 395cm	l : 123cm
m : 95cm	n : 25度	o : 0度	p : 11.20m ²	q : 9.68m ²	r : 1.54m ²

a. 焚口・燃焼部

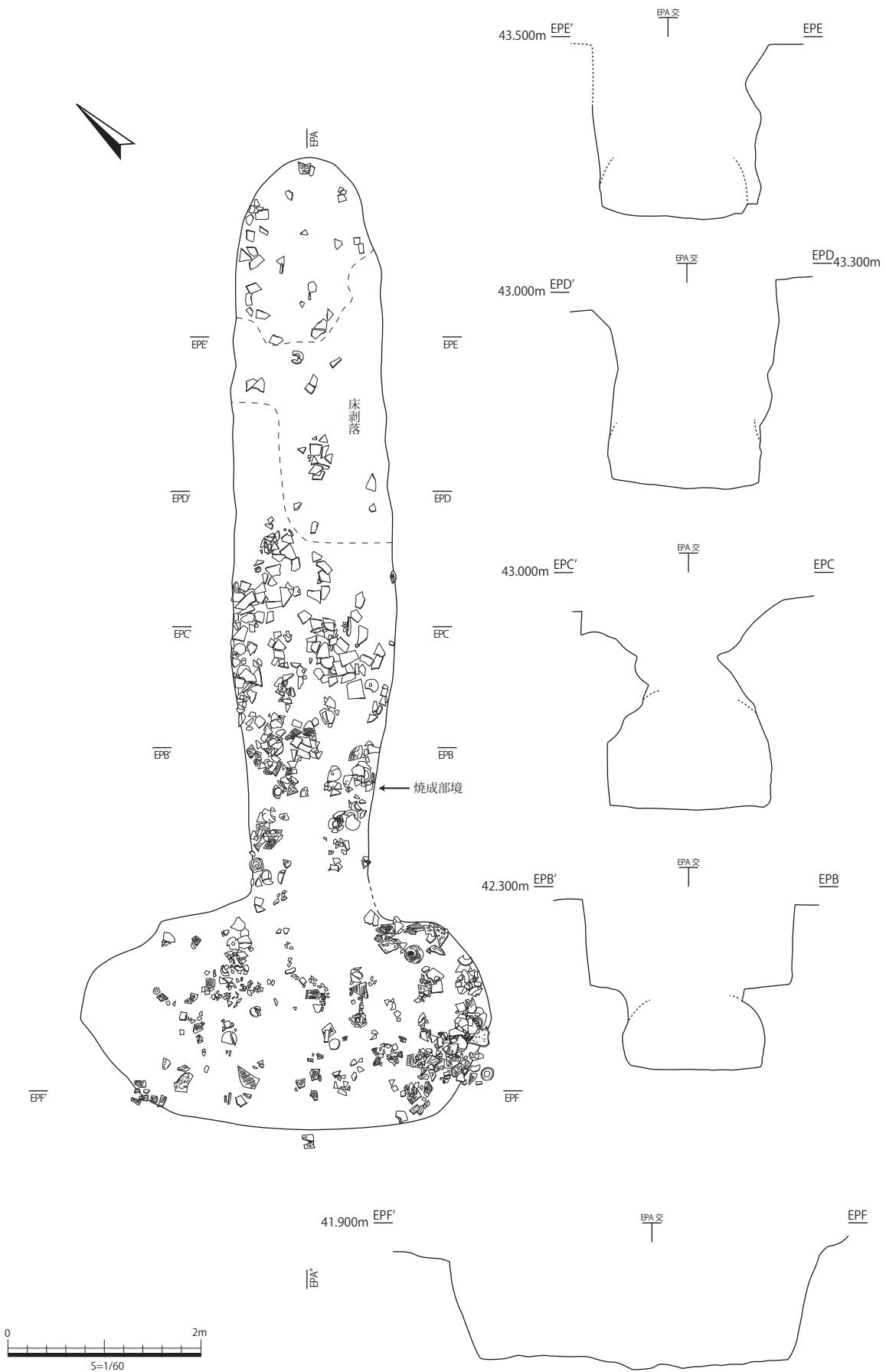
焚口に連続して前庭部土坑が掘り込まれており、前庭部土坑から焚口、燃焼部へとほぼ平坦な傾斜となっている。燃焼部壁は僅かに内傾するが、壁の立ち上がり方から見て、焚口から焼成部境までは掘り抜きではなく、上部からの掘削で、仮設的な天井が架けられる構造であったと推察する。焚口幅は128cm、焼成部境幅は128cmと、燃焼部における幅の伸縮はなく、焚口から焼成部境までの距離は120cmを測る。燃焼部床は還元焼結しておらず、黒褐色を呈し、部分的に酸化被熱面が露出する。壁は灰白色か灰褐色で、被熱は弱い。焼成部境の床は地山のままで、舟底状ピットは認められない。

b. 焼成部

焼成部境から奥壁まで、地下深く掘り抜く構造を呈す。天井が遺存する箇所はなかったが、側壁の残りは良く、遺存壁の曲線を延長すると、焼成部境付近で85cm、焼成部下位の最大幅を測る付近では125cm程度の窯体高をもっていたものと推察する。焼成部は全体的に窯幅の伸縮少なく、すん胴形で焼成部上位へと伸び、奥壁から手前100cm付近で丸く砲弾型の平面形を呈す。最大幅は焼成部境から奥へ178cmの位置で168cmを測る。焼成部床面傾斜は、焼成部境から徐々に傾斜を増し、20度程度から焼成部上位では29度に推移する。



第46図 1号窯跡 窯体平面と縦断面図 (S=1/60)



第47図 1号窯跡 窯体内遺物図と横断面図 (S=1/60)

床面と側壁は、灰色または灰白色を呈する地山焼結したものです、貼床、貼壁は認められず、全体的に焼結は弱い。特に、焼成部上位では燃焼部同様の黒褐色床を呈する部分があり、赤色被熱面が露出する部分もある。焼成温度があまり上がらず、焼成回数も少なかったのであろう。窯体埋土層は、大半が地山陥没土層だが、床面近くでは窯壁塊まじりの崩落土層が確認でき、床面には焼成部下半から燃焼部、前庭部へと定量の須恵器が遺存していた。置台として転用されたと思われる壺蓋や須恵器大甕が一部存在するが、生焼け焼成品や赤く焼結したもの、歪みの強い須恵器もあり、最終操業での窯内遺存品が大半を占めると考えられる。

c. 排煙施設

直立する煙道が遺存していたが、十分な調査がなされていない。煙道手前の遺存する天井高では95cmを測るが、奥壁へ向かい床面が傾斜を増すことと、奥壁が内傾して立つため、奥壁へ向かって天井高を絞り込む形態であったと言える。窯体天井に径65cm程度の太い直立の煙道が付くもので、煙道はそのままの径で排煙口へ至ったものと予想する。図化はできていないが、復元での煙道高は95cm。壁での煙道を含めた高さでは160cmであったと推察する。

(2) 前庭部と灰原の形成

窯体焚口に連続する形で、前庭部土坑が掘られている。燃焼部床面からそのままフラットに前庭部土坑に移行し、手前に緩く立ち上がる。幅465cm、奥行き250cmの楕円形で、部分的にピットがあるが、窯に伴うものとは思えない。

前庭部の遺物出土は、窯体内に遺存する須恵器包含層に続くように出土しており、甕や横瓶などの破片が目立つ。土坑底面から若干浮いて出土するが、窯体内の遺物出土と同様であり、窯の廃絶後に最終操業に伴う不用品が廃棄されたものと言えるだろう。灰層は窯体内同様に目立たず、出土須恵器量も含めて、数少ない操業回数であったのだろう。灰原の形成も確認できず、操業廃棄品は前庭部土坑内にほぼとどまるようである。

3. 出土した遺物

(1) 出土遺物の概要と器種構成、胎土特徴

河田山1号窯跡で出土する古代の遺物は、1号窯跡関連の遺物である。古墳時代中期の前方後円墳、河田山60号墳の後円部からくびれ部にかけて掘り込まれた窯跡であり、遺物出土は窯体内床面と前庭部にほぼ限られる。明確な灰原は確認できず、出土遺物量も少ない。出土遺物は全て須恵器に限られ、須恵器食膳具を中心に、瓶類、横瓶、大甕が出土する。また、この時期特有の出土遺物として、大甕の口頸部接合の際の胴部上端を切り落とした際の代用ツクと呼称される窯道具再利用品も定量出土する。

須恵器はその被熱状態から、淡褐色の生焼け品のA類と、焼成良好だが暗褐色（セピア色）を呈するB類、青灰色か灰色にしっかりと焼き上げられたC類とに分けられる。A類は最終操業に伴う焼成不良品。B類は最終操業時製品だが、その中でも焼成良好となったもので、還元冷却が不十分で赤く変色したものと思われる。一定量の壺蓋・身があり、窯詰め位置に関連しよう。C類は過去焼成品を置台転用したものが多いため、須恵器甕や横瓶などは製品も還元焼結品となっている。これらについては、大きな歪みを有した完形品の横瓶もあり、転用置台とは考えられない。火前などの焼成部下位などは還元焼成ができていたことになる。

このような窯体内須恵器の出土状況、焼成具合は、この時期の須恵器窯跡に多く見られる現象で、筆者が調査、整理した資料の中では、南加賀窯跡群の那谷桃の木山1号窯跡と戸津28号窯跡でセピ

ア色の焼結品が、同窯跡群二ツ梨東山2号窯跡と能美窯跡群の来丸サクラマチ3号窯跡では淡褐色の生焼け廃棄品が定量確認された。他の時期に目立つものではないため、当期を特徴付ける資料の可能性がある。古代II3期は、南加賀窯跡群で須恵器生産が分散拡大した時期であり、新たな窯場での不安定な生産状況を示すものかもしれない。

当窯須恵器の胎土特徴については、能美窯跡群ということで、全体的には細かな砂粒の混入が少ない粘土質の胎土ということになるが、その中では粘土素地がやや粗目でシルト質の質感をもち、能美窯跡群の胎土によく混在している白色のくず石が大小さまざまに多く混在することを特徴とする。

出土須恵器は、窯体床面近くに遺存する須恵器とそこから続く前庭部土坑の須恵器にはほぼ限られる。総量として少ないため、数量計測による器種構成把握は行っていないが、全体的な傾向として、食膳具は有蓋の有台坏である坏Bにはほぼ限られ、特に蓋が目立つ。無蓋無台坏である坏Aは極めて少なく、それが当期の特徴とも言える。貯蔵具は、肩張り長頸瓶の瓶Aと平瓶が確認されるが、横瓶と大甕の出土が目立つ。特に、大甕が多く、床面での置台転用された甕胴部破片が一定量を占める。なお、以下で述べる器種名称については、食膳具は田嶋明人氏の器種分類（田嶋 1988）、貯蔵具は北野博司氏の器種分類（北野 1999）に基づいているので、参照されたい。

(2) 各器種の検討

a. 食膳具

食膳具は全てロクロ成形品で、切り離しが全て回転ヘラ切りによるものである。ロクロの回転方向は確認できたものについては、全て右回転で、観察表で特に示さないものは、底面回転ヘラ切りのままか、ヘラ切り痕をナデ消す程度の調整である。

《坏B》 有蓋の有台坏である。蓋と身とあり、蓋の出土量が多い。蓋・身とともに、1つの法量にまとまる所謂「一器種一法量」の様相であり、口径は蓋で14.5～16.5cm、身で13.5～15.5cmにまとまる。

蓋（1～20）は、つまみ径3cm台を測るおおぶりの扁平つまみが主流。全て天井部を広く回転ヘラ削りする。基本的に蓋身を正位で重ね、蓋外面全体に降灰が認められるIa類の痕跡で、例外的に3のみが交互に重ねて積むIb類の痕跡、8が蓋を逆位に重ねて焼くII類痕跡を持つ。

身（21～31）は、径高指数が33前後の深身で体部外傾するタイプが主体で、腰が張って体部立気味の23・30、径高指数29前後を測る浅身27・29は少数派である。大半が体部下位から底面にかけて回転ヘラ削りを施し、踏ん張る高台が付されている。

《坏A》 図示した1個体（32）のみが確認されており、当器種が極めて少ないと、この時期の特徴である。口径14.2cmを測る体部外傾のやや椀形状を呈すもので、底面ヘラ切のままである。

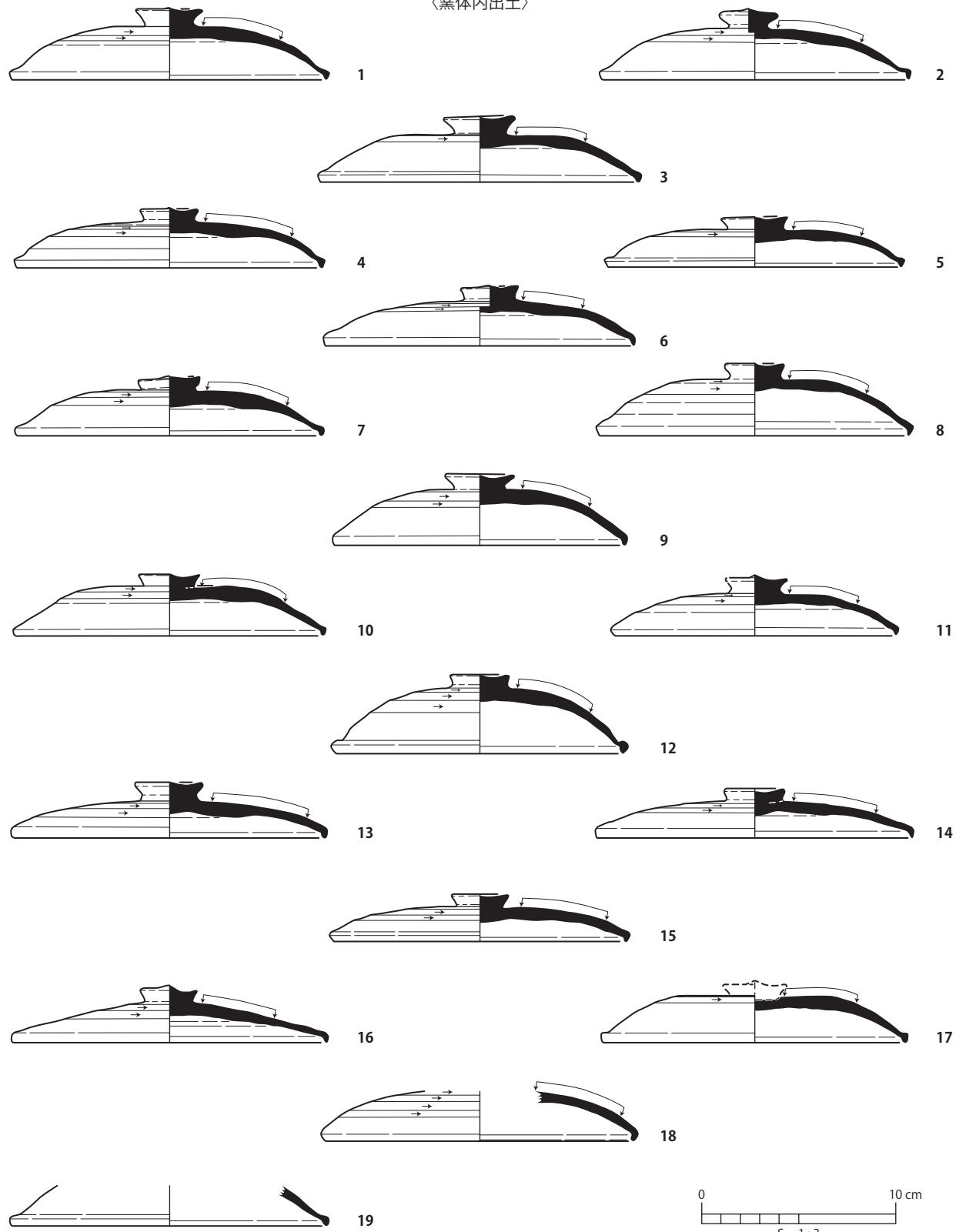
b. 貯蔵具

貯蔵具は、長頸瓶と平瓶、横瓶、大甕が出土する。大半が横瓶や大甕の胴部破片であり、当窯の生産品というよりも、置台として持ち込まれた可能性のあるものも含んでいると予想する。

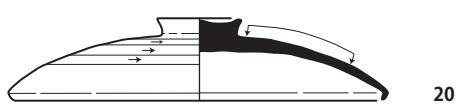
《長頸瓶》 いずれも肩が算盤形に張る瓶A（33～39）である。胴部上端を円盤閉塞し、胴部を算盤形に変形させる風船技法のものである。風船にした後、胴上部中央を円形切り落として、別作りの細長い口頸部を接合させるものである。口頸部は、頸部を細く絞り、上へと伸ばした際の絞り痕が明瞭につき、口縁部は外反して端部をそのまま薄く引き伸ばした器形を呈す。高台は「ハ」の字に強く開く脚状の形態であるが、34の脚は他の器種かもしれない。ほぼ完形の35は、正位に立った状態での焼成痕跡を持ち、火前は降灰するのに対し、火後ろは焼き弾けが見られる。

《平瓶》 瓶A同様に、円盤閉塞した後に算盤形胴部へと変形させる風船技法によるもので、胴上部

坏B蓋
〈窯体内出土〉



〈前庭部出土〉



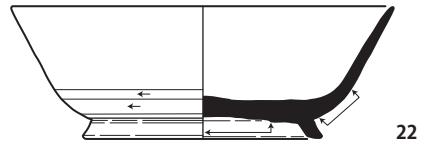
* ↗ はヘラケズリ範囲
→ は砂粒方向を示す

第48図 1号窯跡出土遺物 1 (S=1/3)

环 B 身
〈窯体内出土〉



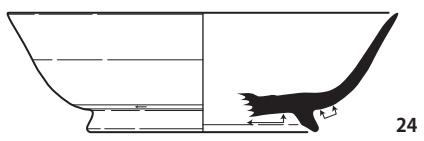
21



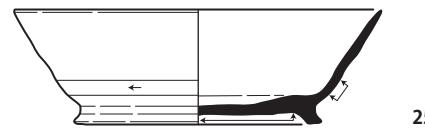
22



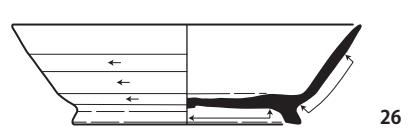
23



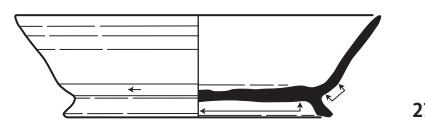
24



25



26

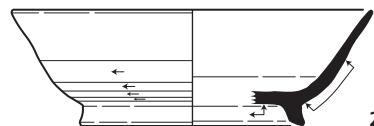


27

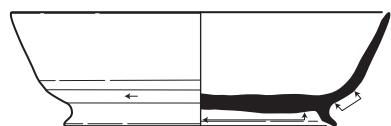


28

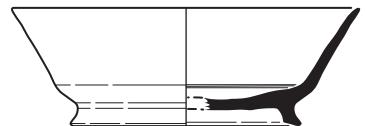
〈前庭部出土〉



29



30



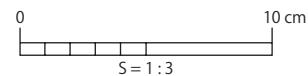
31



环 A
〈窯体内出土〉



32

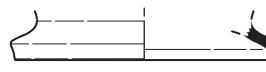


第 49 図 1 号窯跡出土遺物 2 (S=1/3)

長頸瓶
〈窯体内出土〉

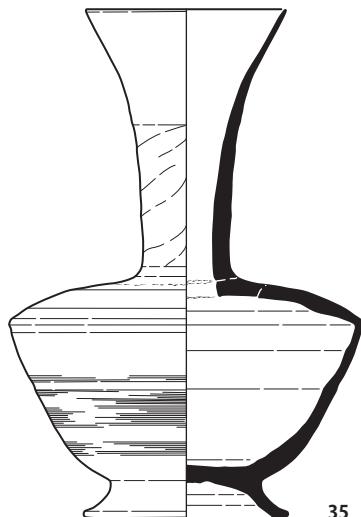


33

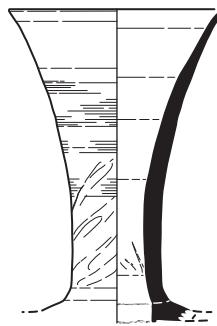


34

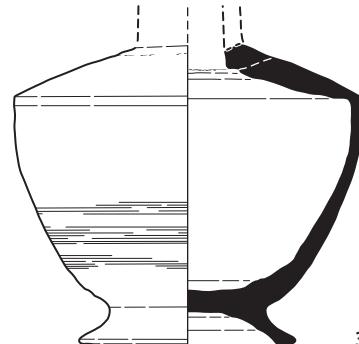
〈前庭部出土〉



35



36



37

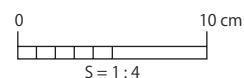
〈窯跡外出土〉



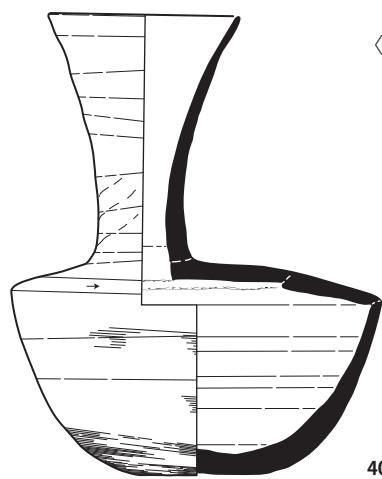
38



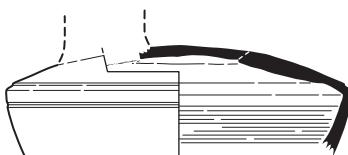
39



平瓶
〈前庭部出土〉



40



41

第 50 図 1 号窯跡出土遺物 3 (S=1/4)

の中心から片側にずらして円形切り落としを行い、別作りの口頸部を接合するものである。40 のほぼ完形品は、瓶 A に類似した算盤玉形の胴部に、細長い口頸部が偏って取り付けられたもので、底部に台脚を付さない平底器形のものである。飛鳥時代の平瓶は、提瓶器形に短い口頸部が付く把手を付さないタイプだが、7世紀末になると、頸部は太く開く口頸部を付すものが主流となる。瓶 A 同様の長頸タイプを付すのは珍しく、代用形態と言える。なお、40 の底面には成形時に付いた成形台の敷物痕跡が残る。もう一点図化した 41 は胴部上位に沈線を 2 条施すもので、広く口頸部が付くものと予想する。

《横瓶》 胴幅（俵型胴部の長さ）が 35～40cm を測る通常タイプと胴幅が 25cm 程度の小型タイプとがある。通常タイプ（42・43・45～49）は、円筒状に粘土紐積み上げ叩き成形し、胴部上端を横ナデしてから円盤閉塞。その後、ひっくり返して、底部側を叩き絞りした後に円盤閉塞したもので、両サイドともに外面カキ目調整で平滑に仕上げている。図化の際には、右側を底部側、左側を胴部上位側として示した。底部側は粘土が沈み込むため、厚手になり、胴部上位側は薄くなる。当横瓶の成形は、両面閉塞技法と呼ぶが、当窯の横瓶は全てこの技法によるものだろう。両面閉塞技法横瓶の出現については、能美窯跡群では、7世紀末の湯屋 A I 支群 2 号窯で、越前王子保窯跡群でも同時期の事例が確認されており、7世紀後葉段階で出現してきた技法と言える。能美窯跡群では、これ以降も両面閉塞技法が主体的に存続しており、9世紀前半の和氣白石窯でも確認される。なお、口頸部は短く外反する器形で、口縁部内端が肥厚し上端に面を持つ 42・46・49 と薄く引き伸ばす 43・45・47・48 とがある。小型タイプ（44）については、底部側のみのものだが、叩き絞りを行っている点から当タイプも両面閉塞技法による可能性が高い。

横瓶の叩き具について、全て、外面は木目が直行する平行線文 (Ha 類) 叩き、内面が木目の確認されない同心円文 (Da 類) 当て具の痕跡を持つ。

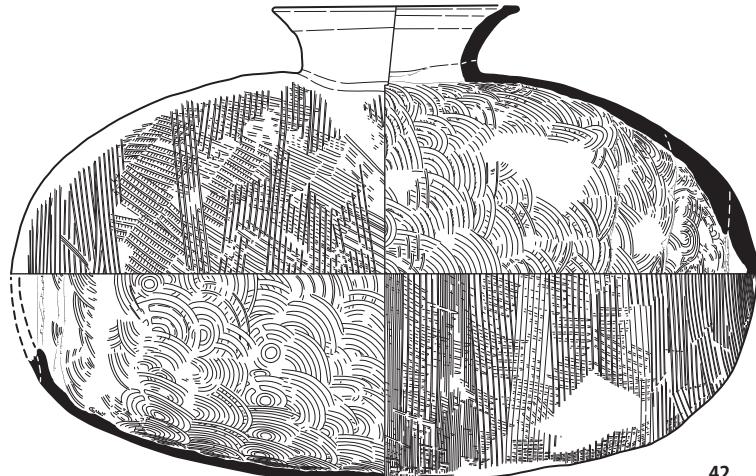
横瓶の窯詰めは、設置の安定性や効率的な製品の窯詰めを考慮して、胴部を立てて焼成することが多い。口頸部が火前を向くように配置することで、内側の焼成が円滑となり、ゆがみ防止にもつながる。胴側部にはその際の置台の痕跡が残り、42 は胴上側に、45 と 46 は底部側に、窯床との設置を避けるため、斜面下方で 2 点、斜面上方で 1 点の何かをかました痕跡がある。

《大甕》 須恵器甕は、大甕か特大甕に限られる。頸部径が 30cm から 40cm 弱、胴部径 70cm 前後を測るものを大甕（53・54・56・57）、頸部径が 40cm 以上測るものを持たない特大甕（50～52・55）とする。

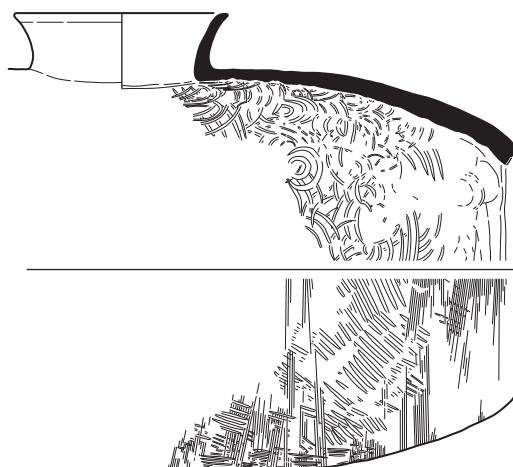
特大甕は胴部片と口頸部片で、全体を伺う資料がない。口頸部破片は、胴部上端切り落とし面整形した後に、口頸部を積み上げ成形した痕跡をもつ。口縁部外面は端部を長く伸ばし、その手前に 1 段の稜を形成するもので、その下に櫛描き波状文を施す。55 の胴部破片は、胴部径 88.3cm を測るもので、外面 Ha 叩き成形、内面 Da 当て具痕跡を残すものである。特大甕成形の場合、最終段階での底部丸底化への叩き出し成形工程は、胴部の大きさ故に不可能であり、どの段階かで、底部丸底化工程が必要となってくる。55 では、胴部下位の当て具痕跡の切り合い関係から、丸底の鉢状器形のものを成形した後に、その鉢状底部の上端を一度ナデて平滑とし、乾燥後、順に胴部粘土紐積み上げ、叩き成形していく過程が看取できており、特大甕の成形方法を知る貴重な資料と言える。

大甕は、53 の全体を伺う資料がある。口径 39.1cm、胴部径 67.1cm、器高 71.8cm を測るもので、胴部粘土紐積み上げ、横軸叩き成形で順次上へと積み上げ成形した後、底部を叩き出し成形で丸底化したものである。胴部成形時の叩き成形は、外面 Ha 類叩き具、内面 Da 類当て具で、底部叩き出しは、外面は木目の見られない平行線文 (He 類) 叩き具、内面は Da 類当て具というように、成形道具を変えている。大型容器の底部叩き出し成形工程には、胴部成形工程の違いから、道具を変えることが一

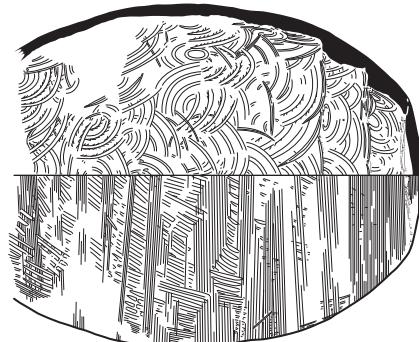
横瓶
〈窯体内出土〉



42



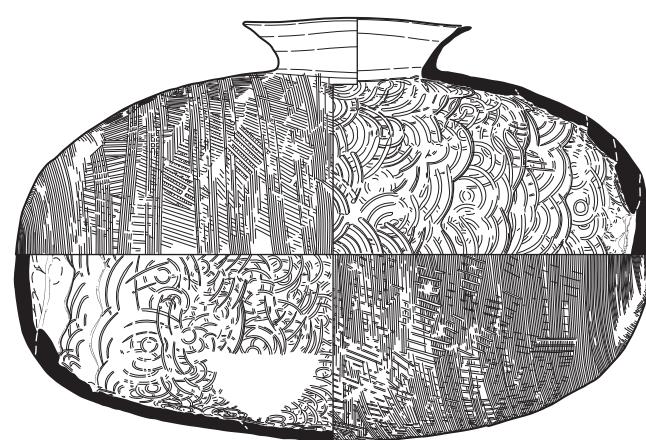
43



44

0 10 cm
S = 1 : 4

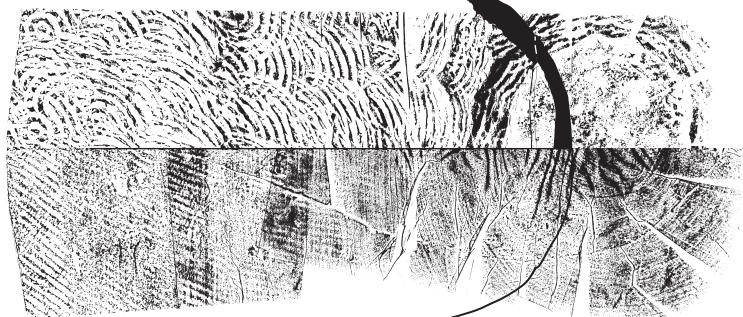
〈前庭部出土〉



45

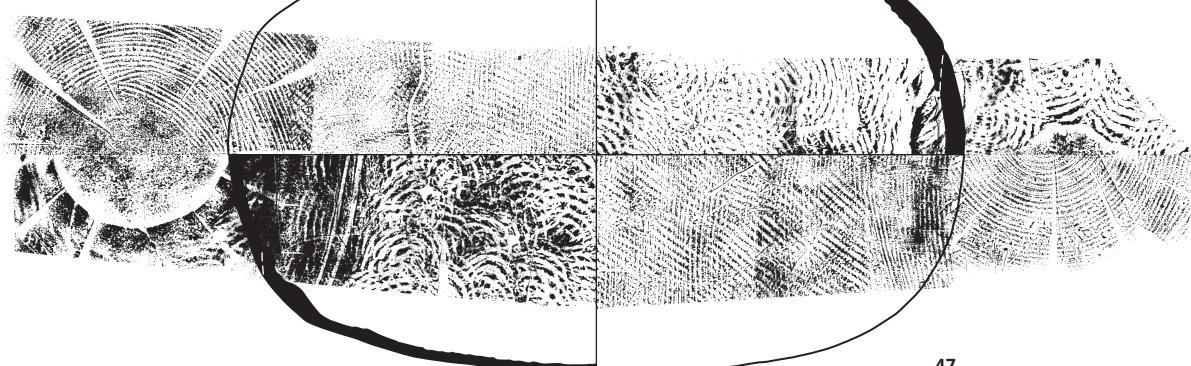
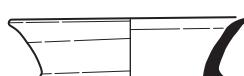
第 51 図 1 号窯跡出土遺物 4 (S=1/4)

〈前庭部出土〉

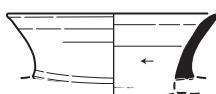


46

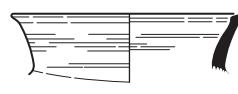
〈窯跡外出土〉



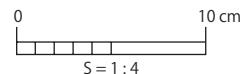
47



48



49



特大甕

〈窯体内出土〉

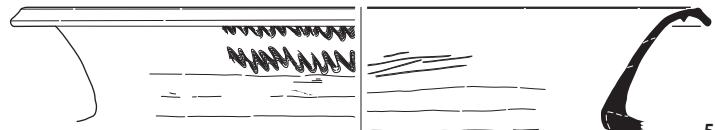


50

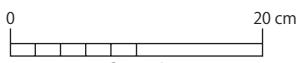
〈窯跡外出土〉



51

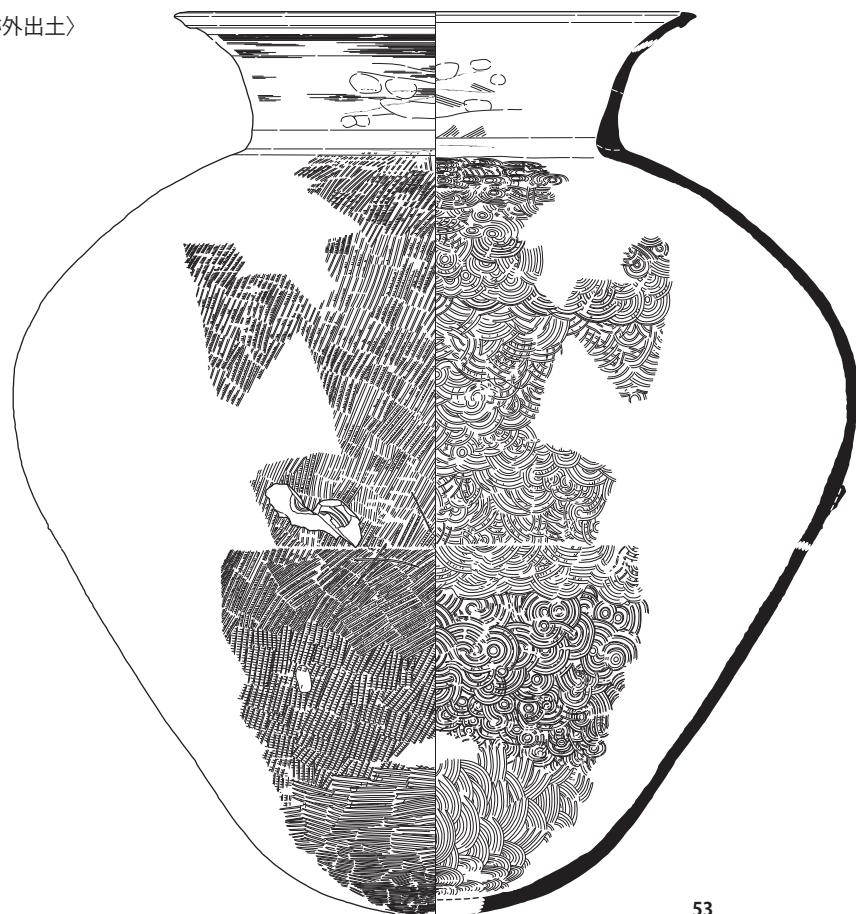


52

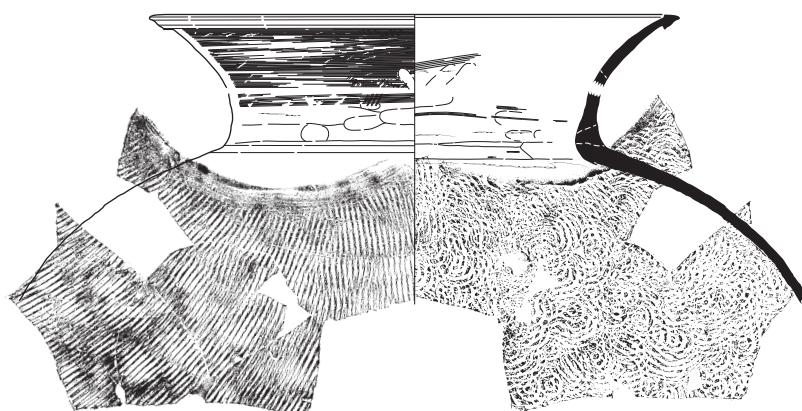


第 52 図 1 号窯跡出土遺物 5 (46 ~ 49 : S=1/4、50 ~ 52 : S=1/6)

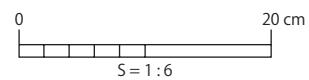
大甕
〈窯跡出土〉



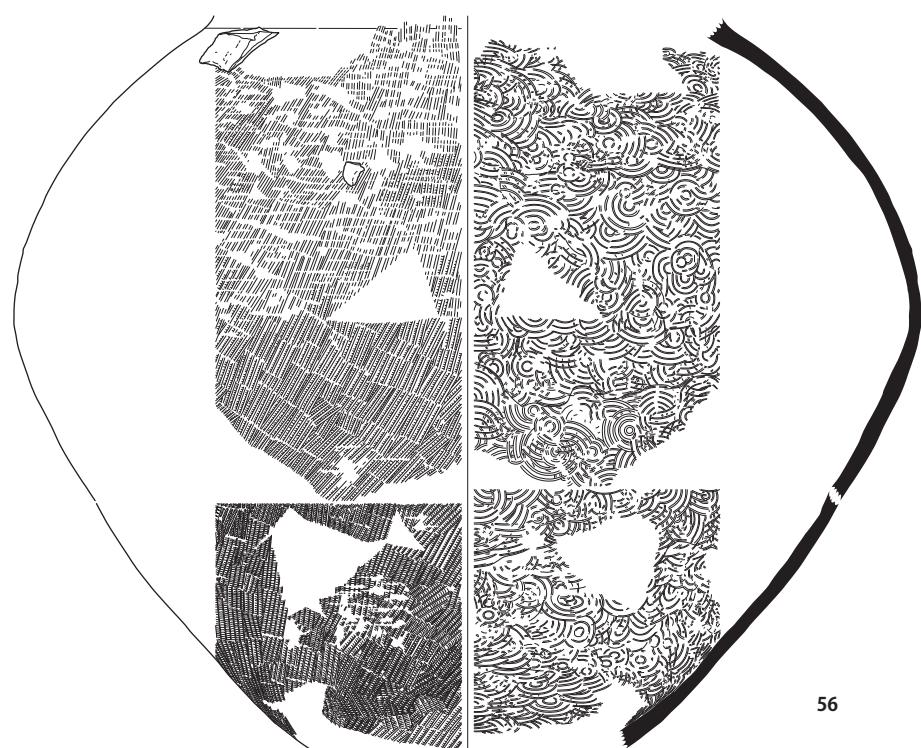
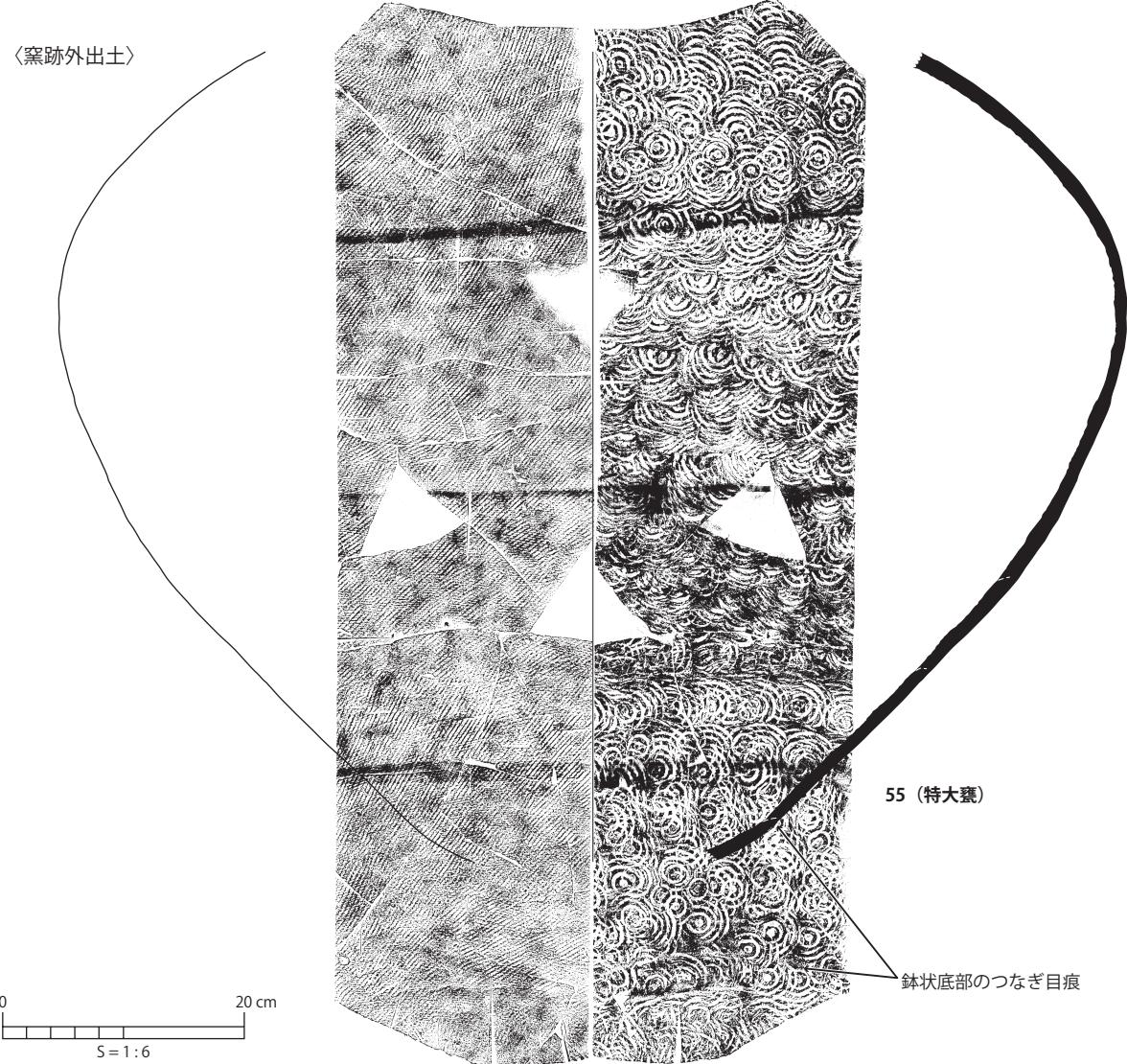
53



54



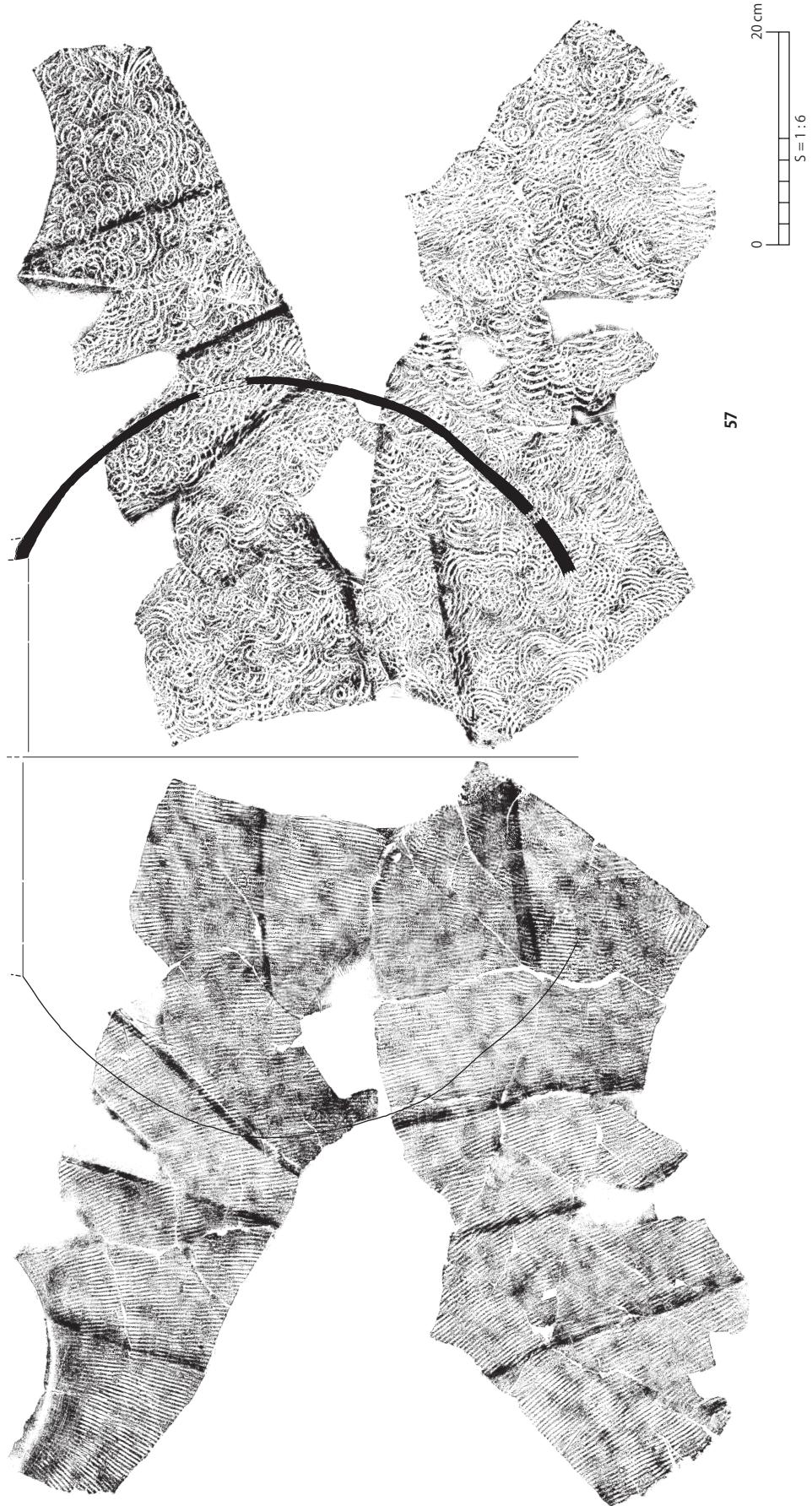
第 53 図 1 号窯跡出土遺物 6 (S=1/6)



第 54 図 1 号窯跡出土遺物 7 (S=1/6)

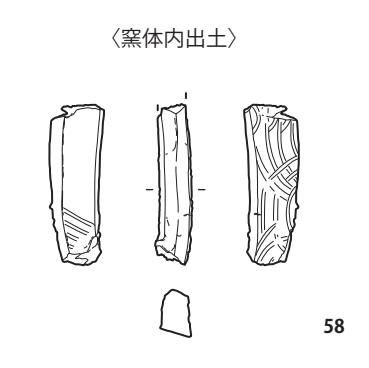
第55図 1号窯跡出土遺物8 (S=1/6)

〈窯跡外出土〉

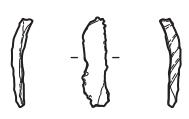
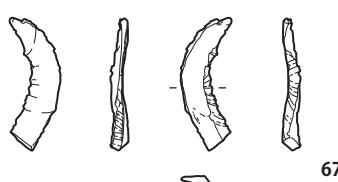
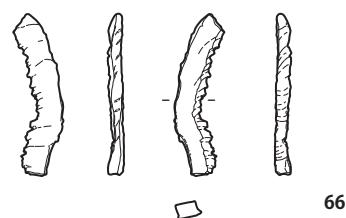
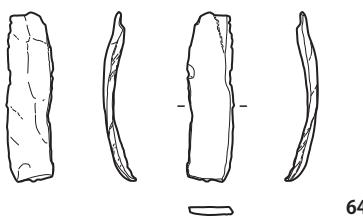
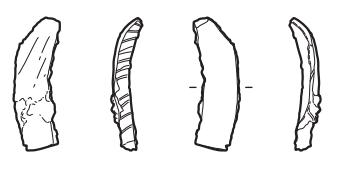
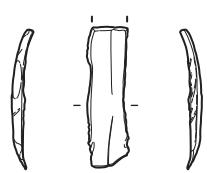
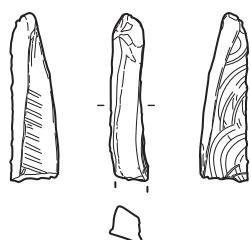
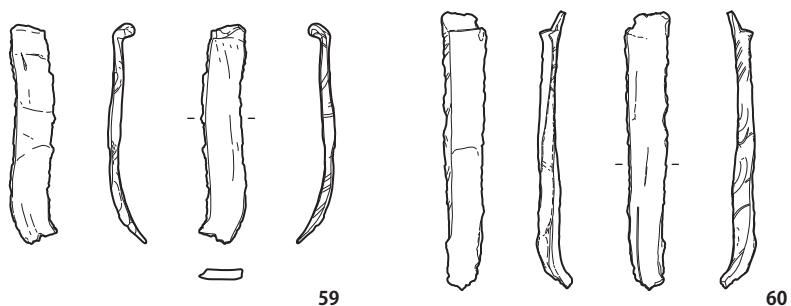


窯道具

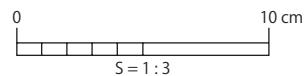
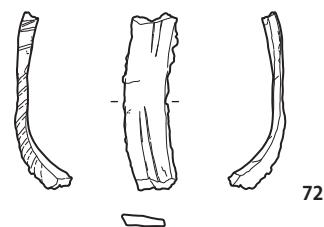
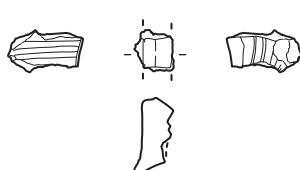
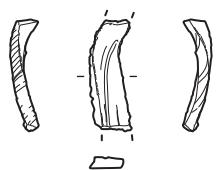
〈窯体内出土〉



〈前庭部出土〉



〈窯跡外出土〉



第 56 図 1 号窯跡出土遺物 9 (S=1/3)

般的で、長い柄の専用道具が使われる事例もある。口頸部成形においては、胴部上端を切り落とし成形し、その上に口頸部が作り出されている。別作り成形した口頸部を頸部で繋ぐ技法と思われ、口縁部端には内外突出する稜が見られる。口頸部装飾はなく、カキ目調整が見られる程度で、54 の口頸部も同様の技法による成形痕跡で、頸部繋ぎ粘土痕跡が確認できる。56・57 は、胴部径がそれぞれ 71.9cm、71.4cm を測るもので、外面は Ha 類叩き、内面は Da 類当て具痕跡が残る。いずれも底部叩き出しの痕跡は確認されず、この下位に底部叩き出し痕跡が残るのであろう。

c. 窯道具

片側の外面側に Ha 類叩き具痕跡、片側の内面側に Da 類当て具痕跡を残すもので、厚さ 5 ~ 8mm の大甕と思われる胴部片を薄く切り取った切り屑片である (58 ~ 72)。

58 と 61 は、片側に胴部成形時の端面を残し、厚さ 5mm 程度を測るため、胴部上端の切り落とし整形の際に排出された切り屑と思われるが、それ以外は、厚さ 3mm 程度で、両面に切り取った痕跡の残るものである。後者は甕の胴部成形時の切れ端や成形失敗品を意図的に薄く切り取った可能性があり、窯詰め製品固定において、咬ませ材として使いやすいうように薄くした可能性がある。なお、いずれも青灰色や暗褐色に堅緻に焼成されており、焼成部下位での製品固定のための道具であったろう。

当窯跡焼成部下位で一定量出土する須恵器甕胴部片も、比較的堅緻に焼けているため、これら切り屑同様に、甕成形時失敗品を、須恵器窯内で生の状態で、窯道具として一緒に焼成した可能性が高いだろう。

このような成形切り屑片が出土する事例として尾張猿投窯で確認例があり、代用トチと呼ばれている。トチ同様に咬ませ材として廃棄品を使ったものと理解される。

4. 河田山 1 号窯跡の総括

(1) 須恵器窯構造の特徴

河田山 1 号窯跡は、後述するように、出土須恵器の特徴から、田嶋古代土器編年Ⅱ 3 期古段階、8 世紀初頭に位置づけられる。地下掘り抜き式の窯構造をもち、直立煙道緩傾斜窯構造を呈す。7m 台の中規模サイズの窯体をもち、比較的大口の直立煙道窯であること、ずん胴形の平面プラン、燃焼部長が短いことなど、当期の典型的な窯構造の特徴を有している(望月 2010b)。床や壁の修復はなく、床、壁の焼け具合の弱さ、灰原形成がほとんどないことから見て、数少ない焼成回数であったものと理解する。このタイプの窯構造によくみられる焼成部境の舟底状ピットが、当窯では確認できないことも、焼成回数の少なさに関連しているのかもしれない。

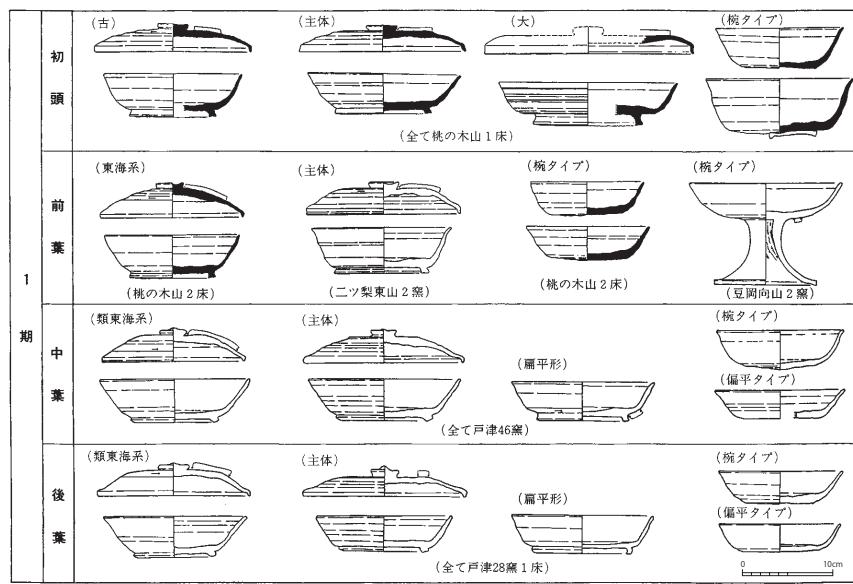
また、当窯の特徴として、床面に遺存する多くの赤く焼結した須恵器坏 B 蓋身や甕胴部破片があげられる。還元冷却が不十分であったものだが、焼成部置台として生のまま使用されたものが定量存在している可能性がある。胴部上端切り屑を代用トチとして使うことも特徴の一つであり、前者の転用置台の事例は、南加賀窯跡群ではⅡ 3 期古段階の桃の木山 1 号窯跡や二ツ梨東山 2 号窯跡などで確認でき、この時期特有の置台利用、窯詰め方法であった可能性がある。後者の代用トチは、南加賀窯跡群では 7 世紀前半の林タカヤマ支群窯で僅かに確認されるものの、一般的なものとは言えないのに対し、能美窯跡群では、7 世紀後葉の湯屋 B Ⅲ 支群窯をはじめ、7 世紀末の湯屋 A I 支群窯でも確認されており、同じ窯跡群で後続する当窯資料の位置づけを考えれば、須恵器製作工程で排出された素地状態の不要片を窯道具として利用する考え方が、能美窯跡群では須恵器工房を共有する工人たちの中で定着していた可能性がある。南加賀窯跡群では見られない窯道具利用であり、能美窯跡群の技術的な系譜を物語る資料となりえる。

(2) 出土須恵器資料の編年的検討

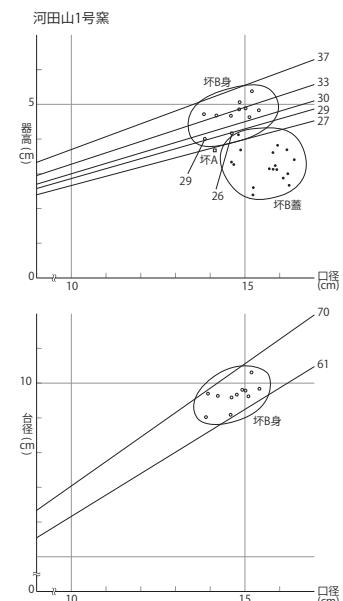
河田山1号窯跡出土の須恵器資料は、全てこの窯で焼成されたものとは限らないが、須恵器様相としては短時期資料としてのまとめがある。編年的位置づけとしては、この項の冒頭でも述べたが、須恵器食膳具が環Bと環Aに限られ、環Bが圧倒的多数を占めること。環Bが一器種一法量の特徴を有し、蓋が全て扁平つまみを付す口縁端部折り曲げのものに限られるなどの点から、田嶋明人氏の古代土器編年（田嶋 1988）のII 3期に位置づけられる。環B身は扁平器形が少量存在するが、主体は体部外傾の椀形を呈し、高台長めに踏ん張る点、環Aが極めて少量であることなど、II 3期の中でも古相に位置づけられる。望月がII 3期を4細分した南加賀窯跡群8世紀前葉編年案の1期前葉（望月 1994）とした桃の木山1号窯2次床や二ツ梨東山2号窯に対比でき、能美窯跡群では来丸サクラマチ3号窯跡の資料と併行しよう。ただ、環B身において底面削り調整を基本とすることについては、II 2期の特徴であり、II 3期資料では一般的には見られないものである。

また、瓶類においても、肩張り長頸瓶の瓶Aであるが、その中でも胴部高が高い算盤形を呈し、台が台脚状を呈すなど、II 2期に近い古手の様相を持つ。平瓶器形も特徴的で、これもII 2的な様相と言えるものかもしれない。両面閉塞技法の横瓶を主体的に生産することも特徴的である。能美窯跡群ではII 2期以降確認されており、当期には定着の様相を示すのだろう。

以上、当窯資料は、II 3期の調査例が少ない能美窯跡群にあって、良好な資料と言える。ただ、冒頭でも述べたように、窯跡を前提とした調査でなかったため、良好な状態での調査ができなかったことや調査から30年以上も経過してしまっていること、出土量が限られ、器種割合やなど数値化できなかったことなど、十分な資料提示ができなかったことは大変残念である。



第57図 南加賀窯跡群須恵器編年II 3期細分案（望月 1994）



第58図 須恵器法量分布図

【河田山1号窯跡出土須恵器観察表】

番号	実測	器種	出土地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	残存	特記
1	16	环B蓋	1 窯焼成部	D-1・2+E-1	□ 16.2、高 3.7、鉢径 3.5、鉢高 1.0	製品	赤良焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石多	1/2	天ケズリ
2	17	环B蓋	1 窯焼成部	G-1・2+H-2	□ 15.8、高 3.6、鉢径 3.1、鉢高 1.0	製品	生焼	淡黄褐	白け ^{アカ} 石多	略完	天ケズリ / 重焼 I a類
3	7	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1+G-1	□ 16.4、高 3.4、鉢径 3.8、鉢高 0.9	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	4/5	天ケズリ / 重焼 I a類
4	6	环B蓋	1 窯焼成下位	E-2+F-2	□ 15.8、高 3.1、鉢径 3.0、鉢高 0.6	製品	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	6/7	天ケズリ / 重焼 I a類
5	11	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1・2	□ 15.2、高 2.6、鉢径 3.4、鉢高 0.6	置台	堅緻	暗灰	白け ^{アカ} 石入	5/6	天ケズリ / 重焼 I a類
6	21	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1・2	□ 15.9、高 3.1、鉢径 3.0、鉢高 0.6	製品	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	略完	天ケズリ / 重焼 I b類
7	8	环B蓋	1 窯焼成下位 ～燃焼部	E-1+I-2	□ 15.7、高 3.1、鉢径 3.2、鉢高 0.7	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	3/4	天ケズリ / 重焼 I a類
8	13	环B蓋	1 窯焼成下位 ～燃焼部	F-1・2+G-1	□ 15.9、高 3.8、鉢径 3.1、鉢高 0.8	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	7/8	天ケズリ / 重焼 II類
9	5	环B蓋	1 窯焼成下位 ～前庭部	F-1・2+I-3	□ 14.9、高 3.7、鉢径 3.6、鉢高 0.8	製品	赤良焼	淡橙褐	大け ^{アカ} 石入	5/6	天ケズリ / 重焼 I a類
10	2	环B蓋	1 窯燃焼部	G-2+H-2	□ 15.9、高 3.2、鉢径 3.2、鉢高 0.7	製品	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	略完	天ケズリ / 重焼 I a類 / 歪み
11	1	环B蓋	1 窯燃焼部 ～前庭部	G-2+H-1・2+I-2	□ 14.6、高 3.2、鉢径 3.2、鉢高 1.6	製品	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石多	完形	天ケズリ / 歪み
12	14	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1	□ 14.8、高 4.1、鉢径 3.1、鉢高 0.7	製品	良焼	暗橙褐	大け ^{アカ} 石入	7/8	天ケズリ / 重焼 I a類 / 歪み
13	10	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1	□ 16.1、高 2.9、鉢径 3.5、鉢高 1.0	製品	赤良焼	淡橙褐	大け ^{アカ} 石入	完形	天ケズリ / 重焼 I a類 / 歪み
14	12	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1	□ 16.3、高 2.6、鉢径 3.2、鉢高 0.6	置台	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	1/3	天ケズリ / 重焼 I a類 / 窯土
15	9	环B蓋	1 窯焼成下位	E-1+F-1・2	□ 15.2、高 2.4、鉢径 3.0、鉢高 0.6	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石少	略完	天ケズリ / 重焼 I a類 / 歪み
16	4	环B蓋	1 窯焼成下位 ～燃焼部	E-1+F-1	□ 16.2、高 3.0、鉢径 3.0、鉢高 0.9	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	3/4	天ケズリ / 重焼 I a類
17	3	环B蓋	1 窯焼成下位 ～燃焼部	F-1+G-2	□ 15.6、残高 2.4	置台	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	4/5	天ケズリ / 重焼 I a類
18	19	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1・2	□ 15.9、残高 2.6	製品	生焼	淡黄褐	白け ^{アカ} 石入	1/6	天ケズリ / 重焼 I a類
19	18	环B蓋	1 窯焼成下位	F-1	□ 16.2、残高 2.1	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	1/10	天ケズリ / 重焼 I a類
20	15	环B蓋	1 窯前庭部	I-1・2+J-1	□ 14.6、高 3.3、鉢径 3.4、鉢高 0.7	置台	堅緻	暗灰	白け ^{アカ} 石入	3/4	天ケズリ / 重焼 I a類
21	22	环B身	1 窯焼成部	G-1+E-1	□ 14.9、高 5.0、台 9.8、	製品	赤良焼	灰褐	大け ^{アカ} 石入	完形	底ケズリ
22	27	环B身	1 窯焼成下位 ～燃焼部	E-2+F-2+I-3	□ 15.2、高 5.3、台 9.5	製品	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	7/8	底ケズリ / 歪み
23	28	环B身	1 窯焼成下位	F-1+G-2	□ 15.0、高 4.8、台 10.2	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石少	2/3	底ケズリ
24	31	环B身	1 窯焼成下位	F-1+1号窯	□ 15.4、高 4.8、台 9.1	置台	堅緻	暗灰褐	白け ^{アカ} 石少	1/4	底ケズリ / 内窯土付着
25	25	环B身	1 窯燃焼部	G-1・2	□ 14.6、高 4.6、台 9.8	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	5/6	底ケズリ
26	29	环B身	1 窯焼成下位	F-1+1号窯	□ 13.9、高 4.0、台 9.1	置台	堅緻	暗灰褐	白け ^{アカ} 石少	2/3	底ケズリ / 内降灰
27	26	环B身	1 窯燃焼部 ～前庭部	G-1+I-2・3+J-3・4+表 探	□ 14.6、高 4.1、台 10.5	置台?	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	6/7	底ケズリ / 歪み
28	24	环B身	1 窯燃焼部 ～前庭部	G-2+H-1・2+I-2	□ 14.8、高 4.8、台 9.7	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石多	略完	底ヘラ切ナデ
29	32	环B身	1 窯前庭部	I-4+J-3・4	□ 14.2、高 4.6、台 8.8	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石少	1/2	底ケズリ
30	23	环B身	1 窯前庭部	I-2・3	□ 15.1、高 4.6、台 10.8、	置台?	良焼	暗灰褐	白け ^{アカ} 石少	略完	底ケズリ / 歪み
31	30	环B身	1 窯前庭部	I-1・2	□ 13.9、高 4.7、台 9.0	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石少	2/3	底ケズリ / 底「一」記号
32	33	环A	1 窯焼成上位	C-1	□ 14.1、高 3.6	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石少	1/2	底ヘラ切ナデ
33	53	長頸瓶	1 窯焼成中位	D-1	□ 12.6、残高 6.6	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	口片	
34	52	長頸瓶	1 窯焼成部	E-1	□ 13.6、台高 2.1	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	台片	
35	46	長頸瓶	1 窯前庭部	I-3・4+J-3・4	□ 10.5、頸 4.8、肩 18.8、台 9.4、 高 27.0、頸高 14.1、台高 2.1	製品	堅緻	暗灰	白け ^{アカ} 石多	略完	頸部シボリ痕 / 3段構成 / 正位 火前焼成
36	48	長頸瓶	1 窯前庭部	I-2	□ 11.4、頸 5.6、残高 16.6	製品	堅緻	暗灰褐	大け ^{アカ} 石多	口頸完	頸部シボリ痕
37	44	長頸瓶	1 窯前庭部	I-2	□ 頸 6.0、肩 18.9、台 10.4、残高 16.0	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	2/3	3段構成
38	50	長頸瓶	1 窯外部	表採 38・71	□ 10.2、台高 2.1	製品	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	台片	
39	51	長頸瓶	1 窯外部	表採 8・10・29	□ 10.9、台高 2.1	製品	生焼	淡橙褐	白け ^{アカ} 石入	台片	
40	47	平瓶	1 窯前庭部	H-1+I-1+ 3+J-1・3・4+K-4	□ 10.2、頸 4.7、胴 19.6、 高 24.4、頸高 13.0、胴高 11.4	製品	生焼	淡黄褐	大け ^{アカ} 石入	略完	円盤閉塞 / 口頸部シボリ痕 / 外底面に成形敷物痕
41	49	平瓶	1 窯前庭部	I-4+J-3・4	□ 胴 18.2	製品	堅緻	青灰	白け ^{アカ} 石入	胴片	肩部 2 条沈線
42	57	横瓶	1 窯燃焼部 ～前庭部	G-1・2+H-1+ 1・2・3+J-1・3・4+ K-4+窓外	□ 12.9、頸 9.7、胴幅 39.4、 高 25.2、頸高 4.0、胴高 21.65	製品	堅緻	青灰	白け ^{アカ} 石多	3/4	両面閉塞 / 外 Ha 叩、内 Da 当 て / 歪み
43	45	横瓶	1 窯燃焼部	H-2	□ 11.3、頸 9.8、胴幅 (41.8)、 高 24.3、頸高 3.7、胴高 21.3	製品	生焼	淡黄褐	白け ^{アカ} 石入	1/2	外 Ha 叩、内 Da 当て
44	56	横瓶小	1 窯燃焼部 ～前庭部	G-2+H-2+ I-3・4+窓外	□ 胴 18.2	製品	堅緻	青灰	白け ^{アカ} 石多	1/4	両面閉塞 ?? 外 Ha 叩、内 Da 当て
45	83	横瓶	1 窯前庭部	I-3・4+J-3・4	□ 12.1、頸 8.4、横幅 33.6、 高 22.4、頸高 22.4、胴高 19.8	製品?	堅緻	暗灰	大け ^{アカ} 石入	略完	両面閉塞 / 外 Ha 叩、内 Da 当て / 火前焼成痕 / 歪み
46	82	横瓶	1 窯前庭部	I-2+I-3・4+ J-4	□ 13.0、頸 8.3、高 24.4、頸高 3.4、 胴高 21.05	置台	堅緻	灰色	大け ^{アカ} 石入	3/4	両面閉塞 ?? 外 Ha 叩、内 Da 当て / 窯詰め痕 / 歪み
47	81	横瓶	1 窯燃焼部 ～前庭部	F-2+I-2・4+ J-4	□ 12.7、頸 10.1、胴幅 39、 高 26.2、頸高 3.2、胴高 23.0	製品?	堅緻	淡黄褐	大け ^{アカ} 石入	略完	両面閉塞 / 外 Ha 叩、内 Da 当て / 歪み
48	55	横瓶	1 窯前庭部	I-2・3+窓外	□ 11.3、頸 8.6、頸高 4.5	置台?	堅緻	灰色	大け ^{アカ} 石多	口頸片	
49	54	横瓶	1 窯焼成部	E-1+F-1	□ 12.5、頸 10.2、頸高 3.6	製品	生焼	淡黄褐	白け ^{アカ} 石入	口頸片	
50	75	特大甕	1 窯焼成部下 位	F-1・2	□ [47.9]、残存高 7.0	置台?	赤良焼	暗橙褐	白け ^{アカ} 石入	口頸片	2段波状文 / 置台使用痕
51	73	特大甕	1 窯灰原?	窓外	□ [54.0]、頸 30.8、残存高 (11.1)	置台?	堅緻	灰色	白け ^{アカ} 石入	口頸片	2段波状文 / 脊端切面
52	74	特大甕	1 窯焼成下位	G-2	□ [53.0]、頸 41.8、残存高 (9.9)	製品	堅緻	青灰	白け ^{アカ} 石入	口頸片	2段波状文 / 置台使用痕
53	78	大甕	1 窯灰原?	窓外	□ 39.1、頸 30.1、胴 67.1、 高 71.8、頸高 10.85、胴高 60.9	置台	堅緻	灰色	大け ^{アカ} 石多	1/4	胴外 Ha 叩、内 Da 当て、底外 He 叩、内 Da 当て / 口頸部繋 ぎ痕
54	79	大甕	1 窯前庭部	窓外	□ 42.1、頸 30.2、残存高 23.0	置台?	堅緻	灰色	大け ^{アカ} 石多	口頸片	外 Ha 叩、内 Da 当て
55	80	特大甕	1 窯焼成部	A-1・2+ B-1・2+ C-1・2+ D-2+E-1・2+ F-1・2+ G-1・2+I-2	□ 胴 88.3	置台	堅緻	黒灰、 暗赤褐	大け ^{アカ} 石多	胴片	胴外 Ha 叩、内 Da 当て / 丸底 底部積み上げ技法

番号	実測	器種	出土地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	残存	特記
56	77	大甕	1 窯焼成部～前庭部	C-1 + E-1・2 + F-1・2 + G-1・2 + H-2 + I-1・2 + J-1・2・3 + 窯外	胴 71.9	置台	堅緻	暗赤褐	大ヶ石多	胴片	胴外 Ha 叩、内 Da 当て
57	76	大甕	1 窯焼成下位～前庭部	F-1 + G-1 + H-1 + I-1・3・4 + J-1・2・3・4 + K-4 + 窯外	胴 71.4	製品	堅緻	灰色	底白灰、大ヶ石多	胴片	胴外 Ha 叩、内 Da 当て
58	60	代用け	1 窯焼成下位	F-1	長 6.4、幅 2.1、厚 1.3	窯道具	堅緻	黒褐	白ヶ石入	完存	大甕胴端切クズ
59	61	代用け	1 窯前庭部	I-2	長 8.7、幅 0.4、厚 1.6	窯道具	堅緻	暗赤灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
60	63	代用け	1 窯前庭部	J-2	長 11.0、幅 0.9、厚 1.5	窯道具	堅緻	暗赤灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
61	62	代用け	1 窯前庭部	J-2	長 6.7、幅 1.9、厚 1.3	窯道具	赤良焼	暗赤灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
62	64	代用け	1 窯前庭部	J-2	長 5.6、幅 0.5、厚 1.5	窯道具	赤良焼	暗赤灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
63	65	代用け	1 窯前庭部	J-2	長 5.2、幅 0.7、厚 1.5	窯道具	赤良焼	暗赤灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
64	66	代用け	1 窯前庭部	J-3	長 6.7、幅 0.3、厚 1.7	窯道具	赤良焼	暗赤灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
65	67	代用け	1 窯前庭部	J-3	長 3.5、幅 0.3、厚 2.7	窯道具	赤良焼	暗赤灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
66	68	代用け	1 窯前庭部	J-4	長 6.4、幅 0.6、厚 1.0	窯道具	堅緻	青灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
67	69	代用け	1 窯前庭部	J-4	長 5.3、幅 0.4、厚 1.2	窯道具	堅緻	青灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
68	70	代用け	1 窯前庭部	J-4	長 3.5、幅 0.4、厚 0.9	窯道具	堅緻	青灰	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
69	71	代用け	1 窯前庭部	J-4	長 2.9、幅 0.5、厚 0.9	窯道具	堅緻	灰色	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
70	58	代用け	1 窯灰原？	窯外	長 4.4、幅 0.4、厚 1.3	窯道具	堅緻	灰色	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ
71	59	代用け	1 窯灰原？	窯外	長 1.7、幅 3.0、厚 1.5	窯道具	堅緻	灰色	白ヶ石入	完存	甕切クズ /Ha 叩 Da 当て
72	72	代用け	1 窯前庭部	1 窯内	長 7.0、幅 0.4、厚 1.7	窯道具	堅緻	灰色	白ヶ石入	完存	大甕両面切痕クズ

遺物観察表凡例

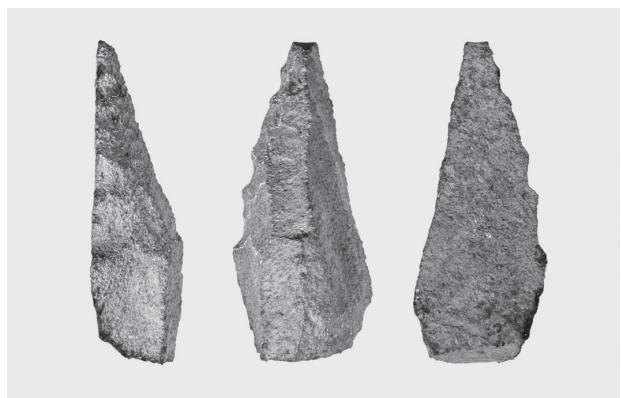
- 本書または観察表で示す須恵器の器種名については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸（田嶋明人 1988）及び北野博司氏の貯蔵具器種分類案（北野博司 1999）に基いた。
- 出土地点は出土した遺構の部位を、取り上げ詳細は遺物注記の表記内容を記載した。
- 遺物図版の縮尺は食膳具と窯道具を 1/3、瓶 A と平瓶、横瓶を 1/4、甕類を 1/6 で掲載した。
- 須恵器の実測図右断面に示す「←→」はヘラケズリ調整の範囲を、外面や内面に記される「→」はケズリに伴う砂粒移動の方向を示す。また、図の中心線上に示す「▼」は反転図化を示す。
- 遺物説明、観察表で示す法量計測について、口径は口縁上端部での直径を、底径は底部切り離し外端部での直径を、高台径は台の外端部径を、頸部径（基部径）は頸部（基部）屈曲部の最小径を、胴部径（鉢径）は胴部（鉢部）最大径を、脚部径は脚下端部での直径を示す。高は器高を、頸高は口頸部の高さ、胴高は胴部高、台高は台の高さ（脚の場合は脚高）、なお横瓶の胴部については俵型のために俵の長さを胴幅として示した。器高等の高さ計測については、器形の安定している部分での平均的な数値とした。
- 遺物説明、観察表の土器成形痕跡の中で、叩き出し成形に伴う叩き痕跡については、内堀信雄分類案に基づき（内堀信雄 1988 「須恵器甕類に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』）、H 類を平行線文、D 類を中心円文とし、H a 類は平行線彫り込みに直交して木目のあるもの、H b 類は右上がり斜交の木目のあるもの、H c 類は左上がり斜交木目のあるもの、H e 類は木目の見えないものとし、D a 類は木目の見えないもの、D b 類は同心円彫り込みに沿って同心円木目の見える芯材使用のもの、D c 類は柱目状木目のもの、SD 類は木製無文当て具の年輪痕跡のものとした。
- 坪 B 蓋の重ね焼きについて、I 類は蓋身正位組み合わせの重ね焼きで、I a 類は蓋天井に重ね焼きの痕跡が確認できないもの、I b 類は蓋の天井部に 3 個体交互重ね焼きの痕跡が残るものである。II 類重ね焼きは蓋を逆位にして正位の身に重ね焼きするもので、その単位のまま柱状に積み重ねる II a 類と単位ごとに正位と逆位の交互に積み重ねる II b 類。蓋と身を重ねて焼くのではなく、蓋は蓋。身は身同士でそれぞれ重ね焼きするものは III 類とする。

【参考引用文献】

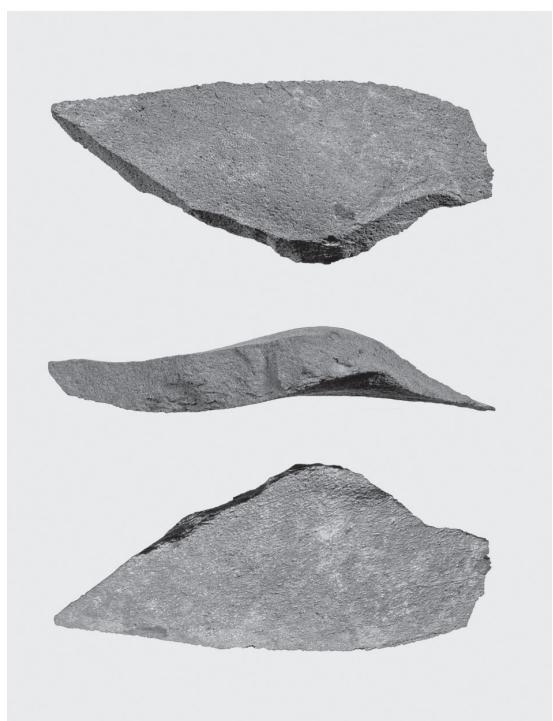
- 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第 8 号 北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会・石川考古学研究会
- 望月精司 1994 「南加賀古窯跡群における 8 世紀中頃の画期」『北陸古代土器研究』第 4 号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 2010a 「論集作成における用語の統一」『古代窯業の基礎研究 - 須恵器窯の技術と系譜 -』窯跡研究会
- 望月精司 2010b 「北陸」『古代窯業の基礎研究 - 須恵器窯の技術と系譜 -』窯跡研究会



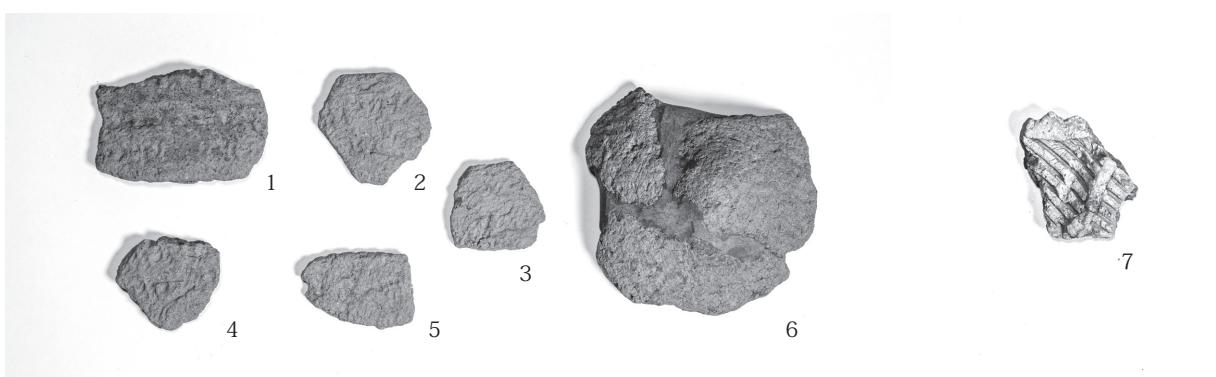
B-3 区 翼状剥片出土状態



ナイフ形石器

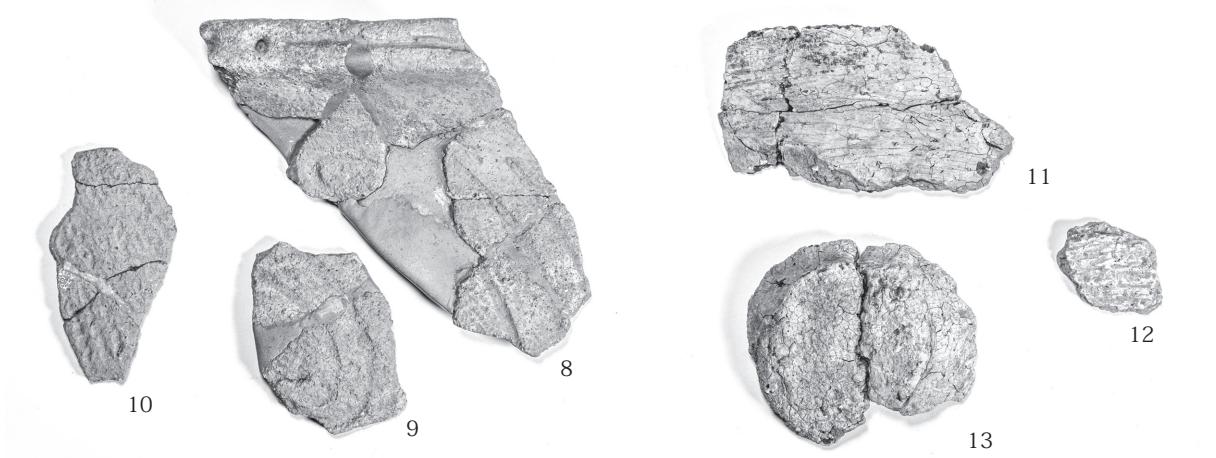


翼状剥片



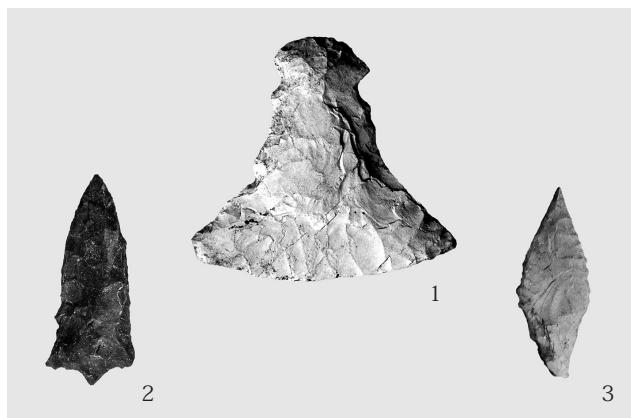
縄文土器Ⅰ群

縄文土器Ⅱ群

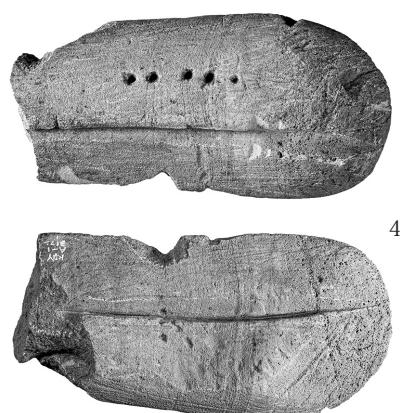


縄文土器Ⅲ群

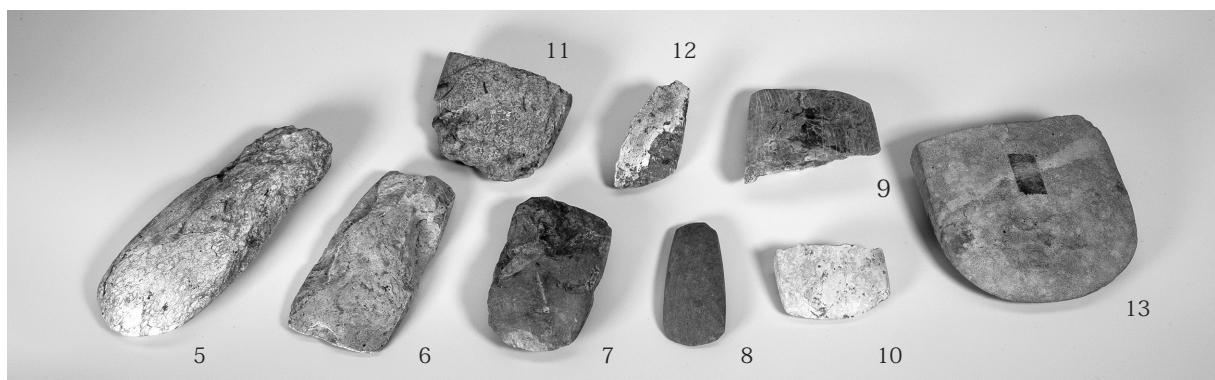
縄文土器Ⅳ群



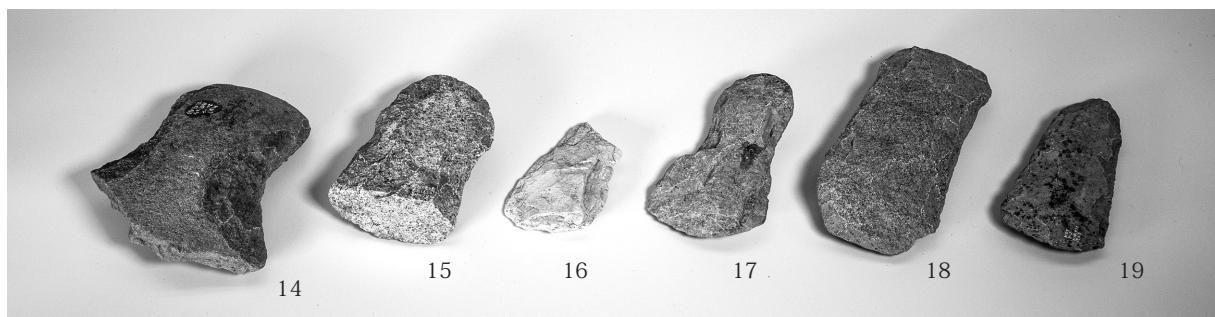
石匙・石鏃



石冠



磨製石斧



打製石斧



石錘・磨石・敲石



河田山遺跡群の連なる尾根全景・一番手前の尾根が弥生遺跡のある南尾根（南東上空から）



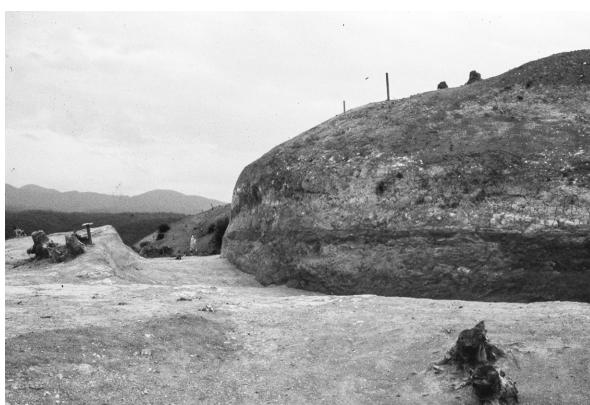
河田山弥生遺跡尾根全景・1号墳保存区域中央森の左がB-3区・右が火葬墓のあるB-2区（北西上空から）



河田山弥生遺跡B-3区 環濠掘削前全景（北西上空から）



河田山弥生遺跡 B-3 区 環濠完掘時全景（北西上空から）



環濠 1 完掘近景（西から）



環濠 1 調査風景



環濠 1 西端部立ち上がりおよび遺物出土状況



環濠 1 A ライン土層断面



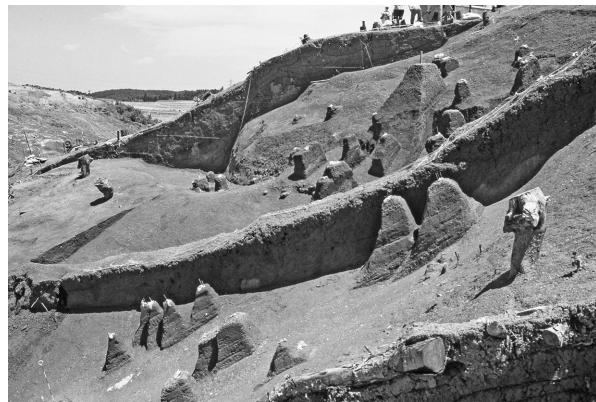
環濠2 完掘近景 (北西から)



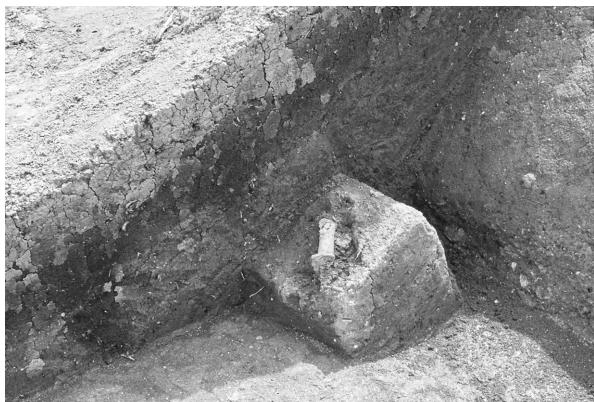
環濠2 Dライン土層断面



環濠2 Eライン土層断面



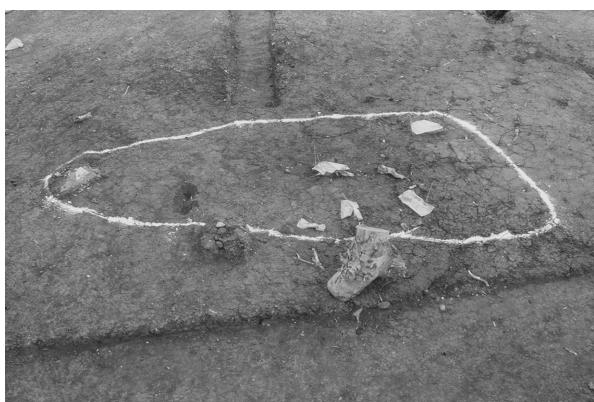
環濠2 Fライン土層断面 (奥はDライン)



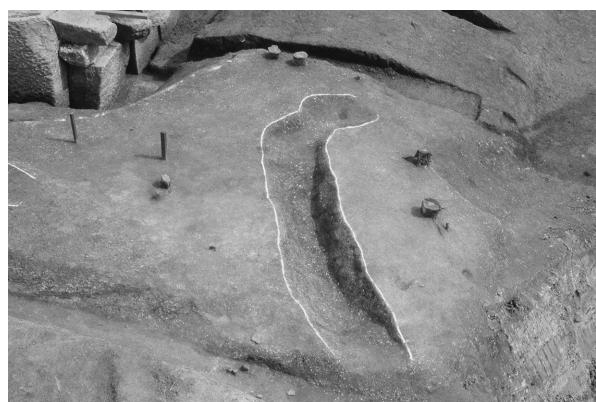
環濠2 Cライン9層 器台脚出土状態



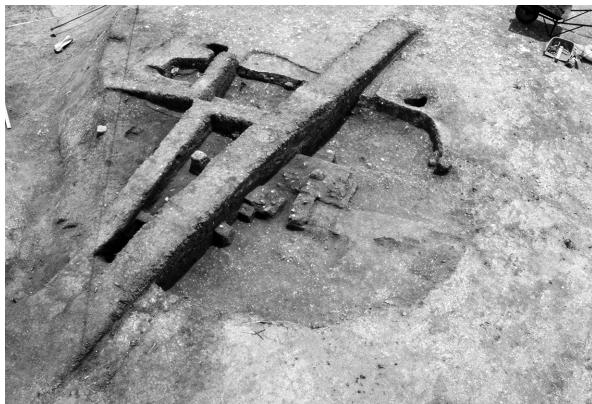
環濠2 Fライン上層流土中遺物出土状態



10-3号土坑プランおよび上面遺物



B-3溝1 完掘状況



1号住居跡 ベルト設定・遺物出土状況



1号住居跡 完掘全景（北東から）



1号住居跡 完掘全景（西から）



3号住居跡 調査風景



2号住居跡 ベルト設定・遺物出土状況（南西から）



2号住居跡 土層断面（北西から）



3号住居跡 遺物出土状況（北東から）

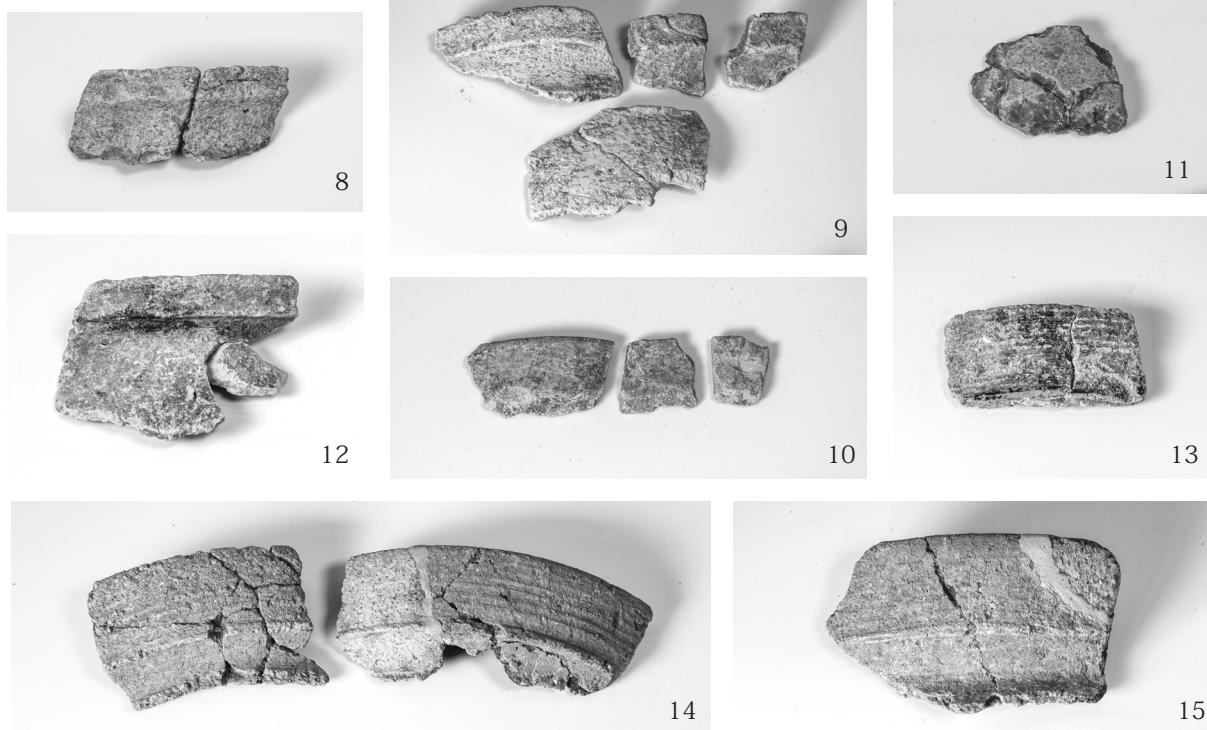


3号住居跡 完掘全景（東から）

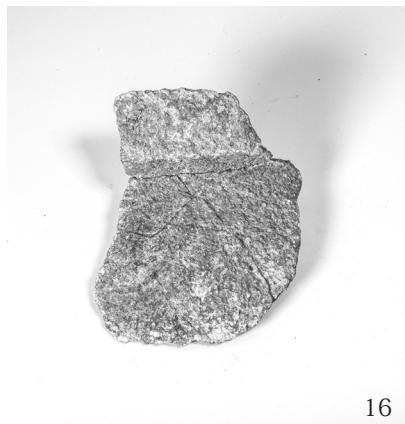
河田山弥生遺跡 環濠1（北西テラス）



河田山遺跡1号住居跡



河田山弥生遺跡 1号住居跡



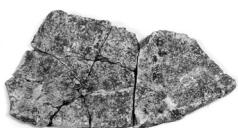
16



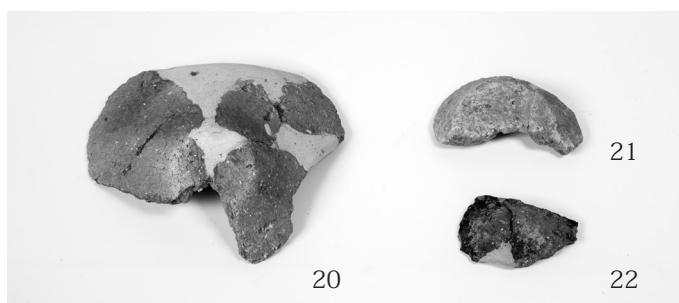
17



17 内面



18



20



21



22



19

河田山遺跡 2号住居跡



23



24



25



26



27



28

河田山弥生遺跡 3号住居跡



32



30



29

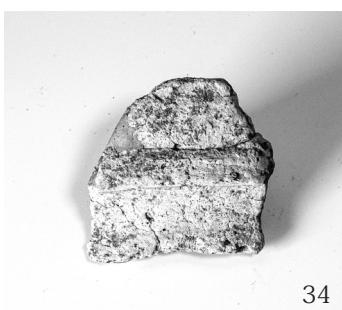


31



33

河田山弥生遺跡 10-3号土坑



34



35



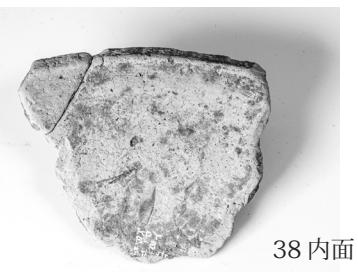
37



36



38



38 内面

河田山弥生遺跡 B-3 区 12 号墳周辺



40



41



42



43



44



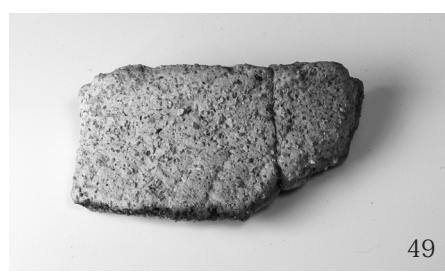
46



45

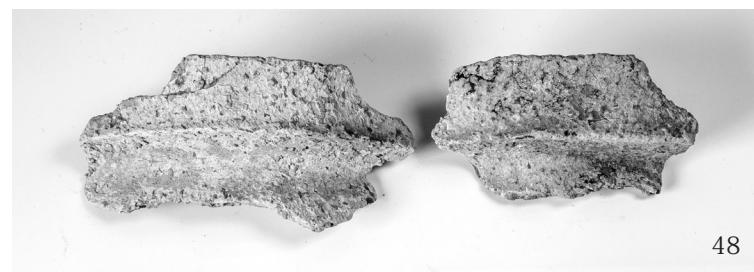


47



49

河田山弥生遺跡 B-3 区



48

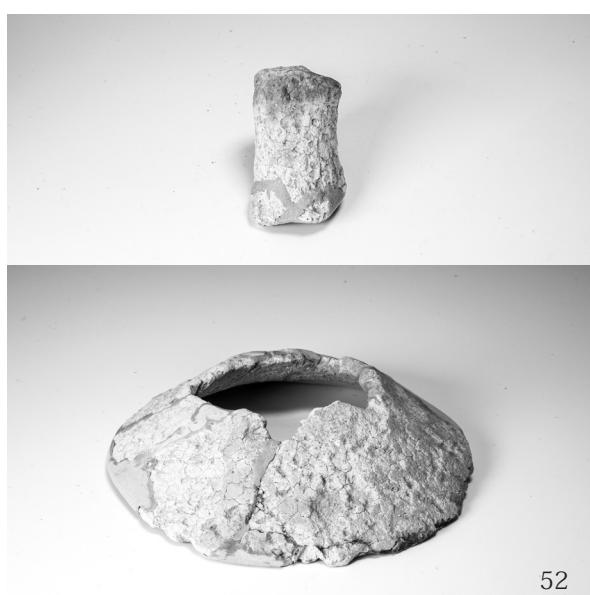


50

河田山弥生遺跡 B-3 区



51

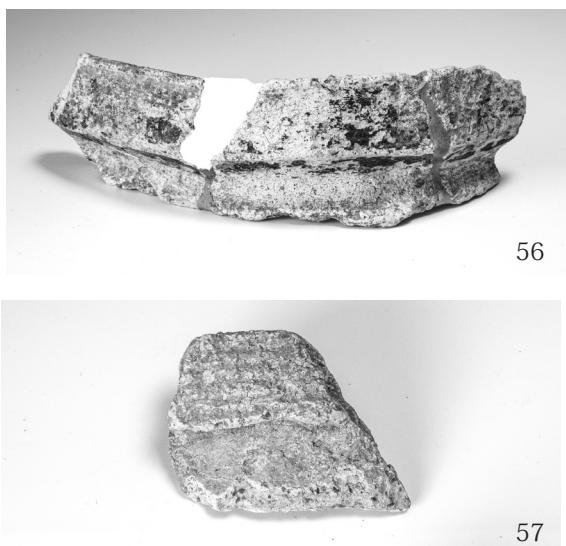


52

河田山遺跡 B-2 区



53



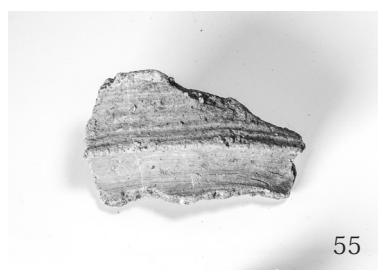
56



57



54



55



58



64

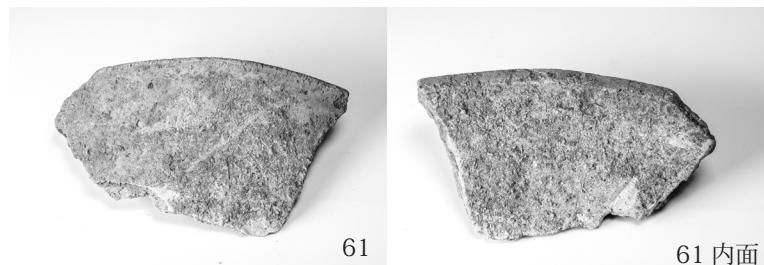
河田山弥生遺跡 B-2 区



59



60



61

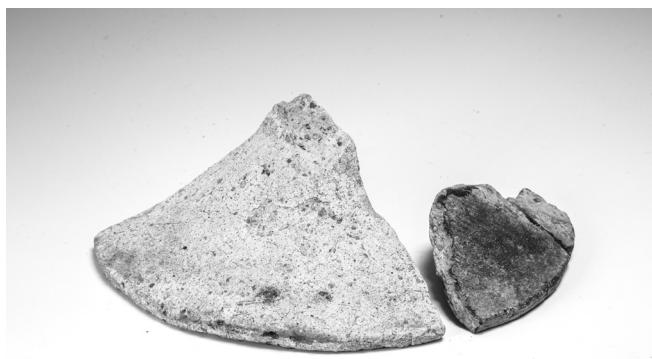
61 内面



62



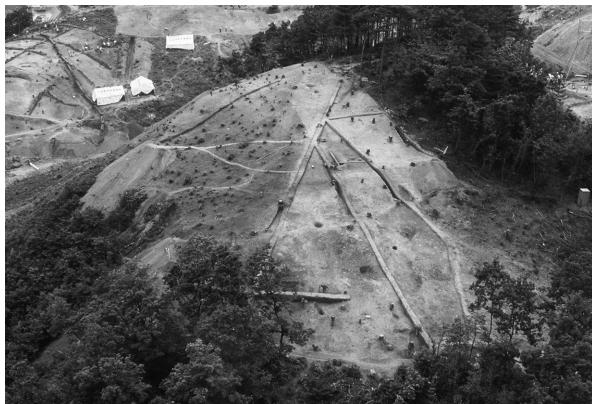
66



63



65



河田山火葬墓関連 B-2 区 調査区全景（南から）



同左 調査区全景（西から）



1号火葬墓 発見時状況



1号火葬墓 内部火葬骨



1号火葬墓 墓壙完掘



2号火葬墓 発見時状況



溝 SD02・土坑 SK02 完掘状況（北東から）



溝 SD02 土層断面



土坑 SK02 土層断面（上部）



土坑 SK02 下部（焼壁）土層断面



土坑 SK02 完掘状況



土坑 SK06 土層断面



土坑 SK06 完掘状況



土坑 SK07 土層断面



土坑 SK07 完掘状況



B-2区帯状テラス B ライン土層断面



B-2区帯状テラス A ライン土層断面



B-2区帯状テラス 遺物出土状況
(上面における弥生土器の2次的流れ込み出土状況)



B-3区帯状テラス(12号墳裾) 遺物出土状況
(下層における飛鳥時代の須恵器出土状況)



2号火葬墓の骨蔵器と蓋利用の無台坏 (1号火葬墓ほか巻頭カラー参照)



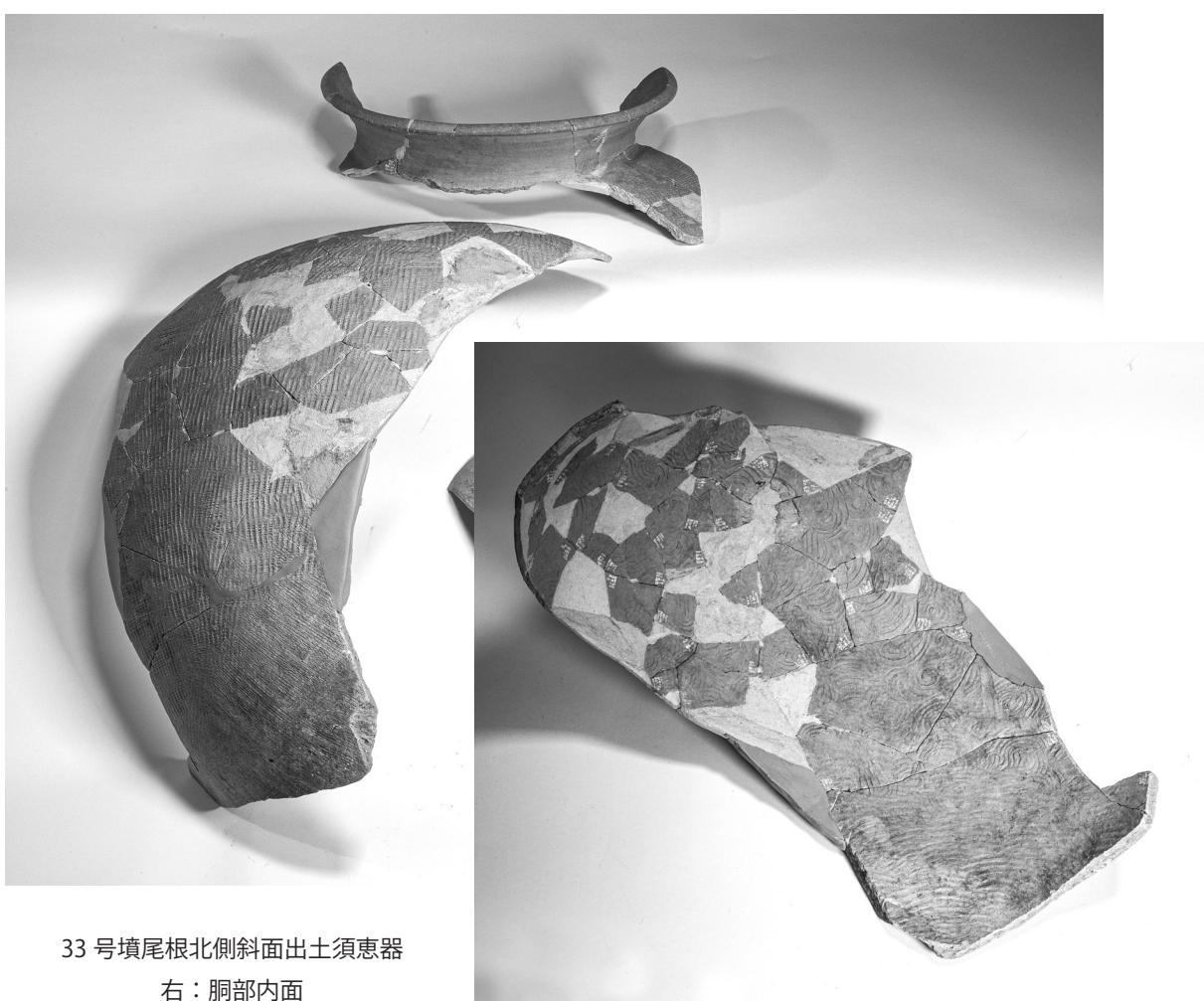
1号火葬墓周辺出土須恵器



2号火葬墓近隣出土須恵器

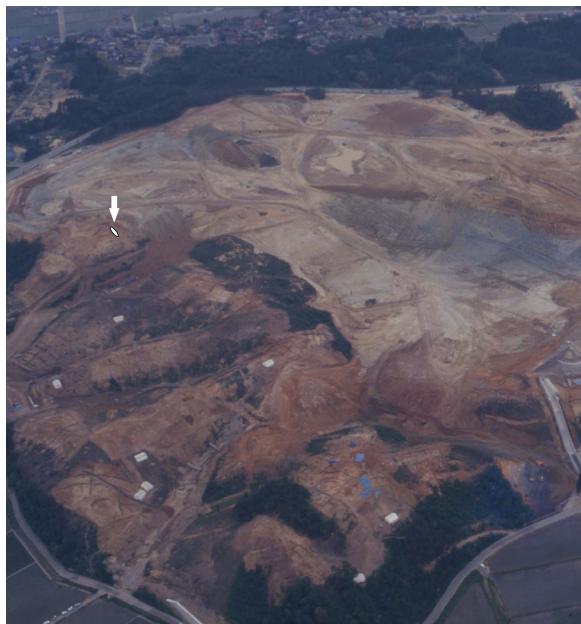


33号墳尾根（16号墳出土須恵器）



33号墳尾根北側斜面出土須恵器

右：胴部内面



窯跡の位置と周辺地形



窯跡全景（床面遺物）



窯跡調査前の地形



窯体部分全景（床面遺物）



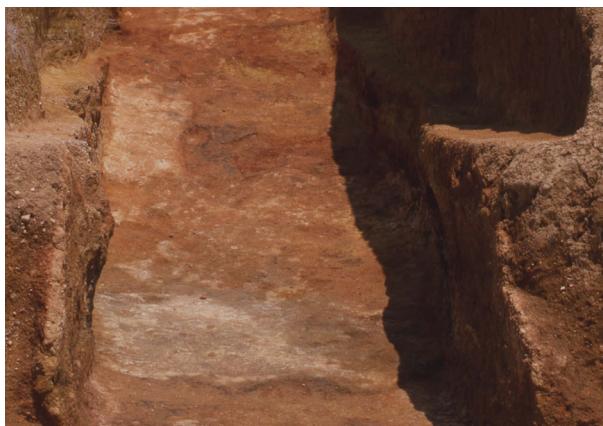
窯跡の位置と河田山60号墳



窯跡全景（完掘調査後：前庭部掘り過ぎ）



窯体側壁状況（掘削工具痕）



窯体焼成部境付近の床と壁状況



窯体全景（断ち割り調査後）



1号窯跡出土須恵器食膳具（後列左のみ坏A身、他は坏B蓋身）



1号窯跡出土須恵器貯蔵具（前列左：平瓶、前列中央：長頸瓶、他は横瓶）

